
死神様の雑用係！

海野 真珠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神様の雑用係！

【Nコード】

N0269N

【作者名】

海野 真珠

【あらすじ】

神守 鈴。27歳。女。職業…異世界トリップ?! ———旧家に生まれた私は、いわゆる巫女。代々神様を御守りし、お仕えしてきた家系。どうしてか、当代巫女の私は“死神様”に気に入られ、死神様の雑用係に大抜擢。人を殺せない、と訴えた私に、死神様はのたまった。「私が間違っただけで殺した人間の人生まっとうしてこい」と。 ———んなことできるかあっっ!! と大絶叫した私を軽く無視して、ポイッと捨てられた先は、異世界デシタ。せめて地球にして欲しいと心の底から願った私に、死神様はサラリ

と一言。「同じ世界に魂が二つもあると、もとの身体が死んじゃうよ」それは困るってコトで、しぶしぶ異世界で他人の人生まっとうします。

——しかし、死神がうっかり間違っって人を殺しているのだろうか・

・
★華月編連載中。魔王様から逃げろ！！★

プロローグ いい加減な死神様 (前書き)

宗教観とか一切無視で、ただのギャグとしてお楽しみください。

プロローグ　　いい加減な死神様

山奥の屋敷に一人、修行のために暮らしている。

朝夕の滝行は精神統一と肉体強化にはもってこいだが、夏でも凍えそうなのはどうかして欲しい。

そんな生活を送る私、神守鈴。27歳。女。

エエ年した女が山奥で一人暮らし・・・哀れんでくださらなくて結構ですが。

代々巫女の家系のウチは、15歳になると神様が守護についてくださる。

母は水神様にお仕えしていたし、祖母は雷神様にお仕えしていた。だから、私もそう思っていたのに・・・

15歳になった瞬間、私の目の前に現れたのは“死神様”だった。

4

「神守の巫女か・・・ふむ。ちょうど良い。巫女、これからオマエは私の雑用係りだ。光栄に思い私に尽せ」

年のころは10歳位の愛らしい容貌の少女は、その手に大きな“鎌”を持ち、真っ黒の衣装で滝行真っ最中の私を見下しそう言った。

「し・・・死神様?!」

「そう。私は死神。当代巫女よ、オマエはこれからこの私、死神の雑用係だ。丈夫そうなその身体、私のために使うがいい」

——そりゃ、風邪一つ引いたことのない丈夫な身体ですけど!!

愛らしい少女の顔からは想像できない上から目線の辛辣な言葉に、
頷く以外の選択肢は存在していなかった。

神守の巫女は、神様の下されたお言葉には逆らえない。

——それがどんな理不尽な言葉でも!!——

「では巫女。私と契約を。」

私はヤエ。死神ヤエ。オマエはこの私、死神の雑用係してこれから後私に仕えるのだ」

屋敷の本堂に場所を移し、さっさと契約を進めるヤエ様に慌てて私も続く。

「私は鈴。神守の巫女。当代巫女の鈴は、死神ヤエ様にお仕えすることをここにご契約申し上げます」

出されたヤエ様の左手に自分の右手を重ねて、死神様と契約を結んだ。

右手の甲に現れた痣のような紋様は、契約成立の証。

これで私は生涯、死神様にお仕えすることになる。

——何度も言うが、神守の巫女に選択の自由はない——

「うむ。では雑用。さっそく仕事だ」

満足そうに紋様を眺めていた死神様の言葉に私は青くなった。

「し、死神様！！ 私、人は殺せません！！！！」

「当たり前だ。人間のオマエが人間を殺しても、それは私の仕事が増えるだけで手伝いにはならん。むしろそんな楽しいことは自分でやる。」

雑用の仕事は、私が“うっかり” “間違えて” 殺した人間の残りの人生まっとうするだけでよい。どうだ、簡単だろう？」

半泣きで訴えた私に、死神様はあっさり軽くのたまった。

簡単って・・・ うっかりって・・・ 間違えてって・・・

「そ、そんなことできるかあっつ！！」

大絶叫した私は、間違っていないと今でも思う。

――が、死神様は強かった。

大絶叫した私を綺麗に無視して、死神様は手にしていた鎌を振り下ろした。

ぐにやりと出来た空間に、まさに“ポイ” と捨ててくださった。

「本体の記憶はそのまま自由に閲覧可能だ。オマエの身体は仮死状態でこっちの世界に残るから心配するな。私に用ができたら“呼べ” 。 ま、頑張ってな。私の雑用巫女」

ぐるぐる回る背景に、直接響く死神様の声。
軽い吐き気を我慢しつつ、死神様に一言。

「せめて肉体は布団の中に入れてくださいー！！！！」

爆笑と共に聞こえた了承に安堵しつつ溜息をついたら、ドシンと衝撃。

落下の間隔にビックリして目を開けたら、紫の髪と紫の瞳の人々に覗き込まれていた。

「魔道師様！！」

頭のとっぺんから出ているようなキンキン声にビックリして、気絶したフリで死神様を“お呼び”してみた。

「死神様！！ ヤエ様！！！！！！」

必死で呼んでいるのに、返された声はひどく億劫そうで。

「なんだ、うるさいぞ雑用」

肉体は布団に入れておいてやったと言われても、今はそれどころじゃない。

「魔道師様って何ですか？！ 紫の髪と瞳って何ですか？！ あの爬虫類みたいなのは何ですかー！！」

目の前で覗き込まれていたのは、紫の蛍光色の髪と、紫のパステルカラーの瞳の、トカゲのような竜のような人間ではない爬虫類よりの生物だった。

「頭ン中は閲覧可能だって言っただろ。勝手に自分で調べろ。あ、一応注意してやる。自殺とそれに準ずる行為は禁止だ。常に生きることを考えてソイツの人生キツチリ終わらせろ」

それが雑用の仕事だ、と言われれば反論できない。

――が。

「せめて地球生物にしてくださいー!!」

そう。絶対に、ここは地球じゃない!!

「言ってなかったか？ 同じ次元に魂があると、モトの身体が消滅するぞ？」

それでもいいなら考慮してやる、と言われて、色々私はアキラメタ。

「……ココでいいです。あの、この人の寿命、あとどのくらいあるんですか？」

自殺がダメとなると、私はこの人の天寿をまっとうしないと自分の身体に戻れないことになる。

だから聞いたのだが、死神様は冷たかった。

「ンなコト雑用に教えられるか。いいからオマエはさっさとソイツ

の人生まっとうしてこい。じゃあな」

一方的に切り上げられ、私はいわゆる『異世界』に放置された――

こうして、私の死神様の雑用係としての人生が幕開けたのでした。

プロローグ　　いい加減な死神様　　（後書き）

始めてしまいました・・・

ちよつと系統の違う作品を目指して。

感想いただけると、泣いて喜びます。

01・エイシャ

「大丈夫よ、私の愛しい子・・・ さあ、笑ってちょうだい」

ボロボロと涙を流しながら私の右手を握る美少女に私は言う。
その後ろには、必死で涙をこらえる三人の美青年。

「エイシャ・・・」

私の左手を握る美丈夫に名を呼ばれ、ゆるく頭をそちらに向けた。

「陛下・・・ そのようなお顔をなさらないでください」

苦しげに歪められた夫の顔。

ただ一人の寵妃として愛されてきた“エイシャ”の人生は、もう
終わろうとしていた。

「ずっと御側におります、とお約束いたしましたのに、御側を離れること、お許しくださいませ」

ずっと愛されてきた。ただ、エイシャだけを愛してきた夫。エイシャも、ただ一人この夫だけを愛し、尽くしてきた。

「シグル、私の気高い王太子。お父様を助けて差し上げてね。デュオ、デイル、私の自慢の王子様。お兄様を支えて、お父様の力になってね。シュエル、私の可愛いお姫様。お父様のこと、大切にね。」

私の愛しい子供たち。幸せになってちょうだい」

握っていた私の手を頬に当てて、壊れたマリオネットのように首を振るエイシャの娘、シュエル。

国一番の美姫と謳われる美しい少女は、まだまだ母親が恋しい年頃だ。

「母上・・・」

苦しげに歪められたシグルの顔に、ふわりと笑ってみせる。

「はは、うえ・・・」

「ははうえっ」

デュオもデイルも堪えきれなくなった涙を流し、シュエルの手を包み込むようにエイシャの手を握る。

何回、何十回と経験しても慣れることの無いこの“別れ”。そろそろ死神様が現れるだろうこともこれまでの経験で知っている。

「陛下、シュエルをどうかお守りください。シグルを、デュオを、デイルを、お導きください」

そう言ってふと視線を上げれば、そこには死神様の姿。

相変わらず愛らしい童女の外見には不釣り合いな笑みを浮かべ、そこにいた。

「ご苦労だったな、雑用。しばらくは自分の肉体で過ごさせてやる」

そう言って鎌を振られ、ふわりと浮遊感。

子供達の号泣と、夫の名を呼ぶ声を最後に、エイシャとしての生涯を終えた。

ドシンツという衝撃に目を開ければ、そこには見慣れた天井。
戻ってきたらしい自分の本来の肉体に意識を集中させれば、強張った筋肉が悲鳴をあげた。

——— いたいいたい いたっ

ぴきぴきぺきぺきは勘弁して欲しい！！
慣れたくて慣れた感覚ではないが、このぐらいならもう少しじつとしていれば問題ないだろう。

ぐぐ きゅるるるる

.....。

身体は動かなくても、腹の虫は動くらしい。

全身の感覚が戻ったところで、ゆっくり起き上がりベッドから抜けだした。

ベッドサイドに置いてある電波時計を確認すれば、“飛んで”から二日しかたっていないかった。

だんだん時間の感覚が合わなくなってくるな、などと独り言を漏らせば、自己主張をするように腹の虫が盛大に鳴く。

——二日も食べてないんじゃない仕方ない！！

本来ならば滝行の時間だが、このまま行に出たら確実に倒れる。動くのも億劫だが、食事をしないと私がヤエ様の餌食になってしまうー！！

ぴきぴきぺきぺきの身体を引きずって台所へ。

いつ“飛ぶ”か判らないので、なま物の無い冷蔵庫。悲しい・・・冷凍ご飯を取り出して、おかゆに決定。

しばらくは自分の身体で生活できるらしいから、今晚は豪華に食べてやる！！

ぐつぐつ煮立つ鍋を見ながら、エイシャのことを考えていた。

今回“飛んだ”のは、中世風のイーガルという国だった。

イーガル国王、ジダン陛下の唯一の妃、エイシャが用意されていた私が一生を送るべき肉体だった。

エイシャは、イーガル国に侵略された、ルードイ国の第一王女だった。

しかし、生母の身分は低く、ルードイ国では第一王女とは名ばかりの、何の後ろ盾の無い王女として育った。

戦略戦争が始まったとき、父王によって人質としてイーガル国に渡された。

この時、エイシャはたった10歳の少女だった。

侍女さえ連れず、単身人質として送り込まれたエイシャを時のイーガル王——ジダンの父親にあたる——は、人質ではなく、客人として扱った。

そもそもこの侵略戦争は、エイシャの父ルードイ国王と、王弟との内乱がことの発端だった。

無能な国王に、有能な実弟が反旗を翻した。

しかし、無能な国王の下で甘い汁を吸っていた臣下達の大半は国王側についた。

情勢が悪化し、民達に多大なる被害が出始めた頃、王弟は賢王と名高いイーガル国王に助力を求めた。藩属国となることを条件に進軍を依頼したのだ。

愚王の治世で苦しめられている民を憂いたイーガル国王は、侵略軍として進軍させた。

その侵略軍に慌てたルードイ国王は、自らの娘、第一王女の身分にあったエイシャを単身人質として送り込んだのだ。

しかし、その行為がイーガル国王の逆鱗に触れた。

ルードイ国王はじめ、加担したものは全員イーガル軍によって捕えられ、藩属国ルードイの新王となった王弟に引き渡された。

新王となった王弟は、加担した者及び前王の血筋を処分——王妃を始め、側室、エイシャの異母兄弟全て——し、それをイーガル国に対する忠義とした。

その折、エイシャも処分の対象だったのだが、エイシャの母の身分が低かったこと、同母の兄弟が居なかったこと、既に他界していたこと、そして、イーガル国がその身を預かっていたことを理由に生き長らえた。

人質としてではなく客人として扱われていたエイシャは、国家間が平定された後は王女のいなかったイーガル国王夫妻に実の娘のよ

うに可愛がられて育った。

もともとエイシャの容姿は美しく、その生い立ちゆえに思慮深く穏和な性格だったのでイーガル王家内でも幸せに暮らしていた。

そんな幸せに亀裂が入ったのは、エイシャが16歳になった年のことだった。

20歳の誕生日を迎えたジダン第一王子の祝賀会に参加した、ルードイ国第二王女ミジャン——エイシャの従姉妹で同年の、第四位王位継承者——に、謂れの無い言葉の暴力をかけられた。

ミジャンは、ジダン王子の妃になりたいと正式にイーガル国へ申し入れをしていたが、ジダン王子本人から断られていた。

いわく、藩属国の第二王女の身分では迎え入れることはできないと。

にもかかわらず、本来ならば処分されるべき身分のエイシャが、イーガル王家の一員として、自身が望んでやまないジダン王子の隣に当然のように並んで立っていたのが気に入らなかったのだ。

宴の席で口汚く罵られ、手を上げられそうになった。

公式の場での、王女の乱行。国賓であるミジャンを止められるのは、王族だけ。

それを止めたのは、第二王子のザット。

ミジャンの両腕を拘束し、声高に言った。

「我が義姉、未来の王妃に対する無礼はやめていただきたい」と。ザット王子に肯定を返したのは国王夫妻。

承諾の意を返したのは臣下達。

祝福を贈ったのは、国賓の諸外国の王族や重臣達だった。

「エイシャ、私の妻になってください。ただ一人の愛する妻として、これから私の隣に立ち続けてほしい」

その場でされた、ジダン王子からのプロポーズ。

真摯に告げられ、ただ嬉しさだけがエイシャの身を支配した。
涙しながら、

「はい、我が君・・・」

と返せば、強い力で抱きしめられた。

いつの間にか、ミジャンの姿が消えていた。

皆から祝福されて、エイシャは幸せだった。

母国では、第一王女とは名ばかりの日陰の身で、父王には人質として打ち捨てられた。

イーガルへきてから、家族の暖かさを知った。それでも、いつかは無くなるのだと、心のどこかで覚悟していた。

今やっと、本当の幸せを手にした。

慶事が重なった祝宴は、遅くまで続いた。

エイシャの身を氣遣った王妃が、一足先に一緒に下がらせてくれた。

会場を後にし、居住区に戻る薄暗い廊下に入ったとき、エイシャの目にキラリと光る刃がうつった。

衛兵が気づくより早く動いた刃に、とっさに王妃を庇ったエイシャ。

しかし、刃は元々エイシャを狙っていた。

背中からわき腹にかけて走る熱。鈍い痛み。

王妃の悲鳴と、衛兵の声。視界の端にうつった、衛兵に取り押さえられるミジャンの姿。

そして、遠くから聞こえるジダン王子の声。

幸せの絶頂で、このまま死ぬことを望んでしまったエイシャ。

そして、その波動に呼ばれた死神やエ様。

あまりにもその波動が強すぎて、エイシャの天寿を確認する前にうっかり鎌を振り下ろしてしまったらしい。

ここで、エイシャ本人の人生は終わってしまった。

しかし、エイシャの天寿はまだ残っていた。

そのため、私が“飛ば”されたのだ。

エイシャの肉体に飛ばされ、直前の記憶までを確認し、私の魂がエイシャの肉体に同化する。

それを確認して目を開けば、そこには、心配そうな顔で覗き込むジダン王子の顔があった。

「我が君・・・」

意識せずに呼んだ呼び名は、エイシャの心が望んだのだろう。こうして私の、エイシャとしての人生がはじまった。

空になった食器を片付け、ぐぐっと伸びれば、ちぢこまっていた

身体が伸びた。

行に入る前に身体を清めようとバスルームに向かう。

——二日もお風呂に入っていないとか考えるのはやめよう！！

シャワーを浴びて行の支度をすれば、いつの間にか現れた死神やエ様。

しばらくは自分の肉体で過ごさせてやる、と偉そうに言われたと思ったが気のせいだったのか。

それとも、また、うっかり、間違って殺してきたのか。

——どっちにしろ、私にはろくでもないことに違いない！！
が。
今更この主に何を言っても無駄だ・・・。

文句を言ったところで改善されないのはわかってるんだ。
この主の雑用になって、学んだことの一つ。

「ヤエ様、いかがなさいました？」

手を止めてヤエ様を見上げれば、面白く無さそうな顔。

「雑用、もう少し驚いたらどうだ？」

ああ。私の反応が気に入らないのか・・・。

「そうはおっしゃられてもヤエ様。もう十年の付き合いですから、
今更です」

突飛な行動には慣れてるといえば、チツと舌打ちされた。

10年前から変わらない童女の見たと、このギャップにも慣らされた。

「まあいい。今度はブタにでも飛ばしてやる」

「嫌がらせのためにわざと殺してくるのはやめてください。それと、人類以外はヤエ様の管轄ではないと存じ上げておりますので」

そう、死神様にはいくつかの管轄が存在するらしいのだ。そのいくつかの分類の中で、ヤエ様は人類担当。

見た目が爬虫類だろうと海中生物だろうと、人類と分類される生物しか殺せない。

それだけは安心した。

魚とかになって三枚に捌かれるのも、ゴキ〇リになって駆除されるのも嫌じゃないか!!

「チッ おもしろくない」

昔はあんなにからかいがあったのに、と言われて脱力する。

——こーゆー人だよ、死神様は!!

「それよりもヤエ様、何か御用があったのでは？」

一向に進まないの、痛い頭を抑えつつ聞いてみる。

——聞きたくないけど!!

「ああ。雑用、仕事だ。サッサと行くぞ」

そう言っ、鎌を振り下ろそうとするヤエ様。

やっぱり聞きたくなかった!!

しばらくはこの身体だっ言ったじゃないか!! とか。

せめて豪華なご飯を食べてからがいい!! とか。

シャワーじゃなくて湯船に浸かりたかった!! とか。

色々あるけど、とりあえずは!!

「まっ、ヤエ様!! せめて布団に行かせてくださいー!!」

マイペースなヤエ様に待ったをかけて、何とかベッドにたどり着いた。

――布団じゃないと戻ったときに洒落にならないぐらい痛いんだ!!

横になったのを確認して鎌を一振り。ぐにやりと歪む空間に、引っこ抜かれた魂。

ソレをつまんで、ポイツといつものように捨てられた。

魂を身体から抜くことも、次元の歪みに入れることも、死神様にしか出来ないらしい。

「じゃあな、雑用。がんばれよ」

これもいつも通りに、ヤエ様の声が響く。

「はい」

と返事をして、衝撃に耐えるために目を瞑った。

02・フリーリア1（前書き）

フリーリア編。ちょっと続きます。
お付き合いください。

02・フリーリア1

豊かな国土を誇る、帝国オーストリッチ。

ほんの数年前まではその国土は三分の一程度しかなく、荒野が多く決して豊かとはいえないほど荒んでいた。

そんな、小国オーストリッチを帝国と云わしめるまで大きくしたのは、一人の王子だった。

名を、マテオ・オールド・オーストリッチ。

オールド・オーストリッチの名を与えられ王宮で育ったが、王妃腹の正統な王太子である第一王子と、側室であるが有力貴族の娘である母を持つ第二王子がおり、側室にもなり得ない身分の侍女腹の、何の後ろ盾も無い名ばかりの第三王子として、王位継承権すら持たない身であった。

そんなマテオは、15歳になると騎士団へ入団する。

幼少の頃より剣術に優れ、12歳の頃には指南役すら負かせるほどの実力だった。

忘れられた存在であったことが幸いし、身分にとらわれることなく騎士団へ受け入れられたマテオは、めきめきと頭角をあらわす。臣下へ下るのではなく一介の騎士にその身分を落とした。

このとき、オールド・オーストリッチの名を捨て、『テオ』という騎士としての人生を歩み始める。

それと時をほぼ同じくして、オーストリッチの南部から、貴石アイサヴィーの鉱山が発見された。

この貴石鉱山は、一つあれば二十年国家が潤うといわれるほどの財を産む。

そんな鉱山が、四つも発見されたのだ。

今まで隣国から見向きもされなかったオーストリッチは、一変して侵略の恐怖と戦うことになった。

アイサヴィーによって国庫が潤ってきたことから、国王は欲望のまま他国侵略を決めた。

侵略の恐怖に怯えるのではなく、こちらから攻撃することにしたのだ。

国土を広げるという欲に取り付かれた、国王の独断であった。

国王のこの決定と前後し、アイサヴィー鉱山のある南部の守りに出たテオは、一人の少女と出会う。

アイサヴィー鉱山を人々に教え、オーストリッチに財をもたらしただという、守り神とも女神とも呼ばれる少女。それが、フリーリアだった。

フリーリアは、鉱山のふもとの村で生まれ育った平民である。

父は採石場で働き、母は石の加工師をしていた。

特に美しいわけでもない平凡なフリーリアは、一つだけ人と違った才能を持っていた。

物の在る場所がわかるのだ。

はじめは、小さな物だった。不思議だね、で終わっていた。

きっかけは、フリーリアが五歳の時。

村の水が涸れた。

もともと荒地だったのだ。不思議ではなかった。

次の場所を探そうと、水のある場所へ行こうと、そう村人たちが話しているのをフリーリアが聞いていた。

「お水、欲しいの？」

可愛がってくれている村の若者に聞けば、

「そうだよ。お水が無いと、生きていけないんだよ」

と、教えてくれた。

だから、フリーリアはその若者に教えたのだ。

「あのね、フリーリアのお家の隣に、いっぱいお水があるんだよ」と。

フリーリアの住居の隣は、加工師である母の作業場になっている。若者は、そこに水が隠してあるのでは、と疑った。――が、石の加工には水がいる。フリーリアは、そのことを言っているんだろうと思い直した。

「それは、お母さんがお仕事に使うお水だろう？」

「違うよ。そっちじゃない、隣」

反対側には、何も無かったはずだった。

伝わらないことに焦れたフリーリアは、若者の手を取って家に向かって走り出した。

「おみずー！！」

と叫びながら走るフリーリアに集まっていた村人たちも後に続く。

着いた先は、やはり何も無いフリーリアの家の隣。

「フリーリア、何もないよ？」

困った顔で言う若者に、フリーリアは首を振る。

「ここにあるもん。いっぱい、ある」

そう言って指すのは、地面。

「地下かい？　ここを掘ると、地下水があるのかい？」

若者の言葉に、フリーリアはやっと伝わったことに嬉しそうに頷く。

「どうせ水がなきゃ移らないといけないんだ。フリーリアを信じて、掘ってみよう」

若者の言葉に、村人たちはフリーリアの指す場所を掘っていく。

若者の肩辺りまで掘った所で、土に水分が多く含まれた。

若者の背丈ほど掘った所で、じんわりと水が滲み出した。

フリーリアの言う通り、そこには地下水があったのだ。

「フリーリア、この他にも、地下水はあるかい？」

フリーリアはただ、聞かれたことに答えただけ。

「うん。あと、ふたつある。川もある！」

フリーリアの言葉通りに掘れば、井戸ができ、川も流れた。

荒れた地に水が流れれば、そこは穰土となり、豊かになる。

住む所が豊かになれば、仕事の効率が良くなる。

仕事の効率が良くなれば、採石量が増加する。

採石量が増加すれば、加工量も増える。

加工量が増えれば、技術が上がる。

技術が上がれば、高値がつく。

こうして、フリーリアの村はだんだんと豊かになっていった。

フリーリアは、恵みをもたらす守り神、豊穰の女神と呼ばれるようになっていく。

フリーリア十二歳の年、運命が動き出す。

アイサヴィー鉱山の発見。

フリーリアの母が、アイサヴィーの加工をしているときに漏らした一言が切欠だった。

「フリーリアを、このアイサヴィーで飾ってあげたい」

特別に美しいわけでもない娘だが、せめて守り神と、女神と呼ばれるに相応しい装いを、という母の親心だった。

「母様、その石が欲しいの？」

母が手にしていたアイザヴィーを見て、小首を傾げていった。

「それだったら、父様が居る鉱山の後ろの山にいっぱいあるわ」と。

フリーリアの言う通り、その山はアイサヴィー鉱山だった。

ますます人々はフリーリアを守り神と呼ぶようになる。

豊かになったフリーリアの村は、周囲の村人たちも移り住み、ますます栄えていく。

アイサヴィー鉱山も四つに増え、周辺は独自の統治領となっていた。

鉦山周辺の南部を、いつしかフリーリア領と呼ぶようになっていた。

フリーリア領発展とともに、王都から一人の騎士が衛兵と共に遣わされる。

国境警備隊の総指揮官として赴任してきた騎士が、テオだった。

このとき、テオ16歳、フリーリア13歳。

フリーリア領の領主であり、豊穣の女神、守り神として人々に崇められていたフリーリアとテオの接点は驚くほどなかった。

しかし、南の隣国がアイサヴィー鉦山を狙って進軍し、また、国土拡大の欲に駆られた国王の侵略軍が動き出したことで状況は一変する。

フリーリア領だけでなく、北の国境、果ては王都までが戦地になったのだ。

もともと荒野が国土の大部分を占めるオーストリッチ国は、自国の騎士を傭兵として他国に貸すことで国庫を賄ってきた。

荒れた地では農作物を作ることができず、男たちは兵士となって生活するしかなかったのだ。

そんな、所謂良質の傭兵国家であるオーストリッチは、攻め込んできた敵兵たちを散らしていった。

しかし、戦場と化した地は見るも無残な状態になっていく。

住む家を無くした民たち。家族を失った子供たち。

恐ろしい戦場から逃げる先は、戦の最前でありながらも豊かなフリーリア領だった。

難民と化した民たちを受け入れたのは、守り神フリーリア。

王都に逃げ惑う人々を見たフリーリアは、自身の領内に受け入れ

ることを提案した。

それを承諾したのは、責任者のテオ。

難民と化した民たちをそのままにしておけば、敵国の奴隷となり、戦の妨げにもなる。無駄に命を落とさせるよりも、最前ではあるが安全で豊かなフリーリア領に避難させる方が都合が良かった。

フリーリア領は、守り神のお陰で敵軍の進入には至っていなかった。

見えるフリーリアは、敵軍がどこから攻め込んでくるかがわかるのだ。

どの方向から、どの武器を使うかが見える。

進軍状態が丸見えならば、事前に叩くことなどたやすい。

国境付近の小競り合いにしかないフリーリア領は、難攻不落の神の地として認識されていた。

フリーリアが死んだのは、敵軍が手を引く直前のことだった。

守り神さえ居なくなれば、と考えた敵国の一人が、夜半にフリーリアの寝室に押し入った。

口を抑えられ、短剣を目の前に突きつけられても、フリーリアに恐怖は無かった。

「死ね」と短く発せられた言葉に、フリーリアは従う意思を見せた。

にっこりと笑って、頷いたのだ。

振り下ろされる、短剣。

刺さったのは、首の横。

飛び散るのは、真っ白な羽。

フリーリアに刺さるはずだった短剣は、フリーリアに傷一つ付けることはなかった。

——しかし、フリーリアは自ら生きることを止めていた。「死ね」と言われたその瞬間から——

今回は、ヤエ様がうっかり殺したわけじゃないらしい・・・

「殺さないの？」

パチリと目を開けば、フリーリアにかぶさった女の姿。今、短剣でフリーリアを殺そうとした女。

声を掛ければ、のろのろと上がる顔。

その顔は、涙に濡れていた。

「神を殺すなど、私にはできない・・・死すらも受け入れられる御身に刃を向けるなど、許されることではなかったのです・・・」

はらはらと、涙を流す女。

——さて、何がどうなっただろう？——

理解に苦しむ展開というか、反応というか・・・

「死は等しく誰にでも訪れるのです。わたしは、望まれるまま振舞っただけ」

そう、フリーリアは何も考えていなかった。ただ、死ねと言われたから死んだだけ。

フリーリアには、生きるための何かが欠落していた。

——だからこそ、生き神様なんてやったられたんでしょうね。

フリーリアから離れ、ベッドの下に跪く女に手を差し伸べる。

「フリーリア!!」

突然開け放たれた扉に、言いかけていた言葉がとまった。

——誰だよっ 非常識な!!

「……テオ」

文句の一つでもいってやろうかと振り向けば、そこにはテオの姿。

はて、フリーリアとテオは寝所の行き来をする仲ではなかったはずだが？

「その服装……南の敵兵か？」

枕に刺さった短剣と、ベッドに舞う羽。そして女の姿に、闖入してきた時の雰囲気さがらりと変えて、剣を抜く。

切先は、女に躊躇いも無く向けている。

「テオ、剣を引いて。これはわたしの間者。無礼よ」

一応言ってみる。まあ、信じてもらえるなんて思っていないけど。案の定、チラリと横目で睨まれた。その目は黙れと言っている。心配してくれているのはありがたいが、その態度が気に入らない。

「女神、良いのです。テオ殿。私はジニム。南の者。しかし、この身は女神に差し出したゆえ、如何様にもしてくれればいい。私に、この御方を殺すことは出来ない」

「フリーリアの敵で無いならそれでいい。フリーリアのものを、俺が勝手に手出しすることはできない」

真っ直ぐに見上げて言うジニムに、テオは剣を納めた。

ジニムの目に、何を見たのか・・・

——何か、拾い物しちゃった・・・？

「それよりも、テオ。こんな時間に無断で寝所へ入ってきた貴方の言い訳を聞きましょうか？」

フリーリアの恋人でもないテオ。深夜に寝所へ入ってくるなど、失礼な男だ。

「・・・悪かった。今、敵軍が撤退宣言した。本当に退くかどうか見て欲しかったんだ」

バツの悪そうな顔で言うテオ。

ここが、フリーリアの寝室だって忘れてたってことか。まったく・・・などと心の中（ここ重要！！）で文句を言っていたら、答えは意外なところから返ってきた。

「本当だ。私が定刻に戻らなければ撤退するようにとってきている。私の命を聞かぬ者はいない」

「ですって。確かに、人の塊は移動してる。見張りだけ残して、皆休ませたら？」

そして、とっとなんかここから出て行け。は、心の中で。

——フリーリアは文句なんていわないしね。

「わかった。邪魔したな」

ちらりとジニムを見て出て行くテオ。

言いたいことがあるなら言えればいいのに。

「さて、ジニム。お願いがあるのだけれど」

テオのことはほつといて、私が生きていくための布石にとりかかる。

——何よりも、コレが大切なんだ！！

「何なりと、我が女神」

にっこり笑えば、平伏すジニム。

美女が平伏す姿は倒殺的だなあなどと思いながら見つめてしまう。騎士だったのだから、肌は日に焼けて浅黒く、茶色い髪は痛んでいるが、顔の造形はいいし、身体も引き締まっっていて均等が取れている。

フリーリアがごく平凡な容姿なので、余計にその美しさが引き立つ。

「ジニムはさっき、わたしにその身を差し出した、と言った」

「御意」

「じゃあ、ジニムはわたしのもの？」

「御意」

「わたしに忠誠を？」

「この身の全てにかけまして」

躊躇うことなく出てくるのは全て肯定。素晴らしい！！

「では、わたしの護衛になってくれますか？　今わたしに付いてるのは、国王に忠誠を誓う、この国の護衛ばかり。守り神として、このフリーリア領の領主としてのわたしを守ってはくれるけど、わたしに忠誠を誓ってはいない。同性の、それもわたしに忠誠を誓ってくれる護衛が必要なの。ジニム、わたしだけの騎士になってくれますか？」

国に富をもたらず豊穰の女神には、国王の命令で護衛団が派遣されてきた。

それは、この戦でフリーリアが死なないように、という利益のためで、戦が終わればどうなるかわからない。

欲にまみれた国王のことだから、このままフリーリアを自由にはしておかないだろう。

最悪、生き神として王宮にでも監禁されるに違いない。

そんなことされてたまるかってことで、フリーリアを守る者が欲しい。

「わたしの命に代えましても、お守りいたします、我が女神」

ジニムの国の礼なのだろう。

方膝を付き、左右反対側の肘を掴み、目の高さまで上げて、誓う。

私の好きに生きればいいフリーリアの人生を、過ごしやすいもの

にするための初めの一石を投じた。

「ありがとう、ジニム。わたしのことはフリーリアと名前で。

さあ、そうと決まれば、ジニムはお風呂と着替えね。お風呂はその扉の奥。着替えはその間に用意しておくわ」

有無を言わずに連行。文句が出る前に扉を閉める。

着替えはフリーリアの物で良いだろう。ムームーのような寝着なので、少々 of 体系の違いは問題ない。

短剣の刺さった枕は捨てて、短剣はジニムに返そう。

深夜なので人を呼んで片付けさせるのは気が引けたので、さっさと自分で片付ける。

フリーリアは護衛団が赴任してきたとき、砦の一室に迎えられていた。

フリーリア領として自治領を設立させたときに、領主として立派な館が領民によって用意されていたが、そこよりも一緒に居たほうが守りやすい、とこっちに入れられたのだ。

フリーリアの世話係の侍女も一人用意されていたが、もともと平民出のフリーリアは自身の世話を焼かせること無く、食事と住居の世話だけを頼んでいた。

「フリーリア様・・・」

一通り片付け終わったところでジニムに声をかけられた。

「ジニム。良く似合う。もともと着ていた服は捨ててね。他国の服を着た者を騎士とすることはできないから。明日にでもテオに服を用意させるわ。それまでは、我慢してね」

ジニムが手にしていた服をサッサと捨ててしまう。
呆然と立っているジニムの手を引き、ベッドに座らせた。

「色々詳しいことは明日にさせてね。今日はここで一緒に寝ましようね」

キングサイズより大きいベッドなので問題ないだろう。
無駄に大きい寝具は好きだ。

ジニムの隣に横になって、おやすみーと声をかけても、一向に入ってこないジニム。

——うーん。固まっている。

えいっと手を引いて、強引に転がす。そして、一言。

「ちゃんと寝てね」

覗き込んでにっこり笑えば、真っ赤に染まるジニムの顔。

——そんな反応されると私が困る！！

「おやすみ」

気づかないふりで横になった。

うん、これが一番だ。

緊張したジニムの身体から力が抜けたのを感じて、そっとため息をついた。

さて、フリーリアとして生きていくのに、状況の確認でもありますか。

02・フリーリア1(後書き)

あれ？ 鈴の性格変わった・・・？

03・フリーリア2

「テオ。ジニムに騎士服を用意して欲しいの。あと、王都に向かって人と火薬が流れてる。今日中に王都に入るわよ」

朝食時、いつものようにテオと食事の席に着き、いつものように見えるモノの話をする。

テオは、フリーリアに『いつもより多くある、モノと場所を教えたい』と頼んでいた。

正しくフリーリアの力を使っているテオは、利口なのだろう。

私なら見返りを求めても良いぐらいの情報だと思うけど、むしろ求めるけど、見えることが普通のフリーリアは、何の見返りも求めずに見ていたようだ。毎日毎日求められるままに。

——欲を持たないのが生き神様になるコツかしらね。

「ジニムの服は用意する。フリーリアの騎士として扱う。それよりも、だ。王都に流れている人数と量。どれぐらいだ？」

交渉の基本は、相手の欲しいものをチラつかせることだ。ジニムの服と立場さえ確保できれば、テオの欲しがる情報をくれてやるぐらい何てことはない。

「100人ぐらいと、馬車3台。北側の混乱に乗じて入ったみたいね。もうすぐ王都。・・・王都も混乱中？　これ以上王都に近づくと、わからなくなっちゃう。どうするの？」

人を見なくとも火薬を見ればいいのだろうが、物は使われてしまえば無くなってしまふ。特定できるわけでも、判別がつくわけでもないの、ソレだけを見続けることはできない。

便利なようで不便で、万能なようで無能力だ。

「今から早馬を出したところで間に合わないだろ？ 王都には国王初め王太子、第二王子もいるんだ。わざわざ俺が如何こうする必要もないだろ」

テオは、その生まれゆえか父や兄達に何の興味もないようだ。

「――殺したいと思っているわけじゃなくて、ただただ興味が無いだけなのが救いだろな。」

「ふうん？ じゃあ、もう見ない。テオ、早くジニムの服。野いちごたくさん見つけたから、採りに行ってパイを焼くの。ね、ジニム」
「御意」

フリーリアは、気ままな一日を過ごしていた。

領主として領土を治めていたが、もとが鉱山地帯だったために仕事はそれほどなく、国に収める税などは従来の人が変わらず担っていた。

フリーリアの一番の仕事は、守り神としてそこに存在し、豊穡の女神として人々にその恩恵を与えること。

ただ、そうしているだけでいい。

――何もしなくてもいいのは苦痛だ・・・と思わないのが行き神様として・・・（以下略）

「どこまで行くんだ？」

「第三鉦山の裏手。ジニムがいるから、他はいらない」

護衛の手配をしようとしたテオを止める。

何のためにジニムを騎士にしたと思ってるんだ!! ゴツイ男は嫌なんだっつ とは、心の中に留めておく。

「わかった。ジニム、フリーリアを頼んだ。服は、目立たず動きやすいものを用意する」

部屋を出て行くテオを見送る。

人に任せず、自分で動くところは王族らしくないが、そこが人に好かれるところなのだろう。

「フリーリア様、あの者は一体?」

「テオ? マテオ・オールド・オーストリッチ。一応生まれは第三王子。だけど、今はただの騎士のテオ。このフリーリア領の兵達の隊長。たぶん、わたしの敵じゃないと思う男」

「この領内にフリーリア様の敵が?」

「いるから、テオ自らが付いてるんだと思う」

これは、直感。

テオ自身には欲も何もないか。だから、今は敵ではない。

一応、国王命令でフリーリアを守ってはいるが、テオ自身、国王に忠誠は誓っていない。

逆らう理由が無いから、従っているといった感じだろう。

味方につければ、とは思うけど、面倒事が増えそうなので出来れば遠慮したい。

「ここからは、私がお守りいたします」

「ありがとう、ジニム」

テオが用意したのは、アオザイとアラブ系の民族衣装を足して2で割ったような服だった。

貴人が好んで身につける衣装なので、並んで歩いていても目立たないだろう。

ちなみに、フリーリアは足首までの長い白色のワンピースに、上から膝丈ぐらいの鮮やかなチュニクを重ね、お尻が隠れるぐらいの白いカーディガンを羽織っている。

どうやら、この国の身分の高い女性の基本スタイルのようだ。

「――で、どーしてテオも一緒なのかしら？ わたし、護衛はいらないって言わなかった？」

ジニムと同じような服を着たテオ。

フリーリアの記憶にはいつもの騎士服姿しかなかったから、これはこれで新鮮だ。が、そこは問題じゃない。

「いいだろう？ 敵軍撤退で暇なんだ。砦にいたりあ色々面倒だし、フリーリアの護衛って出てきてる手前、一緒に居ないと拙いんだ」

あの後、テオがジニムの服を持ってきたので、着替えるために寝室へ入った。

ジニムと二人、着替えて寝室を出れば、そこには自らも着替えたテオが待っていた。

一緒に連れ立って野イチゴ狩りに出たのだが・・・

——邪魔だあつ

「フリーリア、煩いこと言うなよ。ほれ、イチゴ採るんだろ？」

仕事しろよ、という文句が聞こえたらしいテオに籠を渡され、ジニムと奥へ入っていく。

テオは、入り口あたりで寝転んで、昼寝でもするらしい。

「ムカツク・・・ テオのサボりの口実に使われた・・・」

ぶつぶつ出る文句は仕方ない。

ゆっくりとこれからのことを考えようと思っていたのに、それもままならない。

チツと舌打ちしたい衝動を堪えて意識を野イチゴに向ける。

うん、美味しそうに熟している。パイを焼こう。ジャムを作ろう。現実逃避には、お菓子作りが一番だ。

無心になれるし、腹も満たされる。用意した籠一杯に摘めば足りるだろう。

よし、と意識を野イチゴに戻したところで、大きな声の邪魔が入った。

「隊長——！！ 第二王子殿下戦死——！！！！」

大声で言うなよっつ と思いながらテオの居るほうへ戻る。

そこには、横になるテオと、3歩離れて佇む隊長補佐の姿。

フリーリアの姿に礼を取る補佐に会釈して、テオの隣に腰をおろす。

「で？ 第二殿下がどうしたって？」

「はっ 王都進入軍の討伐に出られた第二王子殿下、戦死されたとの知らせが入りました。首は敵軍にあり、王都の守りは崩れているとのこと」

「国王と王太子は？」

「国王陛下は王城に籠城。王太子殿下は北の地へ出兵中とのこと。隊長、どうされますか？」

――仮にも異母兄が死んだのに、その知らせを寝転んだまま聞くのはどうかと思うぞ・・・

「王都からこの地へ入る全ての道に兵を向かわせて警備を強化しろ。東と西の侵入にも警戒しろ。まあ、こっちは海だから見回りを強化する程度でいい。領内の民達には遠出をするなど伝えろ。子供たちは必ず大人と一緒に居るようにと。守り神からだと言っておけ」

「王都への援軍はよろしいのですか？」

「かまわん。むざむざ負けにいけるか。何か言ってきたら、アイサヴィーを捨てることになる脅しておけ」

言いたいことだけ言って、さっさと下がらせてしまおうテオ。

――反逆罪に問われても知らないぞ・・・

「フリーリア、見えるか？」

「何を？」

「火薬」

・・・・・・。チッ そうきたか。

「・・・王都に入ってる。量は変わってないと思う。人は少なくなってる。ねえ、テオ。王城に人がいない」

はて。国王は籠城中じゃなかったか。

「一人も？」

「んー・・・ん？　　20人ぐらい？　詳しくは遠すぎる」

もともと、1人1人の判別がつくわけじゃないのだ。細かいことはわからない。

「充分だ。こっちに流れる人は？」

「ない。この周辺はどこも無人のままだし、向かってくる人もいない」

「わかった。ジニム、南が攻めてくる確立は？」

「限りなく0に等しいだろう。指揮官^{わたし}を失って、まだ軍を立て直せないはずだ」

テオが何を考えてるかわからないが、私が安全に生きていくための次の一石を投じることにする。

「ジニム、南と和議を結べないかしら？」

「フリーリア様？」

「フリーリア？！」

ジニムのは純粹な疑問。テオのは、余計なことはするなって警告か？

——まあ、無視するけど。

「南が和議を受け入れてくれるなら、敵は北だけになる。南を気にしなくて済む分、北に集中できて合理的。それに、国土的に見ても

国力的に見ても北を侵略したほうがいいでしょう？」

南は大国だ。その南を取り込むだけの力は、今のオーストリッチにはない。それよりも、民族集合国家である北を侵略したほうが合理的であるのは間違いない。

「フリーリア、それは正論だが、問題だらけだ。まず、和議を結ぶ国王が籠城中。代理に成り得る王太子は進軍中。そして何より、南に和議を提示するだけの国庫の不足。今のオーストリッチに、それだけの余力は無い」

「誰が国王との和議だと言った？　ねえ、ジニム。南がオーストリッチに、フリーリア領に進軍したのは何で？」

「アイサヴィー鉱山を手にするためです。わが国のアイサヴィー鉱山は既に採石するアイサヴィーが無い」

「別に、国土が欲しいわけじゃないんでしょ？」

「はい」

「なら、簡単なことだわ。南との和議は、フリーリア領主が結ぶ。提示するのは、アイサヴィー鉱山と採石、加工技術でどうかしら？」

そう。別に“国”と“国”が和議を結ぶ必要はないのだ。

そもそも和議とは、お互いの利害の一致なのだから、南が求めるモノを用意でき、かつソレを提示できれば対個人であっても和議を結ぶことが出来るのが道理。

南が求めるのがアイサヴィー鉱山ならば、それを自由に使えるフリーリア領主が南相手に和議を結んでも、何ら問題は無い。

にっこりと笑ってやれば、

「ちょっと待て、フリーリア。いくらフリーリア領が自治領区だといっても、鉱山を南に渡すなんて国王が、いや、国民が許さないだ

ろ？ それに、南にメリットが少ない」

テオが焦って止めてきた。

「誰がウチの鉱山あげるって言った？ 南の国土内にあるのよ、アイサヴィーの手付かずの鉱山。多分、南も知らないと思う。南は、自国の鉱山が廃鉱になりかけてるから次の鉱山が欲しいと言った。なら、ソレをわたしが提供する。ウチの鉱山二つ分なら、南にとっても悪い話じゃないでしょう？ ね、ジニム」

「それは、そうですか・・・」

「フリーリア、無謀すぎる。相手が誠意を見せるとは限らない。第一、誰が南との交渉に行く？」

「わたし」

「ダメだ（です）！！」

即答かよっ

「1人で行くわけじゃないわよ。ジニムを連れて行く。ジニム、お国では高い身分だったんでしょう？ 地位も指揮官だったみたいだし、ジニムと一緒に南も対応しやすいでしょう？」

昨日、今日のジニムの立ち振る舞いで、高家の生まれだと知れた。ジニムがフリーリアを裏切ることはないから、私の身は安全だろう。

「ジニム、南でのオマエの身分は？」

最良の策を取り違える男じゃないと思っていたが、やはりテオは利口だ。

「現国王は私の実弟です」

「ジニム、王女様だったの?!」

「知らなかったのか!!」

うおうっ　テオからの突っ込み・・・

しかし、想定外だ。王族だとは思わなかった。それも、王の実姉。勝手が違いすぎる。

1人でうんうん悩んでいたら、当の本人に助けられた。

「国王は、弟は私に逆らいません。フリーリア様が鉱山を提示してくださいなら、南は和議を受け入れましょう。国土を広げると言う欲は、南にはない」

南は大国だ。今更、オーストリッチの荒野が広がる小国に興味は無いだろう事は頷ける。

「フリーリアの提示した条件で南が納得するなら和議はフリーリアの好きにすればいい。そのかわり、調印の場は南の国境砦。相手は、国王が務めること。護衛は2人しかつけないこと。こちらは、フリーリア領主である守り神と、ジニムと俺の三人。これに同意できないと南がいつてきたら、この話は無しだ。いいな、フリーリア」

利口な男は好きだが、テオは嫌いだと思う。

「ジニム、使いをしてくれるか?　南の国王に、フリーリア領主が和議の申し入れをしたい、と。こちらが提示するのは貴国内のアイサヴィー鉱山。それで、フリーリア領主と和議を結んで欲しいと。調印場所と条件はさっきの通り。日時はそちらにお任せするが、3日以内に返答願うと」

ほらね。やっぱり嫌いだ。わざわざジニムに行かせる。このままジニムが戻ってこなくても、テオは痛くもかゆくもないから。

——でも、これが最良なのは確かだ

「ごめんね、ジニム。行ってくれる？」

ここで南との和議が成立すれば、私の身の安全は保障される。
オーストリッチがこのまま北に敗戦しても、フリーリア領は南の援護を受けて自治領区の立場を貫ける。

「フリーリア様の仰せのままに」

「じゃあ、お願い。下手に砦に戻らず、このまま・・・」

国王側の人間にはまだ知られたくない。幸い、ここには私たち3人しか居ない。

「承知しております。知られぬよう、このまま山を越えて南へ入ります。フリーリア様、明後日には戻ってまいります。その間、御身お気をつけください」

「ええ。ジニムも、気をつけてね」

必ず戻って来いとは、言えない。

そのままかけていくジニムを見送って、テオを見る。

「ねえ、テオ。一体何を考えているの？」

そして、問う。

「フリーリアと同じことか？」

いつもの調子で返される。

「世界平和？」

「考えてないだろ、そんなこと」

「失礼ね、考えてるわよ。わたしの世界が平和でありますようにって」

言葉遊びに興じてみる。

腹の探りあい得意だ。

「なるほど。じゃあ、やっぱり俺の考えてることと一緒だ」

「あら、考えてナイんでしょ」

今、そう言ったじゃない、と笑ってやる。

「テオの、望みはなあに？」

欲の無いテオ。

王族にありながら、あっさりとソレを捨てたテオ。

母親の身分こそ低い、テオの能力は二人の兄よりも高いのではないかと思う。

——それなのに、自身が王位に就こうなんて考えてない

「言っただろ。フリーリアと一緒にさ。俺の望みは、俺の平和」

言葉遊びの延長にきこえるが、これは本音だと直感する。

——面白い。権力よりも、自身の平穏を望むのね

「じゃあ、お互いの平和のために、今後のことを少し相談しましょうか？」

敵に回したくはないが、味方につけても色々面倒な男だと思う。

——それでも、私が平和にフリーリアとして過ごしていくのには役に立ってもらおうわ

別に、権力欲があるわけじゃないが、どうせなら平穏無事に過ごしたい。

自由の無い生活も、生き神様としてのかたっ苦しい生活もゴメンだから。

ただ望むのは、平和で平穏な日常。

——それも、ヤエ様に御仕えするようになってから無縁の言葉になりつつあるけど。

「俺達の平和ね」

わたしの言葉に、にやりと笑うテオ。

どうやら、お互いの利害は一致したようだ。

「そう。わたし達の、平和。大切よね？」

にっこりと笑ってやる。

「ジニムのことも、和議のことも、ソレか？」

一応は疑問系だが、確認にすぎない問い。

「ええ。テオの御父上がどう出るかわからなかったから、ね。まさか籠城されるなんて想定外だったけど。まあ、保険はかけるに越したことはないでしょう？ ジニムの身分も王族とはね。予想では、上位貴族の娘だったんだけど・・・」

これが一番の誤算だった。まさか、王女殿下を騎士にするわけにはいかないだろう。

女神だ守り神だと言われていても、フリーリアはただの平民だ。

どうしたもんかと思うが、まあ、なるようになるだろう。

「ジニムの、南の件は上手くいくだろ。それよりも国内のほうが問題だ。王都にまで北が入り込んでるって事は、落ちるのも時間の問題だろうな。そうなれば、国王の首どころかこの国が無くなる。どうするんだ？」

王の首がどうでもいいって発言は、聞かなかったことにしてあげるよ、テオ。

「どうもしないわ。そのための南との和議ですもの。北が王都を欲しがるなら、くれてやればいいのよ。王や王太子が戦をしようとわたしには関係ないわ。フリーリア領は自治領区ですもの。」

幸か不幸か、周辺の村々は今は無人だし、領土を増やしてはいけないという規定も無いから、その無人村も取り込んでフリーリア領

にするつもり。そこに、王都から北の民を受け入れる。そうすれば、北が手に入れるのは北の国境から王都までの荒野だけ。王都から南の国境までのフリーリア領の方が豊かで広いもの。何の問題も無いでしょう？」

「北にくれてやるのは、王都までの荒れた大地だけって事か。でもフリーリア、守りはどうする？ 北は、このフリーリア領こそが望みだ。こっちに入ってくる北を、どう叩く？」

いま、それだけの兵力はここには無いと言う。

「だから、そのための南との和議よ。南が味方についた、と思わせればいいのよ。なんなら、守護兵だけ借りてもいいわ。ソレぐらいの条件提示できるぐらいのモノはまだ持ってるもの」

自国の兵が使えないにはわかっている。

国を捨てろという私に従う兵はいないだろう。

使えるのは、テオが率いる一隊だけだとみるべきだ。テオが言うように、それだけでは到底守りが足らない。

だから、何としてでも南と和議を結びたい。

南の国庫を提供する代わりに、兵を貸して欲しいのだ。それが、本音。

ジニムが王族なもの、きっと良い方に作用するだろうと思うことにする。

「全ては南の出方しだい、か？」

テオも反対しないのは、これが最善策だから。

「そう。ジニムが戻ってこなかったら、別の手を考えなきゃいけな

いわね」

ジニムが裏切ることは無いと思っているけど・・・

「しかし、フリーリア。いつからそんなに利口になった？」

口調を変えずに言うテオ。

でも、その目はまったく笑っていない。

——やっぱり、バレルよねえ。

何も考えていなかったフリーリアと今のフリーリアでは、まったく違う。

「失礼ね、テオ。わたしは前から御利口さんなのよ？」

知らなかったの？ と笑ってやる。

伊達に十数年やエ様にお仕えしてきたわけじゃない。

それに伴って半端じゃない人数の人生歩んできてるんだ。

——面の皮は充分厚い！！

「まあ、いいけど。前の女神様よりも今のフリーリアのほうが付き合やすい。そろそろ戻ろう。ハラヘッタ」

まさか、中身が他人だとは思わないのだろう。（まあ、当然だが。）

さっさと歩き出すテオに、私もお腹すいたし、と立ち上がって、

「あー！！ 野イチゴ摘んでないー！！」

絶叫。

パイがっ ジャムがっ おやつがっ

「うるさい、フリーリア。またこればいいだろう」

歩みを止めずにテオが言う。

ええいつ 護衛が主を置いて行くなっ

「ていやっ」

手に持っていた籠を思いっきり投げつけてみる。

「どわあっ フリーリア!! 危ないだろっ」

何かを感じて振り返ったテオに、籠は難なく受け止められた。

チッ

「テオが摘んできてね」

文句を言うテオを置いて、砦へ戻った。

04・フリーリア3（前書き）

作者は無神論者です。

作中、適切ではない表現がありますが、個々人の宗教観を批判するものではありません。

04・フリーリア3

「女神パエラ。お会いできて光栄です。進軍などと言う愚を犯した我国に対する深い慈悲に国民一同深く感謝致しております」

「ニトジム陛下、どうかそのような礼などお止め下さい。礼をとらねばならないのはこちらでございます。

このたびは、和議を受け入れてくださり、ありがとうございます」

野イチゴ狩りの3日後、南国との和議の場が整っていた。

一足先に会場に入っていた私に礼を取ったのが、南国ホージュ国の国王。ニトジム・ボーク・ホージュ陛下。

ジニムの実弟にあたる。

会場とした南の国境砦の一室には、フリーリア領主の私と、護衛のテオとジニム。ホージュ国王のニトジム陛下と側近と護衛が一人ずつの6人しか入ることは許されていない。

南はこちらの要求を全面的に受け入れ、和議を承諾した。

「我国が唯一神として信仰するのは豊穡の女神パエラ。その化身である貴方様に礼を取るのは当然のこと。どうかそのような事はなさらないで下さい」

礼を取った私に慌てたニトジム陛下。

お互いの顔を見合わせてクスリと笑い、席に着いた。

ジニムと同じ茶色の髪はふわふわで、可愛らしい顔立ち。

普段テオを筆頭にこっつい男どもに囲まれた生活を送っている私には究極の癒しだ。

「テオ。条約書を」

昨夜作った条約書をテオから受け取り、ニトジム陛下に差し出す

——と。

「陛下、ご確認ください!!」

内容も確認せずにサツサとサインをはじめるニトジム陛下にギョツとした。

「女神パエラが我国のためにご提示下さった条件に、何の不満がありませんでしょうか」

そう言って、王印まで済ませてしまう。

ジニムの時も思ったが、南国の女神信仰は怖いものがある。

南国の奉る唯一神は豊穰の女神パエラで、作物の収穫は勿論、恵みの雨から果ては日照時間までがパエラのお力であると考えられている。

生きるものの全てがパエラの恵みによるものなのだ。

“お空のお父様”より絶対的な唯一神パエラ。

だから、ジニムは“豊穰の女神”と呼ばれていたフリーリアを許すことが出来ず、殺しにきたのだろう。

——言い換えれば、女神パエラと認めた私を、ジニムが裏切ることは無いということ。

「ありがとうございます、ニトジム陛下。では、これを」

きちんと封のされた手紙を手渡す。

中は、テオすら知らない、フリーリアとしての手紙。
アイサヴィー鉱山の場所を記した物と、もう一通。

すぐに中を確認したニトジム陛下の顔色が変わった。

「ここが・・・」

「はい、貴国の鉱山の二つ分の採石量が見込めるでしょう」

「しかし、ここは・・・」

「問題ございません。国境は、この砦までですもの」

にっこりと笑って言ってやる。

ニトジム陛下が躊躇うのも無理はない。提示した鉱山は、このフリーリア領とホージュ国との国境の山なのだから。

今までホージュ国が、そこをアイサヴィー鉱山だと知らなかったのも、国境に近すぎて調べることにしなかったからだだろう。

それだけ、いらぬ火種を生みかねない位置にある山だ。

――だから、助かったんだけど。

「今、和議を受け入れて下さった貴国がその鉱山を採掘しようと、我フリーリア領の者は何も言いますまい。ですから、どうぞお気になさらずに」

「パエラ・・・ 御身に、多大なる感謝を。これから後、我ホージュは女神パエラ、フリーリア様に親愛を捧げ友好を違えぬ事をお約束いたします」

ニトジム陛下が私に頭を下げるのに合わせて、側近と護衛も頭を下げる。

——これで、南国の心配は無くなった。また一つ、生きやすくなったわけだ。

「ジニム、お国へ帰る？」

王女と言う身分のジニムを、このまま騎士として置くわけにはいかないだろう、と思ったのだが・・・。

「私は既にフリーリア様の騎士です。どうか、このままお傍に置いていただけないでしょうか」

ニトジム陛下の前で、そう言って膝を折られてしまった。

「女神パエラ、どうか姉をお傍に。第一王女であり、筆頭騎士でもある姉ジニムがパエラのお傍にあることで、我ホージュとフリーリア領との関係は確固たる物となりましょう」

ニトジム陛下にまで言われては、これ以上は何も言えなくなる。

チラリとテオを見れば、見事なまでの無表情。
好きにしろ、よりは、言っても無駄、だろう。

先日的一件から、テオとは利害が一致している。だから、口出しはしてこないだろう。

——まあ、テオに何を言われても今更気にもしないけど。

「ありがとうございます、陛下。では、ジニム、今までどおり傍に居てね」

つつがなく済んだ和議の翌日から、南国ホージュは鉾山の採掘を開始した。

和議の件はその日の内に領民全ての知るところとなっていたため、混乱もなく衝突することも無かった。

南国が敵ではなくなった事はフリーリア領としては大きな意味を持つ。

領の地形状、背後に当たる南を警戒しなくてもいいということは、王都に向かう北のある一点にのみ警戒をすれば良いということ。久方ぶりに兵を含む領民全員が安息を得られた。

しかし、一步領内から出れば、そこは変わらず戦場だ。

勢いを衰えさせぬまま、北の侵攻は王都までもを落としていた。

——次の一手は、こちらから。

「フリーリア、指示通り、無人村になったところまで守備隊を置いて、フリーリア領主の名の下、流れてきた民と兵たちを受け入れた。籠城中の国王や敗戦撤退中の王太子を見切って、フリーリアに付く者が増え始めてる。どうするんだ？」

フリーリア領の砦に与えられたフリーリアの私室に、相変わらず無断で入ってきたテオ。

その姿はきちんと騎士服を身に着け、帯剣もしている。

「もとは傭兵たちだもの。力の無い主より、自分達を上手く使ってくれる主を選ぶには当然の結果だわ。そのうえ、フリーリア領は衣食住、全てにおいて困らないもの。安住の地をここに求めるのは当たり前前ね」

テオには、フリーリア領から王都までの間にある無人村を支配下に置き、そこに難民たちを迎え入れるように指示していた。

王都に暮らしていた民達が、行き場を失い、北の捕虜になるのを防ぐためだ。

その、受け入れた民達が現国王を見限り、フリーリアに付くようになっていくという。

それはそうだろう。自国の民を守れぬ者が、王になど、統治者に

など君臨できるはずが無い。

自身の欲のみで進軍し、挙句に自身可愛さで籠城する者など、誰が王と仰ぐものか。

民に捨てられたのは当然だ。

「このまま、フリーリア領主の私兵として受け入れるのか？」

「ええ、そのつもり。とりあえず、皆に食事を。そうしたら、次は家族持ちの兵たちをそのまま守備に就かせて、家族はこちらに寄越して。特に、子供と年寄りの居る所からね。あ、大丈夫だと思うけど、チェックはちゃんとしてね。ヨソモノだと困る」

家族持ちから受け入れるのは、人質にするためだ。

ここまで戦況が悪いと、内側から仕掛けてくる者にも注意しなくてはならない。

「それは大丈夫だ。中央からの兵が多いし、北の者はすぐにわかる。どんなに上手く隠しても、あの訛りは隠し切れるものじゃない」

「なら、いいけど。だいたい、どれ位の兵が増える？ それによって、次の段階に進みたい」

——そう。出来れば、国王が籠城しているうちに。王太子が、出兵しているうちに。

敵の目が、そっちに向いているうちに色々とやっておきたい。

「ざっと30人はすぐに使える。何人かは知り合いだ。全部で50人ぐらいの見込みか。

フリーリア。次の一手はどう打つ？」

問いに答え、ニヤリと笑うテオ。
利害が一致してから、テオは協力的になった。全面的に私の指示をこなす。

——勿論、助言と言う文句も多くなったが。

「まだ、次の一手には早いわ。早急に、使える兵と使えない兵を振り分けて、年寄りと女子供はこっちに。土地の整備や畑、ここでの仕事も山ほどあるわ」

50人ではまだ足りない。最低でもその3倍は必要になる。

使える者を増やすために、領内の整備を優先させるべきか。人が増えれば、必要になる土地も増える。土地が増えれば、仕事も増える。

今後のことも考えれば、使える土地と人手はどれだけあっても足りない。

「わかった。それはこっちで早急に。それより、アイサヴィーの方はいいいのか？ 採掘だけで止めてるんだらう？」

「ええ。この混乱ですもの。加工しても売りに出れないし、第一、この戦争が終われば流行が変わるわ。今、加工するのはもったいない」

支配者が変われば、流行も変わる。この戦がどう転ぼうと、今の流行では売れなくなる。

それは、どの時代、どの世界でも共通だ。

「盗られたりしないのか？ 原石のままあんなに大量に積んでたら、少々ぐらいわからないだろう？」

「それも平気。今、アイサヴィーは加工済みの物も含めてあそこにしかないもの。だから、あそこから持ち出せば私にバレる。今、このフリーリア領から出されれば死ぬかそれ同等の人生しかないもの。そんな愚かしい行為をする人間はまだ居ないわ」

せつかくの安住の地を、自ら捨てる者は居ない。

アイサヴィーを盗らずとも、ここに居れば衣食住は保障され、生活に困ることは無いのだから。

人を従わせたいのなら、従うように仕向ければいい。裏切る必要の無い状況を作ればいい。

そして、今の現状はその状況を作るに最も適している。

「なら、いい。フリーリア。お前はドコを目指してる？」

「私の安住の地を」

ニヤリと笑って答える合言葉。
お互いの、求めるモノの確認。

———そう、あくまで、私の、ね。

05・フリーリア4

順調にこちらの領土を広げ、必要な兵たちの確保も終わった頃、タイミングよく早馬が入った。

布石は打ち終わり、まさにタイミングを計っていた時の知らせ。

——これで、私の勝ち。チエックメイト王手よ、テオ。

「ジニム、知らせの花火を上げて。これで終わるわ」
「御意」

部屋の窓から、下に待機している者に合図を送れば、大きな打ち上げ花火が空に大輪の花を咲かせる。

遠い地に待機しているテオに、昼夜を問わずに一番早く知らせる手段として用いた花火。

これならば、わずかなタイムラグで行動を起こせるだろう。
意識を向ければ、動き出す人の塊が確認できた。

——さて、次はこっちね

「ジニム、私たちも出るわ。女達を集めて、兵たちを配置に。前線の村に移動するわ」

連れて行くのは、子供が手から離れた女たちと、護衛の兵。行く

先は、国境に近い村。

「フリーリア様、一体何をなさるのですか？」

女たちを乗せる馬車の手配を済ませたジニムが不安げに言う。
その顔には、危ないことはするなと書かれているが、この際無視だ。

「人の心を得るためには、何が必要かしらね、ジニム」

明確な答えを渡さないまま、馬車に乗り込む。

用意された馬車は五台。

一台は私とジニムが乗っている。

一台は女たちが乗り、残りの三台は荷物が。

護衛は馬車の御者を務める者と馬に乗るもの、合わせて十五人。
それなりの人数の一行が、戦地に向かってひた走る。

「貴女達は食事をお願い。かなりの量が必要になると思うから、持ってきた食材を全て使って用意して。何かあったら、兵を五人付けておくから、走らせて。」

貴女たち三人は、こっちの手伝いを」

国境に一番近い、フリーリア領に吸収した無人村。

戦場と化した王都を挟んで国境に近すぎて人を住まわすには危険なこの村に、女たちと兵たちを連れて到着したのは、馬車に乗り込んで二時間後のこと。

持ってきた食材で食事を作ることを指示して、私は違う場所へ向かう。

ここからは、時間との戦いだ。

「ここから五軒、掃除をして、持ってきた布を床に敷いて、桶にいっぱい水を汲んでおいてほしいの。井戸はこの裏手。邪魔な家具とかがあれば外に出して、出来るだけ広い空間を確保して。男手は兵を五人置いていくから、遠慮せずに使って。急いでお願いなね」

指示を出せば、女たちはテキパキと動く。

フリーリア領に住む人々は、フリーリアに逆らうことはしない。王族に対する畏怖や忠誠と同じものではなく、あくまで自分たちの雇い主として従ってくれる。

住人にとってフリーリアは、支配者ではなく、雇用による主従関係、いわゆる主人と奉公人の関係である。

衣食住の提供の見返りに労働力を提供すると言う、一番シンプルで判り易い関係だ。

「フリーリア様、一体何を？」

馬車から荷物を降ろすために来た道に戻れば、ジニムに先ほどと同じ問いを問われた。

今後のことを考えれば、ジニムにはやはり説明するべきか。

「この国に入っている北の兵を、こちらに取り込むの。敵同士だから戦が成立するのなら、その根本を変えればいい。味方同士なら、戦う必要は無いもの。」

人の心を得るためにまず必要なのは、こちらの受け入れる心。次

に環境と状況。

ジニムは王族として、何が必要だと教わった？」

「民を守る力と導く力。そして、人を従わせる力・・・常に、強くあれ、と」

「ええ。王は、民を守らなければならない。導かなければならない。決して、このように戦を起こして民の命を奪ってはいけないのよ。

民のことを忘れた王は、もはや王族ではない。そんな王はいらないと、民は捨てる権利があるわ。それを、北の兵に教えてあげるのよ」

民族集合体の北の国は、一番大きな部族の長だった男が王として君臨している。

今回の戦では、末端の少人数部族から駆り出されているはずだった。

もともと王に忠誠を誓っていない者たちをことらに取り込むのは容易い。

そのための餌も撒き終えてあるし、状況も整っている。そして、環境は出来つつある。

——後は、テオが上手くやるのを待つだけね

「ジニム、急ぎましょう？」

ここまで来て、失敗するわけにはいかない。

「御意」

納得していなくても従ってくれるジニムに甘えて、用意の手を進める。

——王手まで、後一手

チェックメイト

「手を休めないで！！　どんどん来るわよっっ」

「フリーリア様！！　水が足りません！！！！」

「布が切れましたー！！！！」

「あなたたち！！　食事が済んだら手伝ってちょうだい！！　ジニムーっ　馬車から残りの布！！！！」

絶え間なく運び込まれる負傷兵たちを次々受け入れていくここは、まさに戦場だった。

「フリーリア様、これで全部です」

馬車から戻ってきたジニムの手には真新しい布。
外へ目を向ければ、兵の数は少なくなっていた。これだけあれば足りるな。

「ありがとう、ジニム。」

その北兵。そう、貴方。悪いのだけれど、その水の入った桶を持って付いてきてくれるかしら？　貴方も、食事が済んで動けるの

ならば手伝ってちょうだい」

井戸野近くに居た北兵に声をかければ、隣に立つジニムが警戒を強くした。

——が、もちろん無視だ。

「ラー・パディ」

そう言って膝を折る北兵。

ラーはYES、パディは北の地の慈愛の女神の名だ。

この者達にとってフリーリアは慈愛に満ちているらしい。

ここまで来ても生き神様か、と思っではいけない。それはそれだと諦めることが大切だ。

途中でも北兵達に声をかけて手伝わせる。

領から連れて来た者達だけでは、到底手が足りない。

軽症の兵達を使って場を回す。

「フリーリア様、ありがとうございます。こちらは、これで終わります」

簡易病院となった5つの家——掃除させ、床に布を敷かしたところ——に布を届けにければ、手伝ってくれていた女達が終わりを告げた。

重傷者達の一通りの手当てが終わり、後は軽症者たちが身なりを整えるだけになっていた。

北兵たちは、ほとんどが自ら手当てをし、軽症の者が重症の者の

手当てを手伝っていたため、女達の負担はそれほどなかったようだ。

「ありがとう、ご苦労様。もう少し落ち着いたら送らせるわ。その間、貴女たちも食事をしてきて、他の人たちにもそう伝えてきてちょうだい」

まさか、彼女達をここに泊まらせるわけにはいかない。

思いの外北の兵達が手伝ってくれたので、予定より早く落ち着けそうだが、早くしないと領地に入るのが夜になってしまう。

「フリーリア様は？」

母親と同じ年代の、昔馴染みの女が心配してくれるのが嬉しい。

「わたしは、まだここでやる事があるの。もう暫くすればテオたちも来るし、待ってなきゃ」

だから、気にせずに行けばいいと笑って見送り、門まで行く。

見張りとして立っているのは、連れてきた兵。

「ありがとう。もう落ち着いたから、貴方も食事を。食べ終わったら、馬車の用意だけしてくれる？」

「しかし、見張りが・・・」

「大丈夫、もうこっちに向かってくる者は見えないから。それに、そろそろテオたちが来るわ。早くしないと無くなるわよって皆にも伝えて」

ニコリと笑って安心させれば、駆けていく兵。

早朝よりも早い時間から動き通しの彼等も疲れているだろう。

「パディ、ここは我等が居りますから、パディもどうかお食事へ」

やり取りを見ていたらしい北兵に声をかけられた。

初めから、抵抗らしい抵抗をしてこなかった北兵たち。

投降を促せば、素直にそれに従った。

やはり、北は統一されていないのだと知る。

真の意味で王に忠誠を誓っている者など居ないのだろう。

北兵にとって、今従うべき者は、自分達を受け入れ手を差し伸べ、食事を与えたフリーリアだ。

「大丈夫よ、ありがとう。貴方達は休んでいて。これから、働いてもらわないといけなくなるから」

「ラー・パディ」

暗に、フリーリアのために働け、と言ったにも拘らず返されたY ESに内心笑う。膝を折り、それでも傍を離れない北兵たち。

——これで身体が休まるとは思えないんだけどね」

まあ、いいか、と外へ目を向ければ、こちらに一直線に向かってくる人のカタマリ。

さて、タイミングを逃せば女達を帰せなくなる。

そろそろ暗くなるし、これ以上ここに留まらせておくわけにもいかない。

「ジニム、女達を帰すわ。私はしばらくここに残るから、ジニムも悪いけど一緒に残ってね」

一応、今後の予定を伝えておく。

——何も聞かずに頷いてくれるジニムに感謝ね

「フリーリア様、馬車の用意ができました」

「ありがとう、手伝ってくれた彼女達を送り届けてちょうだい。一緒に領地から来た者達も皆引き上げていいわ」

「全員、よろしいのですか？」

「ええ。ほら、テオたちもついたしね」

心配する兵に外を指せば、遠くから馬の嘶き。

「わかりました。では、連れてきた者全員領地へ帰還いたします」

「道中、くれぐれも彼女達をお願いね」

本当なら見送りたいが、1頭の馬が勢いよくこちらに向かってきたので断念する。

「フリーリア！！」

馬上から大声で呼ばれた声は、間違えることの無い相手のものだ。

「テオ、お疲れ様」

門の手前で急停止してヒラリと降りるテオ。

「女神フリーリア、今回のご助力のおかげで、無駄な地を流すことなく終えることができました。

女神のご加護に御礼を」

改まった口調に、最上の礼。

———やられた!!

忠誠を誓う騎士のソレに、テオを睨みつける。

私がテオに膝を折る予定だったのに!!!
そのためにわざわざココに居るのに!!!

———これで、生き神様決定とか、ありえない・・・

「顔を上げて、テオ。わたしには何の力も無いわ。全ては、動いてくれた貴方や、他の兵たちの力。
皆も、お疲れ様」

到着した他の兵たちも、テオに習って次々膝を折る。

その者たちにも声をかけてテオを立ち上がらせれば、ニヤリと嗤われた。

——ムカツク!!!

自分の勝ちを確信したその笑みに、面倒ごとを全てフリーリアに押し付けてきたテオの、してやったりなその笑みに、本気でムカついた。

——が、文句は後だ。ここからが肝心なのだから。

「北の兵たち。北の国の独裁者の首は我等が取った。一族は全て我等の手にあり、たった今より北国はオーストリッチの藩属国になる。各部族たちはその領地を独立自治領区とし、各々の裁量でもって治めていただきたい。」

これは決定でなく提案である」

テオが、傍に控えていた北兵たちに伝える。

いつの間にかその数は、重傷者を除く全てではないかという位の人数になっていた。

これが、今回の目的。

北の国を、こちらに取り込む・・・

「オーストリッチの藩属国は承服出来ぬ。我部族は、パディにこの

忠誠を捧げる」

しん、と静まり返った場に、一人の北兵の音が響く。

「我部族も、パディにのみ従おう」

「パディ・フリーリアに忠誠を」

「忠誠を」

次々と上がる、北兵たちの声。

国の藩属としてではなく、フリーリア個人に忠誠を捧げるという北兵たち。

ますますテオの思い通りになっていく現状に頭が痛くなっていく。

——で、收拾のつかなくなったこの場を収めるのも私ってか?!!

チラリとテオを見れば、いやらしい笑い。

——覚えてろよ!!!

ぱんぱんっと手を鳴らして注目を集める。

——既に生き神様を見る目で見つめられてるのは気のせいだ!!!

「あくまで、まだ提案だから、国に戻ってからゆっくり相談して決めて欲しいの。」

わたしは、自分の領地を守るためだけに北の王を討った。貴方たちを支配するために起こした行動ではないの。わたしはこの国の王族でもないから、これ以上の権限は無いしね。

後日、正式な場が設けられることになるでしょうから、答えはその時に。

テオたちは、中央の家に食事の用意が出来てから食事を。井戸には桶と布の用意もしてあるから自由に使ってくれてかまわないわ。私は、西の端の家に居るから、何かあったら来てちょうだい。他の家は、自由に使ってくれていいから、ゆっくり休んでね。

ああ、ここから出て行くのは自由だから、報告はいらないわ」

言うことだけ言って、さっさと背を向け歩き出す。

付き従うのは、ジニムのみ。

後ろで聞こえるテオの声は、指示を出しているのだろう。

まんまとフリーリアを生き神に祭り上げたテオにはムカツクが、これから私もテオを嵌める事になるので相子だろう。

本当は、フリーリアを生き神様になんてするつもりは無かったんだ。それを押し付けてきたんだから、これから私がすることも許される筈。

“平和な日常”のためだし、文句は言わないだろう。

「フリーリア様、今日はこちらでお泊りですか？」

「んー、多分。きっとそうなる・・・予定？」

「予定？」

「そう、予定。まだ微妙。これからのテオ次第？」

ぽつぽつとジニムと話しながら、西の端に向かう。

背後で人の動く気配がしたから、あっちも解散になったんだろう。

「フリーリア様、先日の件、ニトジムが了承、と」

家に入ったところでもたらされた待っていた報告。

「そう。ありがとう、ジニム。ニトジム陛下にも、くれぐれも御礼
申し上げてね」

これで、全てが揃った。

06・フリーリア5

「聞いてないぞ!？」

「だから、今言っただじやない。

王太子殿下戦死。その首は籠城中の国王陛下に届けられたわ。陛下の訃報は届かないから、ご存命であるとは思うけど……」

食事と身支度を済ませたテオが、報告のためにフリーリアの入った家までやってきた。

この村に入る前にもたらされた情報をテオに告げる。

今後の打ち合わせも兼ねてこちらから報告したのだが……

——まあ、予想通りの反応

そう、この情報が入ってきたとき、花火を上げさせたのだ。

「嵌めたな……」

低い声で唸るテオ。

「人聞きの悪い。タイミングが良かったのよ。テオだって、同じタイミングで仕掛けるでしょう?」

当然のタイミングだったと言えば、反論できないテオ。あれが最高のタイミングだったのは間違いないのだ。

「だからって・・・王都の北兵たちはほとんどここだろう？ 国王はどうなってんだ？」

「それがね、テオ。今、ここに迎え入れた北兵たちは王都侵略兵たちとは別なのよ。ここに居るのは、王都から国境沿いの兵たち。フリーリア領に侵入しようとしていた兵たちだから、王都の兵とは別物らしいわ」

にっこり笑って言えば、絶句するテオ。
ハメたことになるが、ソレはソレだ。

「じゃあ・・・」

「うん。明日、王都奪還してきてね」

ほら、ここから王都は近いし。

「そのためにわざわざココに呼んだな・・・」

今更気付いても遅い。

「わたしたちの平和のためよ。ね、テオ。これで全てが終わるわ」

と、唆してみる。

——そう。すべてが、ね。

「ここまできたんだ、最後まで付き合ってやる」
不貞腐れたように言うテオに呆れた。

人を生き神様にしたんだ、このぐらいは我慢してもらわなきゃ割に合わない。

「――で、フリーリア。これからのこと、どうするつもりだ？」

「現状の整理からしましょうか。お互いの情報交換も兼ねて」

「ああ、そうだな・・・」

取り敢えず、こっちは予定通り北の王を討った。フリーリアの言った通り、統一国家ではない北の国は王の守りが弱かった。部族同士の結果は弱く、ほぼ自治領区だ。自分たちの領地に害がなければ邪魔はしない。国王という名の一部族長に従っていたのは、その部族が一番大きく兵力が勝っていたからだ。逆らえば、領地ごと潰される。だから従う。それで国家として成立させていた。国王――まあ、部族長か、を討ってその一族全てを拘束してきた。他の部族に国王になろうなんて気は無かったし、今はオーストリッチ侵略に男たちが出払っているのが幸いして混乱は無かった。

一応、兵の半分は置いてきているから問題はないはずだ」

こっちは、当初の予定通りだと告げられる。

北がこれ以上兵を送り込んでこないのであれば、後は国内に集中できる。

「こっちは、王都に帰還中の王太子殿下が戦死。その知らせが早馬で入ったタイミングで花火を上げたわ。その後、その首が籠城中の国王陛下のもとに届けられたと知らせが。大々的な発表ではないから、民たちは知らないはずよ。」

王都の北兵たちがそれと同時にフリーリア領に侵攻してきたから、ここよりもっと王都に近い所で叩いて、この地に迎え入れたの。

今、王都に残っている北兵たちは、北の王と同じ部族の者たちばかりだそうよ」

王都に残って籠城中の国王を見張っているのは、北の王に近い者ばかりだと、ここに受け入れた北兵たちが言っていた。

北の王が討たれたのは、テオたちが上手く隠したのだろう、まだ知られてはいないようだった。

オーストリッチの王太子の首を取り、国王はまだ籠城中、というこの状況に浮き足立っている王都の北兵たちから、王都奪還をするのなら今しかない。

——籠城中の国王が死ぬ前に終わらせなければ意味が無い。

北の王が討たれたと知られるのも、時間の問題だろう。

「ここを拠点に王都を奪還する。早いほうがいいんだろう？ 今から出る」

こう、と決めたら即行動はテオの美点だと思うが、いくらなんでも早すぎる。

「待って、兵たちは十分休息を取っていないわ。急いては事を仕損じる」

「だからって、もたもたしてられないだろ？ 皆を集める」

言うが早いか、すぐ出て行ってしまうテオ。

やっぱり、今日はゆっくり眠ることは出来ないらしい。

もう、外は暗くなっている。

今から向かえば、王都に着くのは深夜前。奇襲にはもってこいの時間だが、兵たちにそれだけの余力があるのか。

「ジニム、どう見る？」

「……ここに居る北の兵達が味方に付けば」

「明日はベッドで眠れるかしら？」

「……王宮の、ですか？」

「まさか。希望はフリーリア領の砦の寝室よ」

表から呼ばれて外に出れば、テオを初めとしたオーストリッチの兵と軽症の北兵たちの姿。

膝を折り待つ兵たちのその姿に、舌打ちしなかった自分を褒めてやりたい。

「フリーリア、今から王都奪還に向かう俺達に女神の祝福を」

——わざとらしく礼を取るテオの横っ面を叩かなかった自分を褒めてやりたい！！

「……王都奪還は急を要する事だけど、私は貴方達の体が心配だわ。北の兵たちは負傷しているし、テオたちは北の地から戻ったばかりで満足に休息すらとっていないでしょう？ 強行に推し進めるのは、貴方達の負担にしかないわ」

「パディ、私たちなら大丈夫です。パディの御慈悲で、適切な処置と食事、そのうえ身を清めることまでさせていただきました。家を

開放して下さり、ゆつくりと体を休めることができました。私たちは、十分戦えます」

国ではなく、フリーリアに忠誠を誓う、と口にした北兵が言う。どうやら、この男がリーダー格らしい。

豊穡の女神だけでなく、北の慈愛の女神、パディまで兼任しなければならなかったらしい。

——本格的に生き神様だわ・・・

「俺達も大丈夫だ。食事も取ったし、身も清めた。休息は十分取ったさ。

今から向かえば、奇襲にはうってつけのタイミングだろう？」

どこかで聞いたような台詞を返され、王都奪還は決定した。

——私の睡眠不足も決定した・・・

「わかった。今から向かうのはいいわ。でも、色々下準備が必要だわ。

砦に伝令を出して。ココの守りと、重傷者たちの看護の者を手配。あと、必要物資の調達をしてココに運び込んでおくように、と」

奪還に向かうなら、それなりの準備をすませなければならない。ココを拠点にするのなら、守りはきちんとしておかねければなら

ない。

前線に送り込む物資も必要だ。

「それと、馬を一頭。私も一緒に行くから」

「フリーリア?！」

「パディ?! 危険です!!」

同行を反対されるのは予想の内。

しかし、これだけは譲れない理由がある。

「火薬がまだ王都にあるわ。王城を爆破できるだけの量が、ね。動きを見れる私が一緒の方が良いのは道理でしょう？」

テオたちの足手まといにはならないわ。ジニムがいるもの。ね、ジニム」

「御意。フリーリア様に危険は近づけません」

即対応するためには、近くに居たほうがいい。

テオに万一の事があつては、今までの苦労が全て水の泡だ。

「わかった。ジニム、フリーリアを頼む。

今の内容、砦に伝令を。馬は足りるだろうが確認して来い。利き腕と足を負傷している者はココに残って守備と物資の受け取り、伝令を担当してくれ。ココまで逃げてくる者がいたら生け捕りに。隊を組みなおす。30分でお出ろ。——急げ!!」

ばたばたと準備に取り掛かる兵たち。

「フリーリア、馬に乗れるのか？」

「いいえ。ジニムに乗せてもらおうわ。最後尾に着くから、一人伝令係を付けてくれる?」

「ああ。今の王都、兵の人数はわかるか？」

奇襲では、最初にどれだけ敵を混乱させ討てるかで勝敗が決まる。大体、成功させるには敵兵と同等の兵力を送り込む。

「多分、50人ぐらい。表だけ叩くなら、20人ね」

「部隊を2つに分ける。一気に叩くからフリーリアは俺と後方だ」

「後方？・・・ああ、北兵を奇襲に使うのね・・・」

テオの不思議な発言に、少し考えて納得した。

もともと味方だった北兵を奇襲部隊として先に送り込めば、相手の油断を誘える。

「戦略まで考えられるのか？ 利口だな」

チラリと見られ、慌てて口を噤んだ。

余計なことと言わないほうがいい。

「王宮の前に20人程。そこに、火薬もあるわ。多分、馬車か何かに積まれてるんだと思う。気をつけてね」

これ以上余計なことを言う前に、必要であろう情報だけ伝えて出発の準備のため、一度部屋に戻った。

07・フリーリア6（前書き）

ちよつと残酷描写入ります。

ぬるいけど、苦手な方もいらっしやるかな、と。

あと、かなり罰当たりな行動描写が・・・。

07・フリーリア6

沸き起こる歓声と、冷めやらぬ熱気。

奇襲に成功したテオたちは、王宮を奪還した。

「くっそう!! やられた!!」

王宮に入り、国王が居るであろう部屋に入れば、そこには物言わぬ屍の姿。

だだっ広い豪華な部屋には天蓋つきの豪奢なベッド。
ここは、国王の寝室に間違いは無いだろう。

その豪華さに似合わない、どす黒いシミ。

その中心には、首の無い屍が一体。

身に着けている衣装や体つきから、国王陛下に間違いない。

首が付いていないことから、断定はできないが。

確認した瞬間テオから漏れた悪態は、私とまったく同じものだった。

「……王太子の首も無いわね。一体、誰が？」

制圧した北兵たちの誰一人、首は持っていなかった。

「フリーリア、籠城中の人間は20人ぐらいだと言っていたな？」
「ええ。籠城が始まってすぐはそれぐらいだったはずよ」

火薬が運びこまれたときは、城の中にそれぐらいの人数が居た。

——ん？ 火薬？

「テオ！！ 火薬が無い！！！！！！」
「！！！！」

奇襲のときには、表の馬車に積まれていた火薬が、1台、そこに無い。

ちゃんと、確認してこちらの管理下に置いたはずだ。

「どこだ？！」

「今、見てる！！・・・下？ 地下道！！」

言うが早いか駆け出すテオに付いて、私も走る。

王宮の地下道の入り口なんて知らないから、付いて行くしかない。

——嫌な予感。

「王宮に残っている者たちに伝令を！！ すぐに王宮から出なさい
！！ 表門にて待機！！」

一緒に付いてきた兵に向かって怒鳴る。
すぐさま引き返した姿を視界の隅に捉え、安堵する。

しばらく全力疾走を強制され、体力の限界を迎えようとした手前で古びた小屋から出てくる者と出くわした。

顔色悪く、必死の形相で出てきた初老の男に、嫌な予感的中したのだと知る。

「その者を捕らえよ!!」

「下がちなさい!!!!」

フリーリアとテオの声が同時に響く。

一拍遅れて、爆音!!

下からくる振動にバランスを崩せば、ジニムに庇われ地面に伏せる。

恐る恐る王宮を見れば、その半分が下から崩れ落ちていた。

「マテオ様!!」

「カザム?!」

この場に似合わない頓狂な声に振り返れば、この場に似合わない頓狂な顔で互いを見詰め合うテオと初老の男の姿。

——シユールな光景・・・

「宰相のお前が、どうして・・・」

信じられないといった声で問うテオに、カザムと呼ばれた初老の男は何も答えなかった。

「陛下は、第二王子殿下を亡くされ、王太子殿下の敗戦を聞くと、すぐに籠城なさいました。北の侵略兵たちが王都に入り込み、王宮に残っていた兵たちだけでは到底切り抜けられなくなったためです。籠城に従ったのはわたしを含む上位貴族20名と数人の侍女。あとはもともと残っていた下女たちです。他の者は戦況の悪化に伴い王宮を出ました。」

籠城が長引くほど食料も底を付き、戦況はまったく好転しない。精神的に限界に達したとき、唯一の希望であった王太子殿下の首が届けられました。

それを見て、陛下は狂ってしまわれた。残っていた貴族たちも、今更城を出て捕虜にされるぐらいなら、と自ら命を絶しました。どうせ、家族も財産も全て北の手によって強奪されているのです。惜しむ物はありません」

宰相の地位にいたカザムを連れ、無事だった王宮に戻った。

爆破されたのは、王族の私室のある後宮だったため、城の表、政務室や客室のある公式の部分は無傷で残っていた。

そこで、籠城者唯一の生き残りであるカザムに話を聞いていた。

「わたしは、むぎむぎ国王の首を、この城を北にくれてやるのは嫌だった。せめて、一矢報いたかった。陛下の首を落とし、王太子殿下の首とこの城を道連れに死のうと、火薬を拝借し、地下道に潜りました。」

まさか、マテオ様が奪還に来ていただいと露ほども思わず、ついに北兵が入り込んできたのだと・・・」

短慮だったと嘆くカザムにかける言葉は無い。

——私にとっては最高の結果であるのだから、余計にね。

「地下道から出てきたのは何故だ？ やはり、命が惜しくなったか？」

容赦の無い言葉に、しかしカザムは首を横に振った。

「あの地下道は後宮の地下道。後宮を爆破したのち、こちら側も爆破し、落城を見届けながら死ぬつもりでした」

「・・・では、火薬はまだあるのか？」

テオがこちらにも視線を寄越して確認する。

持ち出された火薬はもう見えないので首を横に振れば、カザムも否定した。

「ごいません。もう一度、拝借するつもりでした」

持ち出された火薬は、馬車1台分。

残りの2台は確認が取れているので心配はないだろう。

「二人の首はどこだ？」

「神殿に・・・」

控えていた兵に取りに走らせる。

ここに持ってこられても困るのだが。見たくないし。

などと思っている間に、兵が大きめの木箱をもって戻ってきた。

「これか？」

「はい。陛下と殿下の御首です」

蓋を開けるテオから、見えないように視線を逸らす。

「確かに。・・・。今後のこともある。このことはまだ伏せておけ。

カザム、お前の処分も保留だ。勝手に死ぬことは許さん。客室の1つに連れて行け。

各区域の見張りだけ残して兵たちには休むように伝えろ」

兵2人に連れられて部屋を出て行くカザムを見送り、木箱を足元に置くテオ。

「・・・ねえ、せめて、そっちのテーブルに置かない？」

いくらなんでも、足元はイヤダ。

うっかり蹴飛ばしたらどうするんだ。

「ああ」

「っっ!!」

拾うのも面倒なのか足蹴にするテオにもう悲鳴すら上がらない。
見かねた隊長補佐が拾って奥のテーブルに置いてくれた。

「さて、フリーリア。今後のことだ。どうするつもりだ？」

ココに残ったのは、フリーリアとテオ、隊長補佐のポトスとジニムの4人。

もつとも信頼できるメンバーだ。

「フリーリア領に帰るわよ」

「「……………は？」」

至極全うな返事を返せば、ジニムにも聞き返された。

「ん？ 何かおかしい？ 王都も奪還したし、北も制圧したし、これで何の憂いも無いもの。わたしは帰るわよ」

当たり前でしょう？ と言えば、全員に微妙な顔をされた。
はて、これ以上どんな答えがあるのか。

「本気か？」

「ええ。平穩無事な日常を送るために戦を終結させたかっただけだし。それが叶ったんだもの。これ以上何があるの？」

テオの質問に答えれば、またまた微妙な顔。

「質問を変える。今後必要な処理は？」

「戦火に巻き込まれた民達の確認。戦場になった国土の回復。爆破された王宮の修繕。北との和平問題。国庫の回復。人員的処置も必

要でしょうし、まずは国政に携わることの出来る人間の確保ね。あ、その前に、オーストリッチ国は国として存続させなければならぬでしょう？ それには、国王もしくはそれに同等位の人間が必要になるわね」

大変、問題は山積みだわ、と指折り数えてやる。
こんな事が聞きたかったのか？

「そう、山積みだ。何をするにもまず、司令塔が必要になる。国として存続させていくには、その司令塔は国王であるべきだ」

「まあ、そうね」

「今、国王並びに王太子は首だけで、司令塔には成り得ない」
「首がしゃべったらホラーね」

それはゴメンだ。

「……。ゴホン。新しい国王が必要だ」

「そうね」

「その国王はフリーリアだろう？」

「いいえ、テオよ？ ニトジム陛下の後ろ盾も頂いているもの」

「「……」」

お互いが満面の笑顔で対峙する。

「誰がそんなクソめんどくさい者になるか！！ フリーリアがなればいいだろう?!」

「馬っ鹿な事言わないで!! 第三王子のマテオ様が王位に就くのは当然でしょう?! 面倒事全部こっちに押し付けないで!!」

そして、同時に爆発した。

傍らで聞いていたジニムとポトスは引き攣った顔をしている。

「ニトジム陛下の後ろ盾って、ハナっから俺に押し付けるつもりだったな?！」

「当たり前でしょう?! こうなるのは目に見えてたもの!! せっかくのその身分、有効に活用しなさいよ!!」

「してたまるか!! 俺は平凡な平和な日常が欲しいんだ!!」

「わたしだってそうよ!! フリーリア領で気楽な毎日送るんだから邪魔しないで!!」

「北の兵たちはフリーリアに忠誠を誓ったんだぞ?! それを見捨てるのか?！」

「だからってわたしが国王になる必要は無いわよ!! ホージュ国のようにフリーリア領主として同盟を結べば問題ないでしょう?！」

ヒートアップしていく私たちに、ジニムもポトスも口を挟むことができないようだ。

「―――が、ここで引いてたまるか!! 自由の無い生活も生き神様もこれ以上はゴメンだ!!」

「いいじゃない、国王にぐらいなりなさいよ!! 最高権力者なんだから好きに生きればいいのよ!!」

「その台詞そのまま返してやる!! 領主も国王もかわんねえだろ!!」

「変わるに決まってるでしょう?! わたしは自由に生きたいの!!」

「あとう、隊長・・・」

「フリーリア様・・・」

「「なに！！」」

遠慮がちにかけられた声に同時に反応すれば、1歩後ずさる2人。

「ひとまず、お休みになられたらいかがですか？」

「お疲れのときは、いい案も浮かびませんし」

「・・・・・・・・。そうね。寝不足の頭じゃ疲れるだけだわ。寝る」

「だな。とりあえず、3時間後にまた」

「冗談言わないで。5時間後にまた」

「・・・・・・・・目覚めたら教えろ」

テオの声に手を振るだけで答えて、隣の部屋にジニムと共に入った。

08・フリーリア7

王宮につめかける人々。

その顔は期待に満ち、時が来るのを今か今かと待ちわびている。戦場となった王都だが、それでも今は人々の熱気と活気で満ちていた。

爆破から逃れた王宮正面のバルコニー。

そこに続く、控えの間。

外の賑わいとは裏腹に、一触即発の雰囲気がある。その場を支配していた。

普段の騎士服とは違う、——それでも騎士服にはかわらないが——正装で仁王立ちのテオ。

私はテオの正面のソファに座らせられ、プイッと横を向いている。

ちなみに、右隣にはニトジム陛下が腰掛け、私は左を向いている。

「いい加減諦めろ、フリーリア。往生際が悪い」

ため息混じりにテオに言われるが、ここで頷くわけにはいかない。

——諦めてなるものか!!

ツーンと横を向いたまま、テオを無視する。

この部屋には、フリーリアとテオ、ジニムとニトジム陛下。隊長

補佐のポトスとニトジム陛下の側近兼護衛のデシエしか居ない。

事の起りは3日前。テオと言い合った翌日。

キツチリ5時間後に呼び出したテオと、また言い合った。

私はこれ以上の面倒事は御免だったし、テオも国王になるつもりはなかった。

最高権力の押し付け合いに、周りの者たちは口を挟めなかった。

「我等はパディに従う。パディがこの国の王となるなら、我等はこの国の属国となろう。パディが領主のままなら、フリーリア領と和議を結ぼう。全てはパディの御心のままに」

そう言ってフリーリアに膝を折ったのは、一時帰国から戻った北の兵たち。

公式の場を設ける、との約束通り、ほんの数刻前まで話し合いが行われていたらしい。

何の抵抗も無く、北の兵たちは『フリーリアにのみ従う』と公言したという。

「国家間の混乱を防ぐためにも、フリーリアが国王になるべきだ。こうして北兵たちは、フリーリアを主と認め、従うと言っている」

そう言うテオに、真っ向から反対したのがオーストリッチの兵たち。

「隊長が、マテオ殿下が王位を継ぐべきです。我々は、貴方だから

こそ国王を見限りフリーリア様に付くことができた。

貴方が信頼するフリーリア様だからこそ信じたのです。我々はフリーリア様に忠誠を誓ったのではない。マテオ殿下、貴方に忠誠を誓い、この命を賭けたのです」

「そうです。マテオ殿下は王位継承権すらお持ちではないが、その身は第三王子殿下。王太子殿下、第二王子殿下亡き今、マテオ殿下が王位を継ぐのは道理でございます」

兵たちが続くのは、政事を中心に居た者たち。

籠城した国王に従った上位貴族より、一段下に位置する貴族たち。

国王を早々に見捨て、己は財産を持って隠れた卑怯者共。

テオは政治のためにコイツ等を処分しないでいる。

それを、許されている、と勘違いしている愚か者ども。

なんて甘い考え。

今まで隠れ、片付いた場合に我先にとテオに取り入ろうとしているコイツ等を、テオは殺すだろう。

今はまだその時ではない、というだけで生き長らえているが、この問題が落ち着けば、テオは必ずヤル。

コイツ等を見る冷ややかな眼差しがソレを証明している。

気づかないボンクラ共は、今からの世には不要だろう。

「ほら、皆もそう言ってるわ。北兵たちとは、フリーリア領主として和議を結ぶわ。そして、フリーリア領主は国王マテオ殿下に忠誠を捧げる。

それで、北との国交に支障はないし、国家間に問題も生じないでしょう？」

ほら、これで良い！！ と笑えば、大きく肯定を示すボンクラ共。

——ボンクラでもなんでも、私の役に立つから問題なし!!

よし、これで帰れる!!　と思ったのだが・・・

「忘れてないか?　民は王家の血などもはや望んではない。民は、豊穡の女神を望み、希望を抱いている。民を忘れた愚王の息子なぞが王位に就けば、今度こそこのオーストリッチは亡くなるだろう。民から見捨てられた王族など、もはや王族ではない。そうだろう?」

静かに告げられたテオの言葉に、反論できる者は居なかった。

——私を除いてね!!

「だからこそ、テオが王位に就くべきなのよ。幸い、テオは王位継承権を与えられていないわ。

自身の欲に狂った愚王を、民を憂いた臣下に下った末の王子が、南の協力と北の賛同を得て討ち果たす。その姿に豊穡の女神が祝福を与えた——民の心を掴むにはうってつけの美談・・・いえ、英雄談だわ。英雄に守られた民たちはその英雄を新王とし、王家の威信は回復するでしょう」

ありふれたファンタジーの王道と、何度目かのトリップでの経験を合わせた物語に満足して、だから、テオが王様ね。と言う。

私の言葉に賛同するボンクラ共と、オーストリッチの兵たち。

「どんな夢物語だ、それは……。俺は先王の行いに憂いてないし、南と和議を結んだのも北が忠誠を誓ったのもフリーリアだ。第一、俺はフリーリアの指示通りに動いただけだ。民たちだってソレを知っているだろうよ。誰も、そんな夢物語は信じない」

往生際悪くそう言うテオに、ニヤリと笑ってやる。

「わたしは一切表に出てないもの。現場の指揮を取って兵たちをまとめ、動いたのはあくまでテオ。象徴にすぎない女神より、民たちは英雄を求めるわよ」

何のためにテオを動かしたと思ってる。

民たちの前に立つのは、人間でないといけないのだ。

だからこそテオは、マテオ・オールド・オーストリッチは、その身分を捨てたのだろう。

わかってはいるが、1人でその重責を負うのは嫌、というところか。

——だからって、フリーリアが表に立つのは勘弁。

「わたしたちの平和のためよ、テオ」

トドメとばかりに言う『合言葉』

嫌そうに歪むテオの顔に、勝利を確証した。

じゃあ、領に戻るわ、と言おうとして——

「条件がある」

低く発せられたテオの言葉に行く手を阻まれた。

——とてつもなく、嫌な予感・・・

「アイサヴィーのことなら、領に帰ったら書状を送らせるわ」

先手必勝！　と口を開くが・・・

「ちがう」

一刀両断。

「北との和平交渉・・・」

「ちがう」

「拡大しすぎた領土・・・」

「ちがう」

「・・・」

「・・・」

じゃあ何?!　とは、怖くて聞けない。

平和で穏やかな日常が崩れる!!

あと1歩なのに!!

ここさえ切り抜ければ叶うのに!!

「利口だな、フリーリア。ここで口を開けば墓穴を掘る・・・。
そんな利口な女が、俺には必要だと思わないか？」

———思うかあつ

「そのうえ、フリーリアは豊穰の女神だ。国の繁栄は約束されたようなものだな」

———そんなことはない！！

「南も北も、フリーリアならば問題なく賛成してくれるだろう」

———ナニヲデスカ

「戦場と化した国土を復活させ、民たちを安心させるには、国王だけじゃ足りないと思わないか？」

———オモイマセン

「なあ、フリーリア」

嫌な汗をかきながら、しかし声を発することの出来ないフリーリアを正面に、にじり寄ってくるテオ。
少しづつ後退するフリーリア。

「これより先、俺が国王となるなら、フリーリアは王妃として俺の隣に並び立て。俺が国を救った英雄ならば、フリーリアは国を繁栄に導く女神だ。豊穰の女神が王妃ならば、民はこれ以上ないほど安心するだろう」

これ以上は聞くべきではない、聞いてはいけない、と逃げ出そうとした矢先、テオに手を捕らえられ真剣な瞳で告げられた。

冗談じゃない、と言うつもりだった。

「マテオ様、なにを?!」

悲鳴のような声がボンクラ共から上がり、何とか正気に返る。

「テオ。王妃はこの国の最高権力者の妻。そんな地位に、ただの平民であるわたしが立つわけにはいかないわ。

並び立つ者が必要ならば、それは身分ある家の姫君か、他国の王族であるべきよ。確固たる後ろ盾のある女性こそ、その地位は相応しい」

身分の無い女が王妃に立った事もあった。

農村に生まれた女が、寵姫から王妃へと上り詰めたこともあった。

しかし、それには大なり小なり問題が付き纏う。

女の醜い嫉妬然り。

権力欲のジジイ共然り。

———そんなくそメンドクサイのは嫌なんだ!!

何度目かのトリップ先での記憶が蘇る。

あの時は本当に酷かった!!

「ただの女ならそうだろう。でも、フリーリアは違う。アイサヴィー鉱山を見つけ、荒んだこの国に豊穡をもたらした。

南国ホージュ国のニトジム陛下が唯一神である豊穡の女神パエラと認め、親愛を示した。

北国の兵たちが慈愛の女神パディと認め、忠誠を誓った。

この国の民たちは、フリーリアを神聖視している。

そんな民たちは、国王だけじゃ安心しないだろうよ。継る者が必要だ。それには、皆が認め、敬う女神は最適だと思わないか？」

だから、王妃となって隣に並び立て、と言うテオ。

「マテオ・オールド・オーストリッチは、豊穡の女神フリーリアを唯一の王妃に望む」

声高に宣言された一言に、ブラックアウトしたのは言うまでもない。

09・フリーリア8

意識を手放し損ねた身体は、テオに支えられてソファに座らされた。

テオが王位に就くには、フリーリアを王妃に据えなければならぬ。

そう宣言されたボンクラ共は、もはや蒼白だった。

テオの宣言に同意を示したのは、オーストリッチと北の兵士たち。テオとフリーリアに向かって膝を折る。

「我が祖国ホージュは、新国王マテオ陛下と新王妃フリーリア陛下に変わらぬ親愛を誓おう。

これは、我が弟であるホージュ国王ニトジムの意思である」

ジニムの宣言に、ますますボンクラ共の顔色が無くなった。

南の大国ホージュがフリーリア領主と和議を結んだのは周知。

そして、ジニムがフリーリアの騎士であるのも周知。

そのジニムが、ホージュ国王の姉であると宣言した。

それだけでも、このボンクラ共はフリーリアを無視できないのに、そのうえ大国ホージュがフリーリアを王妃と認めた。

北はすでにフリーリアにのみ忠誠を誓っている。

フリーリアが王妃に就くならば、北はオーストリッチの属国となるだろう。

———やられた！！ 甘かった！！！！

まさか、テオがフリーリアを王妃に望むとは思わなかった。
テオに、その気があるとは思わなかった！！

「すぐに民たちに知らせを！！」

この国をお救い下さった英雄マテオ様が国王として即位されると。
豊穰の女神が王妃として立ってくださると。

マテオ様が父としてこの国をお導き下さり、豊穰の女神が母として繁栄の祝福を与えてくださと！！」

バタバタと忙しく動き出す周りの者たち。

気づけば、部屋にはテオとフリーリア、ジニムとポトスの4人だけになっていた。

「嵌めたわね・・・」

このメンツで遠慮はいらない。

「人聞きの悪い。これが最良だろう？」

いつかと同じ、嫌な笑いのテオ。

「それとも、女神の塔に閉じ込めてほしかったか？」

父王はそのつもりだったぞ、と言われて口を噤む。

「まあ、諦めろ。自由は制限されるが、平和は約束されてんだ」

くつくつと笑うテオは本当にムカつく！！

「・・・テオが、わたしを王妃に望むとは思わなかったわ」
「ああ？ フリーリア以外の女、妻にする気はないぞ？」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

どうも、何かが噛み合わない。

「嫌がらせ、よね？」

「何がだ？」

「わたしを王妃に据えるの」

「国王の妻は王妃だろう？ だったら、俺の妻は王妃になるだろう？
何で嫌がらせなんだ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

これ以上は突っ込んではいけない気がする。
気がするけど！！

ジニムとポトスからの視線が痛いのはナゼだ・・・

「どうして、わたしを王妃に望むの？」

「俺が国王になるのが逃げれないなら、これしか手は無いだろう？」

このまま離れたら、二度と会えないだろう？ と言われる。

「別に、会わなくても・・・」

そう言ったとたんに向けられた驚愕の眸。

「フリーリア様、まさか、お気づきになっていらっしやらないのですか？」

「隊長、ちゃんと伝えましたか？」

恐る恐ると聞いてくるジニムとポトス。
はて、何のことだ？

「フリーリア。俺は、オマエが好きだと言わなかったか？」

今度こそ、ブラックアウトしてイイデスカ・・・？

———って、しないけど!!

「わたしが好きならそっとしておいて」

面倒事は嫌なの、と可愛らしくお願いしてみる。

「俺が、この好機を逃すと思うか？」

惚れた女を妻にする絶好の機会だぞ？　と言われる。

「好きな女の幸せ望みなさいよ!!」

「好きな女だから妻にするんだろうが!!」

「それが嫌だって言ってるの!! 王妃なんて幸せになれるはず無いでしょう?！」

「世間一般から見れば王妃は女の最高の幸せだ!!」

「ンなハズあるか!! 政治なんて面倒事まっぴらよ!!」

ヒートアップしていく私たちに、二人は口を挟めない。

——なんだろう、この既視感^{デジャブ}・・・

「甘くならないのはなぜでしょう?」

「さぁ・・・」

などと言うポトスとジニムの声が聞こえたが、無視。

「俺はフリーリア以外の女はいらないんだよ!! 黙って愛されとけ!!」

「——っっ!」

真正面から、強く抱きしめられた。

——やばいなあ。流される・・・

落ち着くために、深呼吸をひとつ。

ここで、こうして言い合っている仕方が無い。

「フリーリア領から物資の手配を。戦火に巻き込まれた民たちに当座の食事だけでも配給して。」

大部分を事前にフリーリア領に受け入れていたから難民は居ないと思うけど、大至急確認して。特に、子供たちや女たちが奴隷に落とされていないかの確認を急がせて。

平行して、戦場になった村々の復旧も指示しておいて。人員が足りなければ北の兵たちに協力要請を。資金は、あのボンクラ共から出させればいいわ。どうせ、私腹を肥やしているんでしょうし。逃亡の後ろめたさがあるでしょうから、上手く巻き上げていきましよう」

冷静さを取り戻すために、最優先事項の指示を出す。

——まだテオの腕の中なのは気にしてはいけない！！

テオの目を上手く逸らす事ができれば、逃走ルートも見つかるだろう。

——ええ、諦めていませんよ。

「王宮の修復は？」

「そんなのは最後でいいわ。まずは市井の者たちを最優先に。ジニム、申し訳ないけど、御国との国境に関所を設けてくれるようにニトジム陛下にお願いしてくれる？ この混乱に乗じて商人が入り込めば、無駄な物価混乱が起る」

「どこの世界の商人も商魂逞しい。

戦争が終わったばかりの国は、商人たちの格好の地だ。

物資が不足するから、いくら高値でもどんどん売れる。

「すぐに手配いたします。必要なものがあれば仰ってください。ホーージュから送らせます」

「ありがとう。食料をお願いしてもいいかしら。できれば、主食を」

南の大国ホーージュは、その広大な大地と安定した気候から食料の生産率が高い。

不作とは無縁な環境で、他国に輸出しても有り余る国庫を抱えている。

荒野が大部分を占めるオーストリッチとは長年貿易関係がある。

「ポトス、この見張りは北の者たちに任せて、町に兵を出せ。難民たちの保護と、治安の確認を急がせろ。あと、キフトたちを集めておけ。国土復旧に尽力させてやる、と」

やっと腕を解いたテオに指示され、ジニムに続いてポトスも部屋を出る。

「いくら面倒事は嫌だったからって、わたしまで巻き込まないで。本当にわたしを好きなわけじゃないんでしょう？」

二人になった部屋の中。

世迷いごとをぬかしたテオに詰め寄る。

フリーリアを好きだと言ったテオの言葉はもちろん信じていない。そんなに甘い関係じゃあなかったはずだ。

「……おまえなあ。いくら俺でも、好きでもない女と結婚はしたくないぞ？」

「何の目論見もなく純粹にわたしを愛しているから妻に迎えたい、なんて薄ら寒いこと言ってみるつもり？」

「ああ。フリーリアを愛してる」

「ぬけぬけと…… テオは愛してる女に苦勞を背負わせるのねえ」

ブリザード吹き荒れる（気分）中の応酬。

『愛してる』の言葉にコロリと騙される程純粹じゃない。

テオの瞳はフリーリアに対して欠片の熱も持っていない。

「どうしたら信じてくれるんだ？」

「本心ゲロっと暴露しなさいよ。事と次第で『共犯者』にならなれるかもしれないわよ？」

ふふん、と軽く見下してみる。

私を謀るなど100年早い。

「共犯者、ね。 本当は国王はフリーリアに任せて、俺は側近にもなるつもりだったんだ。それを、フリーリアが嫌がるからこうしたのに……。好きな女の側に居たいのがどうして共犯になるんだ」

不貞腐れて言うテオに、トンデモナイ勘違いをしているような気になってきた。

——まさか・・・冗談でしょう?!

初めてフリーリアとテオが出会ってから、2年弱。

テオはたぶん18ぐらい。

戦争に明け暮れる毎日。

身近に居た女。

導き出される答えは・・・?

——ぎゃー——!!!!

おっそろしい仮定に辿りつき、思考が一時的に麻痺する。

いくら頭が良くても、これだけは学ぶことが出来ない。

感情如何に関わらず、今まで近くに居すぎた。

——やばいやバイやばいやバイやばいやバイ!!

瞳に熱が無いのは、熱の持たせ方を知らないだけだったら。

何の憚り事も無く、本当にただ離れがたいだけだったら。

甘い関係にならなかったのは、なり方がわからなかったただけだとしたら。

―――に、逃げ道―――！

パニックに陥った頃、ナイスタイミングで二人が戻った。

「フリーリア様、手配終わりました」

「隊長、隊を町に向かわせました。キフト伯たちも、別室に集めてあります」

漂う微妙な雰囲気、首を傾げつつ報告する二人に安堵を覚えた。

「フリーリア、難民が居た場合、受け入れ先はどうする？」

「王都奪還に使ったあの村で。あと、フリーリア領に吸収した村から復旧していった。使える物が多いから、効率がいいはずよ。王都はしばらく放置でいいわ。ほっておいても人が集まれば勝手に復旧するから。ニトジム陛下から主食が届いたら民たちに配給を。心無い領主たちが居るといけないから、手間でも兵たちに各々配らせて。後は治安維持に勤めさせて」

「キフト達からの資金集めは？」

「テオに任せるわ。どうせ国庫に入るはずだったお金でしょうから、全部吐き出させても問題ないわよ」

問われたことに答えれば、テオの視線とぶつかった。

そこにあった、ともし始めた熱は気づかなかったことにする。

「わかった。キフトたちの所に行ってくる。フリーリアは？」

「部屋に戻るわ。何かあったら知らせて」

クルリと向きを変えて充てがわれている部屋に戻るために扉を開

ける。

廊下には北の兵たちの姿。

フリーリアの警護に、と言うテオの声を背中越しに聞く。
後ろから付いてくる北の兵と、隣にはジニム。

ホッと息をついて寝室に入れば、そこにはなぜかメイドの姿。

ジニムの背に庇われながら、厳しい声音を聞いた。

「誰の許可を得てここに入った？」

「先程、キフト伯より王妃様のお世話を申し付けました」

姿勢正しく言うメイド。

「フリーリア様のお世話は私が居るため不要。下がれ」

地位は騎士でも、その身分は大国ホージュの王女であるジニムに
言われれば逆らえるはずもなく、折り目正しく一礼して出て行くメ
イドを見送りベッドにダイブ――

「お待ちください、フリーリア様」

しようとして、なぜか厳しい顔のジニムに止められた。

両手を上にあげた、バンザイの姿勢のまま止まる。

――ま、間抜けだ・・・

ベッドを調べるジニムを眺めれば、枕の下から出てきた短剣・・・短剣?!

——だからイヤだったんだあっ!!

知らずに横になれば、首にグサリと刺さって即死。そんな位置。

「いかがなさいますか？」

その他に仕込が無いのを確認し終えたジニムが、むき出しの短剣片手に問う。

いっそ晴れやかなその笑顔が恐ろしい。

「初めが肝心だから、徹底的に叩いておくべきね——が理想だし、被害者がわたしじゃなかったらそう言うけど、捨て置けばいいわ。今、わたしを殺しても、何も変わらない」

言いながら、バサバサ服を脱いでベッドに入る。

「ジニム、部屋に誰も入れないで。食事もらえないわ」

「フリーリア様？」

「ジニム以外の立ち入りは一切禁止。もちろん、テオも入れないで。寝る」

バサリと布団を被って、引きこもり決定。

脱ぎ捨てた服を回収して、部屋を出て行くジニムの気配。

うっすらと聞こえる声は、外の護衛に指示を出したのだろう。

フリーリアが王妃に就くなど、考えただけでゾツとする。

一步外に出れば、即効で殺されるだろう。

タイミングを見計らって、フリーリア領に帰るのが懸命だ。

今、フリーリアが王城から居なくなれば、あのボンクラ共はここぞとばかりに身内の姫をテオに差し出してくるだろう。

いや、もうそのように動いているのかもしれない。

フリーリアを好きだ、と言ったテオ。

そこに、本気の熱がとまり始めていたのは見なかったことにする。ドツポには嵌りたくない。

それよりも、まず考えなければならぬのはこの状況の打破。

いかにしてフリーリア領に逃げ込むか、だ。

使える駒は意外と少ない。

ジニムも北も、フリーリアが王妃に就くことに同意している。

彼等を使うのは不可能だろう。

かといって、オーストリッチの兵たちは使えない。

テオに忠誠を誓っているし、何より誰が敵かの判断がつかない。

こっそり王城を抜け出したとして、1人でフリーリア領に辿り着くのは不可能だ。

つらつらと考えていて、いつの間にか本当に眠っていたらしい。

10・フリーリア9

次に目覚めたのは、翌早朝。

窓から見た外はまだ薄暗かったので、本当に早い時間だろう。

バタバタと慌しい足音——それも、数十人は居るであろう大音量

——と、騒がしい人の声で覚醒した。

起き上がれば、新しい服の用意がされていたので、ジニムが戻ってきたのであろう。

しかし、ここにジニムの姿は見当たらない。

取り合えず着替えて、意識を外に向ければ、扉の横に立つ4つの影と、忙しく動く複数の影が見えた。

——こんな早くからなんだあ？

扉を開けるのは危険だと判断。

内側から声をかける。

「護衛ありがとう。騒がしいようだけど、何事？」

まさか、声があるとは思わなかったのだろう。

一瞬の沈黙の後、返事が来た。

「マテオ殿下ご即位に伴い、裏切り者共の粛清を行っております。
王妃フリーリア様のお命を狙ったキフト伯はじめ、マング伯、チグ

リ伯も加担したと極刑を。その他、混乱に乗じて私腹を肥さんとした者、民を隷属にした者共も粛清の対象になっております」

——聞かなきゃ良かった!!

後悔先に立たず・・・。

「ジニムは？」

「マテオ殿下と打ち合わせ中です。御目覚めになられたら呼ぶように、と申し付かっておりましたので、今使いを出しました。しばらくお待ちください」

護衛の言葉に、了承を伝えてベッドに戻る。

どうやら、フリーリアの護衛は北の兵たちに任されているらしい。

さて。どうしたものか。

ドツボに嵌ってさくたいへん・・・ さすがにドジョウは出てこないだろうが。

ああ、あれはお池、か。

あのボンクラどもを処分するのはわかっていた。

理由付けをどうするのだろう、とは思っていたが、まさかフリーリアの殺害未遂を使われるとは思ってもいなかった。

それも、『女神殺害』ではなく『王妃殺害』だ。

どんな理由があろうとも極刑は免れない。

——よくもダシに使ってくれたわね・・・

そのうえ、これでフリーリアが王妃なのだと公に知らしめたことになる。

着々と外堀を埋められていく感覚に眩暈を覚える。

——こりゃ、早く逃げないと後戻りできなくなるわ・・・

「フリーリア様、失礼いたします」

ノックの後入ってきたジニム——と、オマケが1人。

「おはよう、フリーリア。ジニムが体調不良と言ってたけど、起きて平気なのか？」

強行軍だったしな、と言うテオの顔は本当に心配そうだ。

何も告げずに決行した引籠もりは、ジニムによって体調不良とされたいらしい。

まあ、あながち間違いではないが。

それよりも、とテオを見て、こっそり溜息をつく。

昨日の一件で自覚させてしまったらしい、テオの恋心。

その瞳には、昨日まで無かった熱がある。

どうやら、昨日の応酬は完璧に裏目に出たらしい。

「ありがとう、大丈夫よ。それより、騒がしいようだけどどうしたの？」

「ああ。害虫駆除をな。フリーリアが心を痛めたとジニムから聞いて……。」

悪かった。まさか、フリーリアが狙われるとは思ってなかった。ジニムが気づいたから良かったものの……。怖かっただろう？」

手を伸ばし、髪に触れるテオ。

今までしなかった行為は、自覚したゆえだろう。

——ヤバイ……

「平気よ。わたしが立后なんて、狙われて当然なもの」

だから、放っておいて、フリーリア領に帰して欲しい——と、頼むつもりだったのにつ

「安心しろ、フリーリア。邪魔するヤツラの処分はついたから」

これでフリーリアに逆らう者はいないな、と、テオに笑顔で言い切られた。

どこまでも、私の逃げ道を塞ぐつもりらしい。

「どうしたの？」とは、怖くて聞けない。機嫌の良いテオが不気味だ。

「私からご説明をいたしますが、その前に御食事をなさってください。今、こちらに運ばせます」

ジニムに言われ、そういえば昨日は何も口にしていなかった事を思い出した。

最後に食事をしたのは、王都奪還前の、あの村だったか。

「民たちの食べ物はあるの？」

「はい。ニトジムがすぐに食料を送ってきましたので、先程兵たちに配らせました。ですから、フリーリア様もご心配なさらず御食事を」

どうやら、民たちを心配して自分の食事を取らなかったと勘違いされていたらしい。

ただ、忙しくて忘れていただけなのだが……。

強制的に座らされたテーブルに、当然のようにテオも座る。

以前のような軽口の応酬が出来なくなったのは、感情の違いからか。

「ニトジム陛下にお礼を申し上げないと……。すぐに対応してくださったのね」

「ああ。国庫を開いて、主食のほか、当座の食料も手配してください。ジニムを通して御礼はしたが、フリーリアからも頼む」

「当座の食料まで……。ありがたいことだわ。ちゃんと、民たちに配ってね」

ただでさえ自給率の低いオーストリッチは、今回の戦で食糧難に見舞われているだろう。

フリーリア領から物資を提供させるように手配をしたが、到底間に合わない。

「ニトジムから、昨年1年間のオーストリッチ輸出量と同等の食料

が届きました。兵たちに配らせ、後は王宮の倉庫に」

食事の支度を整えたジニムも座り、報告を聞く。

「そんなに・・・これで、民たちが飢えることはないわね。ジニム、ニトジム陛下に御礼申し上げたいわ。お時間いただけるかしら」

できれば、今日にでも。

南との国境はフリーリア領の砦だ。

ニトジム陛下への御礼謁見と言う大義名分があれば、堂々とフリーリア領に帰れる！！

——とつてもいい考えだと思ったのにつ！！！！！！

「ああ、ニトジム陛下が、フリーリアの立后の儀にはご臨席くださるそうだ」

よかったな、と言うテオを、本気で殴りたくなった。

南の大国ホージュ国王を巻き込んでまで、フリーリアを立后させたいらしい。

「わたしがいつ、王妃に立つことを承諾した・・・？」

テオの目をそらして、その隙に逃げ出すつもりだったが、そんな悠長なことを言ってられなくなった。

私はわが身が可愛い！！ 正面から逃げ道を探す。

「何言ってるんだ？ 昨日、民にも知らせたし、北も賛成した。ホー

ジユ国もこうしてご協力下さっているだろう？
今更、逃げようなんて考えてないだろう？」

そもそも、逃がすはずないだろう？ と嗤うテオ。
どうやら、完全に逃げる機会を失ったらしい。

「立後の儀はいつ？」

「明後日。今日、キフトたちの公開処刑をして、明日、俺の即位の儀。明後日がフリーリアの立後の儀。」

ニトジム陛下は、明後日到着のご予定だ」

着々と進められている現状に溜息すら出てこない。
言葉を失う私を満足気に見て、テオは話を進める。

「復興資金はキフトたちの没収した財産を当てたことにした。話し合いの最中にジニムがフリーリア殺害の証人を連れてきたから、余計な手間が省けて助かった。かなりアクドイ事して溜め込んだから、十分足りるはずだ。」

フリーリアの懸念どおり、混乱に乗じて難民を隷属していた者も捕らえた。保護した民たちはフリーリア領預かりにしてあるから心配はいらない。

復旧作業も、北の兵たちが率先して動いてくれる。オーストリツチの兵たちは治安確認に走らせてる」

「商人の出入りも、ホージユ国側で規制いたしております。一切の出入りを禁止し、必要な物はホージユ国の兵に届けさせるように手配いたしました」

テオに続けて説明するジニムも、どこか嬉しそうだ。

——私に味方は居ないのか?!——

「ありがとう。北からの出入りはどうなってるの?」

自分のことはさておき、国のことを考える。

まだまだ混乱が残っているようなら、脱出の機会も残っているはずだ。

——もちろん、まだまだ諦めていませんとも!!

「それも問題ない。もともと北からの商人の出入りは頻繁じゃないし、属国となった北の者達はフリーリアの指示を違えない。こちらから細かな指示を出す前に、すでに関所が設けてあった」

それも確認済みだ、と言われて落胆する。

利口な男は好きだが、ここまで抜かりがないと怒りさえ湧いてくる。

「そう、なら安心ね。キフト伯たちの処刑、と言っていたけど、政治を回すだけの人員は確保できているのかしら? いくらなんでも、テオ一人じゃあ無理よ?」

落胆は見せずに、次の話題に移る。

どこかに逃げ道はあるはずだ!!

「それも問題ない。宰相はそのままカザムに務めてもらうことにした。その他の役職にも、ちゃんと人員を当ててある」

「そんなにすぐに見つかったの？」

たしか、中枢を担っていた貴族たちは、国王と共に籠城後、自害していたはずだ。

「ああ。もともとから、自決覚悟の籠城だったんだろ。きちんと、教育を施した後継者たちが残されていたんだ。中には今回の処分対象者となった愚か者も居たが、大半はちゃんと領地を守りながら生きていた。だから、政治のほうも何の問題も無い」

既に、その者たちが仕事に就いているという。

——引き籠もりが完全に裏目に出た・・・

「処刑した者たちの領地は？」

「国家預かりだ。まさか、領民たちを放っておくわけにはいかないだろう？」

「フリーリア領に吸収した場所も、国に返す？」

もとは他人の領地だった場所だ。

「いや、そのまま構わない。ただ、フリーリア領はフリーリアの私領地となるから、実際には国家預かりと変わらなくなる」

「どうして？ フリーリア領は自治領区よ。わたしの私領ならそのまま自治領区で構わないでしょう？」

今までだってそうだったのだ。

「だから、王妃の私領だ。領主不在のままでは自治もできないだろう？　まさか、王妃と領主の兼任なんてするつもりか？」

——その手があった！！！！

「ねえ、テオ」

「ん？」

「オーストリッチには、これからお金が必要よね？」

「ああ、そうだな。復旧費用はいいとしても、国庫は空だから、蓄えは必要だな」

「それには、アイサヴィーが必要よね？」

「ああ」

「そのアイサヴィーは、フリーリア領にあるの」

「そうだな。落ち着いたら、輸出再開するんだろ？」

「ええ。でも、フリーリア領が自治領じゃなくなると、輸出もままならなくなっちゃうの」

「……それで？」

「国庫のためにも、フリーリア領は自治領のままにしたほうがいいと思うの」

「……」

「だからね、」

わたしをフリーリア領に帰して——と続けるはずだったのに！！

「御心配には及びません、フリーリア様。アイサヴィーをオーストリッチの主産業とし、フリーリア領を国家庇護の産業地となさって、フリーリア様がその権限一切をお持ちになればいい。そうすれば、

フリーリア領はそのままフリーリア様の私領となりますし、領主を置く必要もなくなります。国家庇護ですから、私利私欲では動かせなくなります。私領ですから利益の何割かはフリーリア様の私財として蓄えることもできます」

実際、ホージュ国ではそのようにして領主との均衡を保っている、というジニムの言葉に、あっさりと逃げ道を塞がれた。

もう少しだったのに！！！！

「そうだな、そうしよう。採掘も輸出も、国が庇護すれば安定する。フリーリアから私領を取り上げなくてすむし、私財も貯まる。よかったな、フリーリア」

にこにこ笑顔で言われ、こっちは絶句した。

すぐに手配しよう、と言うテオに、ストップをかける良い言葉も浮かばない。

地位も身分も無いフリーリアが王妃に就くにあたって、問題となるのが後ろ盾だ。

幸か不幸か、南の大国ホージュはフリーリア個人に親愛を示し、北はフリーリア個人に忠誠を誓った。

これによって、フリーリアは南と北の後ろ盾を得たことになる。

このままフリーリアが王妃となれば、オーストリッチは南との友好な関係と、北の領地が一度に手に入るのだ。

そのうえ、国庫の要であるアイサヴィーはフリーリアの私財。

これでフリーリアは、外交と、みなみ軍事力と、きた財力を持つことになった。

一国の王女と変わらぬ後ろ盾を持ったフリーリアを、だれも廃することはできないだろう……。

いつの間にか食べ終えていた食器をジニムが片付け、食後の御茶を飲んでいると、慌しくノックされる。

テオが入室を促せば、入ってきたのはポトスだった。

「処刑の準備整いました」

「わかった。フリーリア、いつてくる。俺が戻るまで部屋から出るなよ。ジニム、フリーリアを頼む」

ちゅっ、と頬にキスをされ、呆然とテオの背中を見送った。

11・フリーリア10（前書き）

不適切な表現があります。
お気を付けください。

11・フリーリア10

「フリーリア様は、王妃になりたくないのですか？　それとも、テオ殿の妻になりたくないのですか？」

呆然とテオを見送って放心した後、ジニムのそんな問いに我に返った。

——ふむ。なかなか難しい質問だ。

「そうねえ・・・どっちもイヤ、ね」

たとえば、テオ以外の男が王位に就いたとして、その男の妻＝王妃に、と言われれば、それは拒否する。

たとえば、フリーリア領に帰って、テオと夫婦になれば、テオの妻として生きろ、と言われれば、それも拒否する。

かといって、一生独身でもいいから王位に就け、と言われるのは断固拒否する。

そう伝えれば、ますます解らない、といったジニムの顔。

「権力に興味は無いの。フリーリア領に帰れば、何の不自由も無いもの。それ以上はいらないわ」

テオとフリーリア領で夫婦として暮らしても、必ず面倒事に巻き込まれる。

過ぎた権力は身を滅ぼす。

何十人、何百人と見てきたそれは、どこの世界も変わらないだろう。

「では、テオ殿がお嫌いなのですか？」

直球で聞いてくるジニム。

「嫌い、ではないわね。

たとえば、テオが『共犯者』としてわたしを望んだのなら、また違ったのかもしれない。

たとえば、テオが『豊穡の守り神』としてわたしを望んだのなら、また違ったのかもしれない。

でも、テオはそうじゃないでしょう？」

そう望むなら、協力してやる用意はあった。

どうせ既に『生き神様』なのだから、そこはいい。

平和な日常を送るためなら、その位は甘んじてやるつもりだった。

——が！！ 予想の遥か斜め上に行く今の現状はいただけない！！

テオは、共犯者でも女神でもない、ただのフリーリアを望んだのだ。

ふつふつと怒りが沸いてくる。

「フリーリア様は、どうなさるおつもりだったんですか？」

解らない、と聞いてくるジニム。

王家に生まれたジニムには、理解できなくて当然かもしれない。

「テオを王位に据えて、わたしはフリーリア領に帰って終わり――の予定だったのよ。」

女神が必要なら、マテオ陛下に忠誠を捧げればいいし、共犯者が必要なら、月に一度程度で陛下の御前に参上すれば事足りるしね。

もともとオーストリッチは神への信仰がそれほど篤くないから、わたしが生き神となっても王家の脅威にはならないだろうし、第一、わたしに自己顕示欲は無いもの」

望んだのは、今までと変わらない平和な日常。

フリーリア領に籠って、平和な日常を送るつもりだった、と言えば、なぜか笑われた。

「テオ殿がお嫌い、というわけではないのですね。嫌いだから妻になりたくないのではなく、王妃という地位に立って、日常が崩れるのがイヤだ、と」

「まあ、ね。ついでに、政治なんて面倒事はゴメンなのよ」

はああ、と溜息をひとつ。

ぬるくなったお茶をのどに流し込めば、おかわりを足される。

「テオ殿は、ただフリーリア様だけを愛しておられます」

意味深に言われ、視線を手元からジニムに移す。

「昨日、あの女を捕らえてテオ殿のところに連れて行けば、テオ殿はキフトたちと話し合いの最中でした。」

フリーリア様のご指示通りにキフトたちから復興資金を巻き上げ

ようとしていたテオ殿は、フリーリア様に認められたかったのだし
よう。かなり頑張っておられました」

クスクスと笑って言うジニム。

ナゼだろう。モノスゴクイタタマレナイ・・・

「王位継承権すら持たないテオ殿を、キフトたちは軽んじていたの
でしょう。話し合いは難航、それどころか、自身の娘たちをテオ殿
の側室に、と言い出す始末」

やはり、あのボンクラ共は自身の娘をテオに宛がおうと考えてい
たらしい。

もっと頑張れよっ 上手くやれよっ と、今更な悪態をついてみ
る。

上手くいけば、その娘たちがテオのお気に入りになれたかもしれ
ないのにつ

そうすれば、私は逃れられたのにつ

「しかし、テオ殿にその気はまったくなく、我慢も限界に達したと
き、私があの子の正体と事の顛末を話したのです。聞き終えたテオ
殿は、躊躇うことなくあの子に剣を突き刺しました」

——ぎゃあああああつ 聞かなきゃ良かった!!

ヤエ様の仕事を私が作ったとか、ヤエ様に知られたら怒られるっ
ニッコリ笑って毒舌なんだ!!

——じゃなくって!!

どーしてそんなことをするんだ!!

そして、どーしてジニムはそんなに嬉しそうなんだ!!

静かにパニック寸前の私を無視して、ジニムは続ける。

「それを目の当たりにしたキフトたちは蒼白。テオ殿は表情無く血濡れの剣をキフトたちに突きつけ・・・」

ごくり、と喉が鳴る。

聞かないほうがよい、とわかってはいるが、怖いもの聞きたさで耳を塞ぐことが出来ない。

「一思いに首を刎ねようとしたましたが、何とか思いとどまられ、かわりに、清々しいまでの笑顔で脅しました」

・・・。。。。。。。

脅迫かよっ

「・・・結果、キフトたちの領地は没収。溜め込んでいた財産も復興支援金と言う名目で取り上げ、一族の者たちからは爵位を取り上げ、平民に落としました」

スルーされた部分が気になるが、聞いてはいけない。

絶対に突っ込んではいけないっ

チラリとジニムを見れば、こちらも清々しいまでの笑顔。

——うん。世の中には、知らないままの方が良いこともある。

「テオ殿の激情も、それを押さえ込んだ理性も、全てはフリーリア様のため。

フリーリア様を愛しているがゆえに激情のまま剣を振るい、フリーリア様に認めていただきたいがゆえに理性でその激情を抑えたのです」

全ての行動はフリーリアのため、と言うジニム。

まあ、わからなくもない、が。

——ここで認めたら王妃ルート一直線なんだ!!

「・・・新たに王位に就く者として、当然の行動だったただけだわ。民のため、国のことを思えば、それが最良なもの」

だから、テオの行動理由を摩り替える。

『王』ならば、当然だ、と。

「それよりもジニム。もろもろの処理はどうなってるの？ 明日のテオの即位の儀の準備は、誰が？」

その話は終わり、とばかりに違う話題をふれば、ジニムも心得たものですぐに返事をする。

「即位の儀の準備は、慣例に則り、宰相閣下が取り仕切っておられ

ます。幸い、神殿も神官も無事なので、こちらの問題はございません。ただ・・・」

「ただ？」

「テオ殿が、侍女に世話をされるのがイヤだ、と」

「・・・は？　なら、侍従にでもやらせればいいでしょう？」

「侍従に、着替えなどの御世話は・・・」

女が嫌なら男にやらせろ、と返したら、何とも言えない表情が返ってきた。

はて。侍女の男版が侍従じゃないのか？

「確かに、侍従は側に仕えて、お茶の用意などはしますが、私室に入って着替えなどのお世話は、侍女の役目ですので・・・」

視線で説明を促せば、そう返ってきた。

なるほど。この世界ではそうなのか。

「じゃあ、侍女に世話をさせるしかないわね。そもそも、何で嫌がつてるの？」

普通、男は女に世話をされるのを喜ぶはずだ。

それも、国王付きの侍女となれば、美しく教養高い若い娘と相場は決まっている。

「もしかして、テオの好みの女じゃなかった、とか？」

それならば納得だ、と言えば、盛大に溜息をつかれた。

「側に侍る女は、フリーリア様だけで良いそうです」

「・・・うーわ・・・　いつきに鳥肌たったわ・・・」

ほらほら、と腕を見せれば、「フリーリア様・・・」と呆れられた。

「んで、何で世話されないと困るの？ 嫌だっと言うなら、ほっときゃいいじゃない」

小さな子じゃあるまいし、着替えぐらい1人でもできるだろ。
実際、今までただの騎士だったテオに、侍女など付いていなかった。

「それはそうですが、即位の儀の衣装は、1人で着れるものではない、と」

なるほど、と思わなくもないが。

「その時ぐらい我慢せろ・・・ それか、その時だけ侍従に手伝ってもらえ」

どんな子供のワガママだ、と呆れる。

「宰相閣下は、フリーリア様にお手伝いいただければ、と言っていましたか？」

「いやよ、メンドクサイ」

スッパリキツパリハッキリ否定。
悩んではいけない。これ、常識。

「パディ、お客様です」

ノックの後にかけられた声。

客がノックをするのではなく、護衛がノックをするということは、それだけ警戒されている相手が来た、もしくは、自身でノックをしなくてもいい立場の人間が来た、ということ。

「どなたか？」

私の代わりにジニムが声をかければ、意外な答えが返ってきた。

「カザム宰相閣下とマクシ神官長です」

タイムリーな相手の来訪に、嫌な予感がひしひしと。

しかし、高位の相手を門前払いするわけにはいかない。

入室を促せば、深々と取られる礼。

逃げられない予感に身震いの一つ。

「先触れも無く突然の訪問、お許しください。この度、マテオ様の御慈悲により宰相となりましたカザムでございます」

「お初にお目にかかります。神官長を務めますマクシと申します」

「フリーリアと申します。わたしのような身分の者に、そのような礼は不要にございます。どうか、おやめいただけますか？」

あくまで平民だと前面に出して、これ以上ドツボに嵌るのを回避する。

——今更だとか言ったのはダレデスカ・・・？

立たせたままでは何なので、テーブルに着席を促す。
ジニムがお茶の用意をする間の沈黙が痛い。

——に、逃げ出したい！！

今なら、間に合う気がする・・・。

目の前に置かれたカップに手を付けない2人。

気づかれないように溜息を吐いてカップに手を付け口に運べば、
2人も揃って手を付ける。

行動で示される地位の差に、頭痛がする。

「御来訪の旨、御伺いいたします」

覚悟を決めて口を開いた。

この行動に、後悔するのは15分後だった・・・・・・。

神殿の控え室。

今日はテオの即位の儀。

国王の正装を目の前に、襖に入ったテオを待つ。

「ありえん・・・」

一人なのをいいことに、うつかり口に出して言ってみる。

カザムとマクシが告げたのは、やはりと言うか何と言うか、テオの世話の依頼だった。

カザムやマクシが何を言っても懇願しても、侍女を寄せ付けないテオ。

正装は1人で着れないと言ったら、ならば着なければいいと言いつ出す始末。

誰なら良いんだとテオに聞けば、テオは事もあるうにフリーリアの名前を出したそうだ。

フリーリア以外の女は側に侍るな、と。

思い出しただけで鳥肌が立つ・・・。

こんな状況だからこそ、即位の儀は慣例に則って行わなければならない。

慶事は、それだけで国土復興に繋がる。

だから何とかしてくれ、と2人は揃って頭を下げにきたのだ。

自身の身分は平民だ、と2人に示した手前、高位の者に頭を下げられれば、断るわけにはいかなかった。

あれよあれよと話が進み、そのまま神殿に連れてこられた。

一通りの儀式の説明と、テオが着る正装を見せられた頃、聖潔に入るためのテオもやってきた。

本来ならば10日間の聖潔の後で即位の儀に望むのだが、今回は1日で済ませるらしい。

なんでも、女神の祝福を受けているため、必要ないんだとか。

女神？と問えば、無言で頭を垂れられたのは忘れたい事実である。

聖潔は神官長のマクシが世話をしていた。

内容までは知らされていないが、知りたいとも思わないので気にしない。

問題は、聖潔から戻ってきたテオの世話をした、ということだ。

聖潔に入る前に顔を合わせたときは何も伝えなかったため、世話役にフリーリアを見たとき、テオは心底驚いていた。

そして、まだそこにマクシが居るにも関わらず、熱い抱擁を受けた。咎めるマクシに、女神からの祝福だとか何とか言ってスルーしたテオを叱って離れ、マクシに今後の予定を確認すれば、早朝の禊までは部屋から出るなど言われた。

嬉々としたテオの顔が忘れられない。

いつもよりも早い時間だったが、翌日の禊も早かったために早々に休ませることにし、寝支度を整えようと動き出せば、なぜか止められ、テオが自ら行った。

寝具の用意から寝巻き、果ては翌日の禊用の衣装まで自分で用意し、そして……

フリーリアの世話までやいた。

———だあああああつつ 思い出しただけでも胸焼けがっ

何だったんだ、あの新婚家庭のような空気はっ

でろっでろに甘いピンクの空気はっ

世話を焼くことが楽しくて仕方が無い、といったテオの様子に、
タマシイヌケカケマシタ・・・

詳細は精神安定上、心の奥底に埋め立ててきましたよ、ええ。

だだっぴろい寝具に、添い寝を強制されたのも一緒に埋めてきましたよ、勿論。

突っ込まないでくれ・・・

そんなこんなでテオを楔へと送り出し、今に至る、と。

いやはや、何かもう、逃げ道どころか、自由すら無くなってきて
るみたいデスワ・・・

11・フリーリア10（後書き）

このままラブ突入?!

12・フリーリア11

目の前に佇むのは、国王の正装を着たテオ。

——着せたのは私だが、ソレを考えてはいけない。

まだ年若い分衣装に着られている感はあるが、よく似合っている。アオザイのような白く薄いベースの上下に、黒地に豪華な刺繍の入った布をアラブ風の腰帯で巻きとめ、鮮やかな紫のローブ上の長衣をまとう。

装飾品はそれほど無いが、茶色の腰帯には金の鎖が巻かれ、宝石をふんだんに使った短剣が飾られている。

「髪、邪魔じゃない？ 王冠かぶるんだし、後ろに撫で付けようか？」

ウルフカットが伸びた感じのテオの髪型。
前髪も長いので、このまま王冠をかぶったら目に入りそうだ。

「ああ、頼む」

大人しく椅子に腰掛け、お願いしてくるテオ。
用意されていた香油と櫛を手でテオの目に立てば——

「なあに、テオ。緊張してるの？」

腰に腕をまわし、胸元に顔を埋めるように抱きついてくる。

———だあああああつ 空気がピンクデス……

昨日からのこの空気に、慣れつつある恐ろしさ。

でも、鳥肌は立ちますよ？ バツチリと！！

「ほら、ちゃんと出来ないから、離れて？」

意外と柔らかい濃い茶色の髪を撫でるようにしてそう促せば、素直に体を離すテオ。

手のひらに香油を取り、髪になじませるように梳いていく。

オールバックに櫛を入れれば、その精悍な顔が顕わになる。

「テオって、整った顔してるわよね」

こうしてまじまじとテオの顔など見たことも無かったが、かなりの美形だと思う。

「惚れる？」

下から見上げる形で軽口をたたくテオは、まだ腕を解かない。

———もう、砂を吐きそうデス……

じっと答えを待つテオに微笑んで、答える代わりにチュツとあら

わになった額にキスをひとつ。

それで満足したのか、腕を解くテオは扱いやすい。

さて、どうしてここまで甘く、お砂糖はいちやう（はあと）な空気を我慢しているかといえ、今後のテオの予定のためである。

これから行われる即位の儀の後、王宮バルコニーにて、即位報告と言う名の民へのお披露目が行われるのだ。

護衛たちは王宮に詰め掛ける民たちへの整理に借り出され、この神殿の警護はほとんど居なくなる。

その隙について逃げるのだ！！

——え？ もちろん、諦めてなんていませんよ？

上手く逃げるためには、テオを撒かなければならない。

だーかーら！！

こんなにピンクで鳥肌で甘ったるくてお砂糖吐いちゃう的な空気も我慢なのだ！！！！

香油と櫛を片付けて手を洗って、時間を確認すれば、まだゆとりがある。

「テオ、お茶淹れようか？」

「冷たいのがいい」

「んー」

冷たい果実水をグラスに注ぎ手渡せば、ナゼかそのまま膝に抱き上げられた・・・

——が、ガマン!!

「・・・テオ、衣装が皺になる・・・」
「気にするな」

ヒクリ、と顔が引きつるのはご愛嬌だ。

涼しい顔でグラスを煽るテオに溜息をひとつ吐いて、チカラを抜いてもたれかかる。

ガマンガマン、と心の中で唱えつつトリハダを誤魔化す。

「フリーリア・・・」

「なあに？」

「ごめん」

「・・・は？」

突然の謝罪にテオを見れば、何やらニガイ顔。

「何か、わたしに謝らなきゃいけないコトやらかしたんだ？」

両手でテオの両頬を挟んで、ぐいっと強制的に目を合わせる。
そこに浮かんでいるのは・・・

——って、目え合わないんだけど!!!

「テオ？」

にっこり笑って名前を呼んでも、泳ぐ視線。
一体、何がゴメンなのか。
何をやらかしたのか。

それとも何かやましいのか。

——これ以上の厄介事はイヤなんですけど——！！

もう一度名前を呼ぼうと口を開きかけた時——

コンコン、とタイミングよくノックの音。

あからさまにホッと息を吐くテオにデコピンして、膝から降りて
扉を開ければ、真っ白な衣装に身を包んだマクシが控えていた。

「マテオ様、お迎えにあがりました」

いつの間にか背後に立っていたテオを振り返り、少し乱れた衣装
を整え、送り出す。

「いってらっしゃい、テオ」

「行ってくる」

するりと頬を撫でられ、額にキスを落とされ、マクシに先導され
ていくテオを見送って扉を閉める。

「うふふふふ」

思わず笑いが漏れるのも、口角が上がるのも仕方が無い。

——いざ、脱出!!

用意してあった、厚手で大きめのストールを手に扉に向かう。

儀式中は神官以外この神殿には立ち入ることが出来ないため、ジニムやフリーリアの警護に当たっている北の兵たちは神殿の外で待機している、と言っていた。

王宮に続く裏口からこそつと抜け出し、そこから城外に出れば、詰め掛ける民に混ざってそう簡単には発見されないだろう。

とりあえず、一番近いフリーリア領に入ってしまったえば、後はどうとでもなる。

ウキウキと弾む心を抑えつつ、いざ行かん!! と扉に手をかければ、そのタイミングで外から開けられた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互い、しばし止まる。

まさか外から開けられるとは思わなかったし、相手も、私が外に出ようとしているとは思わなかったのだろう。

「フリーリア様、どちらへ？」

先に口を開いたのは、白い神官服に身を包んだ女。

その服装から、この神殿の上位女神官であることが知れる。

「王宮に戻るのよ。テオなら、さっきマクシと行ったわよ？」

まさか、ここから脱出するところです、とは言えない。

適当に答えつつ、こちらから話を進める。

——ここで邪魔されてたまるか！！

マクシかテオの用があるのだろう、と思ったのだが・・・

「いえ、ワタクシは、フリーリア様の付き添いに参りました。禊の支度が整ってございます。どうぞ、こちらへ」

丁寧に頭を下げる女神官を、ぽかん、と見つめる。

——今、何て言った？

「みそぎ・・・？」

「さ、御時間がございません。お早く」

状況理解が追いつかず、問いかけることも出来ないでいる間に、強制的に腕を取られて奥へと進んでいく。

いつの間にやら3人の女神官に囲まれて、逃げ出すことが出来ない。

——なんなの、いったい!!

ズルズルと引っ張ってこられた先は、クリスタル製の浴室のようなトコロ。

12畳ぐらいの部屋の正面に、水の溜められた岩風呂のような——クリスタル製だけど——があって、その手前には丸い膝ぐらいの高さの椅子が1つ。更に手前に、腰ぐらいの高さの長方形の台が1つ。その横には、香油であろう小瓶や、よくわからない——いや、わかりたくない——道具が一式のったテーブル。

本能的に危険を悟って逃げ——!!

「失礼いたします」

「ぎゃああっ」

出せなかった。

だって、いきなり服を剥がれたんだ!!

色気の無い悲鳴もなんのその、全裸に剥かれて薄い紗のような布を纏わされて、正面の水の中に強制的に入れられた。

「一番下までゆっくりと降りられ、上がってください」

外からではわからなかったが、中は階段状になっていて、一番下まで降りれば2メートルぐらいの深さ。

身長よりも深い水に、何かこう、滝行に通じるのものがあって、逆らえなかった。

襦は、静かに精神を統一し、厳かに・・・

言われた通りにして上がれば、次は手前の丸椅子に座らされ、あらゆる道具を手にした女神官に囲まれた。

「失礼いたします」

「ぎゃあああああ！！！！」

四方から伸びてくる手に、髪を洗われ体を洗われ足先まで洗われる。

体中余すところ無く触られて、またもや色気の無い悲鳴。

——だからっ 禊は静かに厳かに！！！！

頭の天辺からつま先までペッカペカに磨かれ、さあ、これで終わりだろう！！ と思ったのに甘かった・・・

有無を言わず台の上にうつ伏せに寝かされ、香油を塗り込められ、丹念にマッサージされる。

こんな状況じゃなきゃエステ以上に気持ちいいのに！！

頭上では髪を左右に分けられ、両側から水気を拭かれて香油で手入れされている。

——さて、一体なんでこんな事をされているのかが知りたいのだが・・・。

立後の儀は明日のはずだ。

今日から何かやるとは聞いてない。

だからこそ、今日が最後のチャンスだと逃げ出したかったのに！！

神殿に入るにあたって、聖潔が必要だといわれたが、それは女神だという訳の分からん理由で免除された。

それに、これは『禊』だと言っていた。

儀式で何か役目でもあったか？　とも思ったが、そんなことを言われた記憶も無い。

さて、いよいよ本気でわからん、と思ったところで、体を起こされた。

手を引かれるまま次の間に入り、鏡の前に立たされる。

全裸の姿が鏡に映って恥ずかしい！！

いたたまれずフイっと視線を横に流せば、やたらと豪華な女物の衣装が目飛び込んできた。

それを手に近づいてくる女神官。

たらりと、背中に嫌な汗。

「お着付けいたします」

——やっぱりか——！！

黄無地の裾の長いノースリーブワンピースの上に、色鮮やかな刺繍の入った薄絹を幾重にも重ね、装飾品で飾られる。

もちろん、その間に髪は複雑に結い上げられ、ばっちり化粧も施されたさ！！

仕上げに、と全身を覆うようにレースのベールを被せられた。

——どっからどう見ても、花嫁装束なんだけどっ！！

フイに思い出した、出かけのテオとのやり取り。突然の謝罪。

あの時ちゃんと聞き出しておけば！！

後悔先に立たず。後から悔いるから、後悔なのだ。

イラッとするが、まさかここで地団太は踏めない。

「フリーリア様、御手を」

迎えにきた、高位の女神官の手に手を乗せる。

ペツタンコのサンダルを履いているため、ズルズルと長い衣装でも気にならないが、それでもかというぐらいゆっくり進む。

——テオめ・・・どうしてくれよう・・・

立後の儀は明日だって言ったじゃないか！！

今日は逃げ出す絶好の機会だったのに！！

ふつつと湧く怒り。本気で腹が立つ！！！！

このまま王妃になったら自由が無い！！

——が、今更逃げ出せないのも事実。

目の前には大きな扉。

両側に控える神官によって開けられた先には、神官長マクシと、王冠を戴いたテオの姿。

「フリーリア!!」

駆け寄ってきたテオに力いっぱい抱きしめられ、地から足が浮く。

「テオ、苦しい」

窒息する!! と訴えれば、照れたように笑ったテオが今度は横抱きに抱き上げてきた。

いわゆる、オヒメサマダッコ。

——だあああああっ 恥ずかしいわっ

そのままマクシのもとに運ばれ、やっと下ろされた。

一連のテオの行動に、ただ笑顔のマクシ。

「滞りなく即位の儀終了いたしましたことご報告申し上げますと共に、ただいまより、マテオ陛下と女神フリーリア様の婚儀を始めさせていただきます」

にこにここと告げ、頭を下げるマクシ。

———なんですと？

「こん、ぎ？」

「はい。明日の立後の儀にさきがけ、フリーリア様はマテオ陛下の正式なる妻になっていただくのです」

妻とならなければ、王妃にはなれない、と言うマクシ。

側室も、正式に妻にならなければその地位は与えられないのだと言う。

妻にならずに国王の御手が付いた女は、愛妾、いわゆる愛人だ。

正式な地位もなく、王家の保護も受けられない。

マテオの母が、これにあたる。

——と、言うことは、婚儀しなきゃ王妃にならなくても良かったんじゃないか！……！

テオが知らなかったはずが無い。

わざと、婚儀のことを黙っていたのは明白。

「テオ、どうして教えてくれなかったの？」

「フリーリアに断られると思って……。でも、それも杞憂だったな。ごめん、フリーリア。疑ってた」

両手を取られ、指先に口付けられる。

「余、マテオ・オールド・オーストリッチは、女神フリーリアを唯一の妻とし、愛することを誓う」

昨日から、確かにテオを拒絶しなかった。
ピンクで鳥肌で甘ったるくてお砂糖吐いちゃう的な空気も我慢した。

でも、それは逃げ出すため、決してテオを受け入れたわけでも、立后を承諾したわけでもない。

——なにがどうしてどうなった？！

軽いパニック。

テオの、嬉しそうな顔。

眸にともった、熱。

もしかして、大きく勘違いされた・・・？

気づけば、テオの妻としてバルコニーに立っていた・・・。

12・フリーリア11（後書き）

次話でやっと、08フリーリア7の冒頭に辿り着く・・・
長かった・・・

13・フリーリア12（前書き）

13・フリーリア12

「マテオ陛下、おめでとうございます」

『おめでとうございます』

「フリーリア様、おめでとうございます」

『おめでとうございます』

———おめでたくな———いっ！！！！！

バルコニーで即位の儀、婚儀の終了を民へと知らせる報告お披露目を終わらせ城内に戻れば、広間で臣下一同の祝福の言葉を受けた。なにがおめでたいものか、と悪態を吐きたくなる衝動をぐっと押さえ、腰を抱くテオに身を寄せる。

「ご即位と同時に御婚儀など、誠にめでたきことにございます。大々的に祝宴を、と思っておりますが・・・」

カザムが言えば、他の臣下たちも同意を示し盛り上がる。

城下でも、御祭りムードで祝っているという。

王宮から民たちに、祝いとして食料を配った、と言っていた。

「通常ならばそうだろう。しかし、今の現状を考えればそんなことをしている時間もゆとりも無い。

するべきことは他にあるはずだが？　なあ、フリーリア」

そう、するべきことは他にある。

いくらホージュ国から食料を過分に頂いたといっても、それをたかが祝宴のために使ってはいけない。

まだまだ国内が落ち着かず、復興の見込みも立たない現状で、そんなことは出来ない。

今やるべこことは、他にいくらでもある。

「ええ、テオ。でも、せっかくのカザムの言葉、そんな風に言うてはいけないわ。

ありがとう、カザム。祝ってくれるのは嬉しいのだけれど、今わたしたちが無駄に盛大な祝宴など開いてしまえば、せっかくこうして祝福してくれている民たちの心が、また王族から離れてしまうわ。だから、今は一刻も早く国力を回復させるためにすべきことをしましょう。政など何も知らないテオだもの。時間はいくらあっても足りないわ」

ねえ、テオ？ と見上げてやれば、より一層強く抱き寄せられる。

——ああ、離れたい……

「まったくだ……カザム、言い方が悪かったな。

フリーリアの言うとおり、政など何もわからん、では問題だろう？ 祝宴は、俺が国王として恥ずかしくなくなった時まで取っておいてくれ。

最優先は国力の回復。今後のことを話し合う。大臣たちは議会議室へ。ポトス、大丈夫だとは思いますが、城下の見回りも徹底させろ。ギルセキ、悪いが北兵たちを一時ジニムに預けてくれ」

テキパキと指示を出すテオ。

人を従わせる才能は、天性のもの。

その証拠に、ギルセキと呼ばれた北兵たちのトップが、何の文句も無く従う。

「フリーリアも一緒に議会に出席してくれ。今後の方針を定めたい」
「ええ・・・ カザム、前国王時代の国庫に関する書類を一式揃えておいてくれるかしら？ あと、公金の動きも把握したいから、できれば過去3年分ぐらいの財務的書類も。輸入や輸出の一覧も忘れずにお願ひ」

カザムに必要書類を一式頼む。

国力回復が最優先事項ならば、まずは国庫を満たさなければならぬ。

雁首揃えてからどうしましょう、では時間の無駄だ。

「で、テオ。いつまでもそんな格好じゃ動けないでしょう？ 手伝うから、着替えましょうか。ジニム、悪いけど、テオとわたしの着替えを用意してくれる？」

そして、その資料を集める時間を与えるのも国王の役目だろう。
とりあえず、まだ正装のまま王冠すら取っていないテオを着替えさせることにする。

――あー、侍女とが侍従とか・・・

いつまでも、ジニムを侍女代わりにはできないだろう。
本来ならば、ジニムは侍女を使う側の人間だ。
侍女まがいな事をさせていい身分ではない。

「30分後に議会議室で」

テオの言葉で解散する臣下たち。

今から、各自書類揃えに走るのだろう。

「ねえ、テオ。侍女や侍従はどうなってるの？」

腰から肩に移動させた手に促されるまま、広間を出る。

付き従っているのは、ギルセキただ1人。

本来ならば、侍従の1人も居るはずだ。

「侍女は知らん。何人かは居るみたいだが、把握までしていない。

侍従は2人か？ キフトたちに縁のあるものは全員追い出したから、何人残ったのかは知らん。カザムにでも聞けばわかるだろう。何でだ？」

「何でだ？ じゃないでしょう？ 国王なんだから、侍従の1人ぐらいは常に付けておきなさい。有事のときに困るわよ。侍女も必要でしょう？」

「女はフリーリアだけでいい」

ぶすくれて言うテオ。

——あああつ トリハダガ・・・

「そうじゃなくて。この際、身の回りの世話のことは置いておいて、城内の管理的な意味よ。政をしようにも、人手は必要なの。大臣たちだけじゃあなく、侍女や下仕えの者たちも必要なの。」

前国王が籠城してたんなら、ここには人手なんてなかったでしょう？　今現在、誰がどうやって人事統括して管理維持を回しているか知りたいのよ」

なんでわざわざこんなことまで、と思いながら説明する。

掃除ひとつとっても、何人の人間が必要だと思っているのか。困ったもんだ。

「パディ、必要でしたら、わが国からも女たちを遣しますが？」

ギルセキが言う。

——忘れてた・・・　北の人員的措置・・・

これも、早急に確認しなくてはならない問題だ。

女たちだけではなく、男たちも新たに政治の中核に組み込ませなければならぬ。

舌打ちしたいのをグツとこらえて、ギルセキに対応する。

「ありがとう、ギルセキ。たぶん、早急にお願いしなきゃならぬなと思う。

北の現状も把握したいし、今後、どのように機能させていくかも問題ね。国としてオーストリッチの属国となるのか、自治領区としてオーストリッチに属するのか。ギルセキたちの考えも聞かせて欲しいの。それからじゃないと、前に進めないもの」

これも課題のひとつね、と笑ってやれば、

「北はパディの御心のままに」

と返される。

要するに、フリーリアの指示ならばどうなろうと従う、と言っているのだ。

まあ、やりやすい、と言えなくもないが。

そうこう言っているうちに部屋に着き、扉を開けたギルセキを残し中に入る。

そこには、着替えを用意したジニムが待っていた。

「ありがとう、ジニム。悪いけど、フリーリア領に使者を1人出してくれる？ 現在のアイサヴィー発掘状況及び、採掘量、領内の人数及び整備状況、あと、正しい領域を説明できる者か、報告書をもらってきて欲しいの。一応、リグuppには全て書類として書き残すように指示してあるから、問題はないと思うけど・・・」

リグuppは、フリーリア領の役人だ。

フリーリアに代わって、実務的なことをしてくれていた。

国庫の要となるのは、やはりアイサヴィーだ。

その最新の情報が欲しい、と言えば、ジニムはすぐに手配に動く。

「フリーリアは、政治能力まであるんだな」

2人きりになった部屋の中。テオがポツリと漏らす。

「・・・領主なんてやってたもの。基本は同じでしょう？」

まさか、王族経験者です、なんていえない。
ちなみに、独裁者の経験もあったりする。

適当に誤魔化しつつ、テオの着替えを手伝う。

「そういえば、立後の儀はテオみたいに神殿に行くの？」

もしそうなら、隙を突いて城外に出ることも可能だ。

今日はテオのせいで失敗したが、なんとか立後の儀が終わる前には脱走したい。

——え？ まだまだ諦めてなんかいませんよ、もちろん。

テオに騙されるように婚儀を挙げ、テオの妻にはなったが、まだ王妃ではない。

立后さえしなければ、公的地位など無いに等しい。

——ダレデスカ？ 往生際が悪いとか言ったの。

王妃になどなるつもりはないのだから、最後まで諦めない。

——が！！ どこまでも私の自由を奪うつもりらしい。

「立後の儀はそんな大したモンじゃない。ただ、妻に公的地位を与

えるだけだからな。

バルコニーで国王から王妃の証である王冠を戴くだけでいい。民の前で、立後の証を立てるんだ」

絶句。

そんなに簡単なのか?! 立後の儀なんて言うから、もっとこう・
・! ! ! ! !

これで、完全に脱走する機会を失ったとか・・・

——ありえない!!!!

「フリーリア、着替えないのか？」

半ば放心していた私に声をかけるテオ。

ある程度脱がすのを手伝えば、あとは勝手に着替えていった。
手のかからない男だ。

「着替えるけど、テオの目の前で脱ぐわけにはいかないでしょう？」

言いながら、自分の着替えを手につき部屋に入ろうとすれば・・・

「気にすること無いだろう？ 手伝ってやる」

言いながら、サッと着替えを持っていかれる。

そして、まだ被ったままのベールを取り払われた。

「フリーリア・・・」

正面から見据えられて、名前を呼ばれる。

熱の籠った声に視線を合わせれば、その眸に灯る、確かな劣情。

——い——や——！！！！

逃げを打つ間もなく頤を固定され、口付けをされる。

軽く触れ合うような、可愛らしいものではない。

かぶりつくような、激しいソレ。

——そしてなぜ脱がす！！！！

啞内を蹂躪しながら幾重にも重ねられた布を器用に剥いでいくテオ。

角度を変えてはより深く啞内をまさぐられ、気づけばワンピース姿になっていた。

さすがに、これ以上は勘弁して欲しい。

確かな意図を持って動くテオの手に、ここで止めなきゃ止まらないだろうなあ、と考えながら啞内でうごめくテオの舌を軽く噛む。

ぴくり、と反応してゆっくりと離れていくテオの唇。

「これ以上はダメ。するべきことが、あるでしょう？」

言い含めるように冷静に告げれば、劣情の落ち着いていく眸。
しかし、完全には消えない熱。

「ああ・・・でも、もう少しだけ・・・」

言いながら、今度は慈しむように口付けを交わした。

一通りの話し合いも済み、当座の方向性が決まったのは、既に夜になってからだった。

そう、夜である。

夕飯も済ませ、御風呂も済ませ、あとは寝るだけ、である。

うん、寝るだけ、なのだ。

「どうしてテオと一緒にベッドなの・・・？　ってか、何で同室なのよ！！！！」

目の前には、夜着姿のテオ。

そう、こちらで、と通された部屋には、テオが居たのだ。

後宮は爆破されて使い物にならなくなったため、表城の多数ある客室の一つを私室として使っていた。

貴賓室と呼ばれる、他国の貴族をもてなす為の部屋をテオ共々与えられていたのだが。

今居るのは、その貴賓室の中で一番大きい部屋。

本来は、他国に嫁いだ王女が、夫とともに来訪した折に使われる部屋らしい。

よって、寝室には大きなベッドが1つだけ。
そこに腰掛け、正面のテオを見上げる。

「仕方ないだろう？ 後宮は使い物にならないんだ」

まだ濡れた髪を拭きながら言うテオ。

「そうじゃなくて！！ どうして今更同室なのかって聞いているの。
今までの部屋でいいでしょう？」

同じベッドなど冗談じゃない。

そんな悪夢は1回だけで十分だ。

懷に抱き込まれ、愛しげに髪を梳かれ、耳元で囁かれるあのピン
クの世界。

——背筋に悪寒とトリハダが！！

心の奥底に埋め立てた悪夢がうっかり顔を出しかけて、慌てても
う一度封印する。

あんなのはもうイヤなんだ！！

「何言ってるんだ、フリーリア。妻が夫と同衾するのは当たり前だろ
う？」

どうして夫婦になったのに離れて寝るんだ、と言われ、はたと思
い出す。

そうでした、ナゼか夫婦になってました・・・

黙った私を満足そうに見て、ベッドに腰をおろすテオ。
びくう、と体が跳ねる。

恐る恐る顔を上げれば、じっと見つめられていた。

髪を拭いていた布を放り、視線を逸らさぬまま一気に抱き込まれる。

「テオ・・・！！」

ぎゅっと抱きしめられ、息もままならない。

「フリーリア・・・」

熱っぽく耳元で名前を呼ばれる。

はむ、と耳を食まれる。

ぺろりと舐められ、ぞくりと背筋に電流が走る。

「ひゃあっ」

思わず口から漏れた声。

———この身体感度良すぎる！！！！
フリーリア

ゾクゾクと上がってくる快感。

嬌声とも取れる声に気を良くしたテオの唇が、耳から首へと降りてくる。

「やあ・・・」

濡れた感触に、感度も上がる。
所々強く吸われ、キスマークを付けられる。

——ヤバイ——っ!!

と思ったが、時既に遅し。
ベッド中央に運ばれ押し倒され、エスカレートする愛撫を受ける。
腰紐を外され、肌を露出させられる。

「ふう・・・んっ・・・」

施される愛撫に、濡れた声が我慢できない。

「愛してる・・・」

そういえば初夜なんだよなあ、とか今更なことを考えつつ、この
行為を受け入れたのだった。

13・フリーリア12（後書き）

こ、これぐらいなら表・・・ですよね？

14・フリーリア13（前書き）

長さが中途半端で・・・。
途中で切れなかったので、少々長いです。

14・フリーリア13

さて、そして本日、立後の儀当日。

予定通り早朝に到着されたニトジム陛下をテオとともに出迎え、食料のお礼を申し上げた。

パエラに対する親愛の証だと笑ってくださったニトジム陛下と側近のデシエ、そしてジニムとポトスと一緒に、立後の儀を行うバルコニーの控えの間に入った。

身支度はすでに整えていたため今更バタバタすることもなく、5人でゆっくり朝食を摂る。

王族の正装である衣裳のニトジム陛下と、高位貴族の正装であるデシエ。ジニムも、今日はホージュ国の王女の正装である。

ポトスはいつもの騎士服。まあ、警護にあたるので当然であろう。

チラリ、とテオを見る。

テオの衣裳は、王族の正装でも、国王の正装でもない。ただ王冠を妻に与えるだけの立後の儀に、正装の必要はないのだろう、と深く考えていなかったが……。

——深く考えなかった自分が憎い!!!!

「ねえ、テオ。どうして騎士服なの？」

そう、テオが身に纏っているのは、騎士の正装。国王となったテオが着る衣裳ではない。

「ああ、一騎士として、女神に忠誠を誓おうと思って」
「……………は？」

「国王としてフリーリアを妻に迎えたから、今度は一騎士として女神に忠誠を誓おうと思うんだ。王妃は女神であることを民に知らせる」

さも当然のように言ってきたテオに、何かがキレた。

「どこの世界に妻に忠誠誓う夫が居るんだー！！！！！」

ニトジム陛下がいらっしゃろうが、ここが穏やかな朝食の場だろうが関係ない。

このバカ（と書いてテオと読む！）を叱りつける。

「テオはいくら王位継承権を持っていなくても前王の子供なのよ？！
れっきとした王族なの！！それが、たかが平民の女を妻にするだけじゃ飽き足らず王妃にまで据えて、そのうえ忠誠まで誓ってどーすんのっ！！！！！」

何が騎士として、だ！！

テオはもうこの国の国王なのだ。

国王が他の人間に忠誠誓ってどーすんだ、このバカ！！！！

「フリーリアは女神なんだ。ただの人間である国王^{オレ}が、妻に迎え王妃となってくれた女神^{フリーリア}に忠誠を誓って何が悪い？」

「だから、わたしはただの平民だ！！！！！」

話がかみ合わない、どころか次元すら違う気さえしてくる。

まあ、実際違うのだが……。

「国王が忠誠を誓うってことが、どういふことかちゃんと理解してるっ?！」

「ああ。俺は、フリーリアを裏切らない」

激昂するフリーリアに、真摯に告げるテオ。
ブツチンツと、再び何かがキレた。

「そーゆー問題じゃないーっ！っ！っ！っ！っ！」

――そして、今。

王宮につめかける人々。

時が来るのを今か今かと待ちわびている民の声を聞きながら、私はテオの正面のソファ―に座らせられ、プイツと横を向いている。
ちなみに、右隣にはニトジム陛下が腰掛け、私は左を向いている。
外の賑わいとは裏腹に、一触即発の雰囲気とその場を支配していた。

「フリーリア、いい加減諦めろって・・・」

何度目かわからないテオの言葉に、それでも無視を決め込む。
テオに・・・いや、国王に忠誠なんぞ誓われては、フリーリアは

生き神どころか完全な“神”になってしまう。

豊穡の女神、ならばまだ良い。所詮は国の繁栄のための象徴にすぎないので、ただそこに存在していれば良いのだから。

しかし、象徴から神になってしまえばそうはいかない。

国王よりも上の立場に立つことになり、国王が忠誠を誓うことによって絶対権力を有することになる。地位は王妃でも、その実は最高権力者となるのだ。

それも、神という位置づけ。何人も従うことしか許されない存在に。

昨夜、テオに抱かれたことで妻になることは同意した。

ここまできて逃げることは不可能だったし、ある目論見もあった。

立后してしまえば、ある程度の自由は手に入る。

まだまだ復興に尽力しなければならないから、国王であるテオはしばらく王城から出ることは出来ない。

国庫の要であるアイサヴィー鉱山は、フリーリアの私領ということで話はまとまっている。

ならば、立后した後で王妃として公式にフリーリア領を訪れればいい、と気づいたのだ。そして、何だかんだと理由をつけて王城に帰らなければいいのだ。幸い、国家庇護の産業地、という訪れる大義名分もある。

王妃不在が長引けば、嬉々として自身の娘たちを差し出すのが貴族というものだし、側室の一人ぐらい送り込んでくるだろう・・・とそこまで見通していた。

妻が不在の方が夫も他の女に手を出しやすい。テオも健全な男。一度でも女を抱いてしまえば、その欲求を我慢できなくなる。

その頃合いに女を差し出せば・・・と考えていたのに！！

このままでは立場は逆転。
自由など無くなってしまわないか！！！！

——断 固 拒 否 ——！！

「カザムとマクシもそれが良い、と言っている。今更、誰もフリーリアに文句は言わない」

何とか説得しようと説明するテオから出された名前に、ピクリと反応する。

「宰相と神官長が・・・？」

「ああ。昨日の民たちの反応を見て決めたらしい。国王の名よりもフリーリアの名を呼ぶ声の方が多かっただろう？　すでにフリーリアは民にとっては神なんだ」

「豊穰の女神パエラは、全ての人の母であらせられますから」

テオの説明に、ニトジム陛下の声がかかる。

ホージュ国では、当たり前前の一種の宗教論だ。

「ニトジム陛下のおっしゃる通り、豊穰の女神は全ての母だ。そして、フリーリアは豊穰の女神だ。

国王はただの人であるから、女神に忠誠を誓って、民と同じように神が地上に降りたもうた奇跡に感謝しよう、と」

そうすれば、このオーストリッチは女神を戴く国として益々栄えるだろう、と言うテオ。

思い返すのは、昨日のバルコニーでのお披露目。

あまりのショックであまりハッキリとは覚えていないが、確かに民はフリーリアの名を呼び、女神と称えていたような・・・？

そして、それを見ていたカザムとマクシがテオに余計な入れ知恵をした、と・・・？

「もともと俺はフリーリア以外の女はいらないし、フリーリアを裏切る事もない」

だから、何の問題もないだろう？ とテオは言うが・・・

——大ありだ！！

ただのテオのワガママだと思っていたのに！！

まさか、宰相であるカザムと神官長であるマクシの差し金だったなんて！！

この2人が絡んでいるなら、もはやコレを諫める存在は皆無ということ。

2人に対して沸々と怒りが沸く。

一度王家に対して不信感を持った民たちの心をもう一度王家に向けるのは難しい。

では、どうやって王家の威信を回復させるか。

それには、王家と民との間に、同じ方向を向かせるための緩衝剤を挟めばいい。

共通の敵でもいいし、味方でもいい。

一番良いのが、同じく縋るもの。

王族を、民と同じ目線に落とすもの。『神』という存在。

それはわかる。理解もできる。道理だとも思う。

——でも、それに自分が使われるのが気に入らない!!!!!!

カザムやマクシにしてみれば、丁度手近にフリーリアがいた、ぐ
らいの感覚だろう。

幸か不幸かテオはフリーリア以外はいらない、と言っていた。
どうせなら、付加価値を付けてやれ、ぐらいの物だろう。
決して邪魔になるモノでもない。

「テオの妻にはなったわ。王妃にも、なろうかと思っていた。でも、
国王の忠誠なんていらない。ただ、テオの妻としての王妃にならな
ってあげる」

にっこり笑って伝えれば、思案顔のテオ。

王妃にならない、とは言っていない。

テオにしてみれば、フリーリアが隣に居ればいいのだろう。

テオの心を利用するようなセコイ言い方だが、背に腹は変えられ
ない。

——私の自由と平和な日常!!!!

「パエラ、いいではありませんか。

確かに、御国の復興には女神の存在は必要不可欠でしょう。パエ
ラは豊穡の女神ですから、まさに適神」

「そうです、フリーリア様。国王が忠誠を誓った王妃が女神ならば、
民たちにとってこれほど心強いものはございません。繁栄を約束さ

れたも同然です。復興意欲も湧きましよう」

あと一押し！！　　というところで入るニトジム陛下とジニムの声。

――邪魔しないでえっ！！！！

「パエラがお気になさっているのが身分ならば、我がホージュの女神パエラとしての身分をご用意いたしましょう」

ニコニコ笑ってそう言うニトジム陛下のお言葉に、呆然とするしかない。

南の大国ホージュは、豊穡の女神パエラを唯一神として掲げている。そんな身分などいただいては、ただでさえ無くなりつつある自由が完全に無くなる。

下手をすれば、神殿に籠る事態にもなり兼ねない。

――それは嫌すぎる！！！！

ゴネればゴネるほどドツボに嵌っていくのはいただけない。

――そろそろ引き際、か・・・？

色々疲れたし、どうやてもここからは逃げられないようだし、腹決めてテオの忠誠受け入れて、オーストリッチの頂点に君臨してみ

るか・・・？

フリーリアの寿命があとどれくらい残っているのかわからないが、このまま逃げられないのなら、最高権力を手中に収めるのも良いのかもしれない。

一瞬の間に色々考え、ニトジム陛下に向き直る。

「ありがとうございます、ニトジム陛下。こうしてわざわざ足をお運び頂いただけでも身に余る光栄ですのに、それ以上を頂くなど恐れ多いことでございます。そのお気持ちだけで至上の喜びです」

にっこり笑えば、ニトジム陛下も笑顔を返してくれる。

必要以上の言葉の、裏の意味を正しく理解してくださったのだから。

ふふふ、と笑い合ってテオを見る。

理解が追い付かなかったのであろうテオの、その表情に不覚にもトキメイタ。

——やっばいなあ・・・

一度受け入れてしまえば、後は流される。その流れに逆らうことは不可能。受け入れたなら、後は落ちるだけだ。

好きに生きれば良いと言われている借り物の人生。

何だかんだと、歩むべき道は既に決まっているんだと思う。

選択する道はいくつかあるが、たぶんゴールは1つなのだろう。

そのゴールに辿り着くまでの過程を私は選べるにすぎないのだ。

——まあ、その過程が大切だと、足掻いていたわけだが。

「誓わせてあげるわ」

テオの目を見据えて、ニヤリと笑う。

「テオの忠誠、わたしが貰ってあげる」

高飛車に言い放つ。

テオの顔が喜色に満ちていく。
登りつめてやろうじゃないか。

「マテオ様、そろそろ刻限です」

いつの間にか静まっているバルコニーの外。
漏れ聞こえるのは、神官長マクシの祝福の言葉。

「おでましのご用意を」

ポトスの声に、テオが目の前に左手を差し出す。
口元だけで笑って、右手を乗せた。
強く引き上げられ、そのまま腕に抱かれた。

「フリーリアにのみ、この身を捧げよう」

耳元に囁かれる、誓約。
チカイノコトバ

「その身体ごと、テオの忠誠貫ってアゲル」

あくまでも高飛車に言い放つ。

パタン、と開かれるバルコニーへ続くトビラ。

「おでましを」

響き渡る、マクシの声。

テオにエスコートされ、バルコニーに向かう。
後ろに続く、ニトジム陛下とジニム。

サンサンと降り注ぐ太陽の光のもと、1歩バルコニーに出れば、
割れんばかりの大歓声！！

マクシから王冠を受け取ったテオが、正面からフリーリアの頭上に王妃の王冠を乗せる。

本来ならば、国王の前に跪いて戴く王妃の王冠。しかし、女神であるフリーリアはたとえ相手が国王であっても膝を折る必要はない。
その証拠に、膝を折ったのは国王であるテオ。

取られた手の甲と指先に受ける、忠誠の口づけ。そして、捧げられるテオの剣。

その剣を両手で受け取り、一度高く掲げ、そして落とす、祝福の口づけ。

剣の柄の部分に1つと、鞘の上に1つ。

国王が騎士として捧げた忠誠を、王妃が女神として受け入れた。

緊張した面持ちで見守っていた民たちも、1人、また1人と膝を

折り跪く。

「我、フリーリア・ルースト・オーストリッチは、皆の忠誠を受け、この国の繁栄を約束しよう」

バルコニーから民に向けて宣言すれば、

「王妃フリーリアに忠誠を！！」

声高に言うテオ。

『忠誠を！！！！』

大地が揺れるほどの民たちの歓声を受け、立後の儀は終了した。

オカルトっぽいなあ、インチキ宗教っぽいなあ、なんて思ったことは内緒だ。

何はともあれ、こうしてフリーリアはオーストリッチ国王、マテオ・オールド・オーストリッチの妻、王妃となった。

14・フリーリア13（後書き）

次話でフリーリア編終了。

あと一話お付き合いください。

15・フリーリア14（前書き）

長くなってしまった・・・。

15・フリーリア14

旧フリーリア領。

今は国家支援を受け、オーストリッチの主産業として確立された
アイサヴィー鉱山。

王妃の私領ということもあり、旧フリーリア領は1つの都市として
発展していた。

王妃の名をそのまま領地の名に使用することはできず、今では“
レディアンナ女神の地”と呼ばれている。

「ええいっ　テオは早く王城に戻りなさい!!」

以前は砦として使用されていた塔の1室。

以前フリーリアがこの地で暮らしていた頃に与えられていたこの
部屋は、今では執務室になっている。

そこで、仕事をしているのだが・・・。

「フリーリアと一緒になら今すぐにでも戻ってやる」

偉そうにソファに踏ん反りがえるテオに何度目かわからない声を
かければ、こちらも何度目かわからない返事が返ってきた。

テオが王位に就いて10年。

初めの1年は、国内の復興と平定に奔走した。

自治領区となってオーストリッチに吸収された北、旧ゴーバ国の
人員の措置には特に気を遣い、今では要職の半数近くがゴーバ出身

者だ。

次の1年は国交に力を入れた。

国庫を潤すには国交を確立させなければならない。

これには、南の大国ホージュ国王ニトジム陛下がご助力くださった。

今では、海の方この国との繋がりもでき、国交に何の憂いもない。

3年目には、荒野の国と言われていたオーストリッチも、大国と呼ばれるほどに繁栄した。

——そして・・・

「父上、早く戻らねば、またカザムのお小言をもらいますよ」

「うるさい。ならばゼノが先に戻って仕事しろ」

机の上に積まれた書類をトントン、と揃えながら言うのは、テオとよく似た顔立ちの男の子。

7歳になる、ゼノカ・オールド・オーストリッチ。

フリーリアとテオの子で、第一王子である。

「残念ながらお父様。お兄様はわたくしとここでお母様のお手伝い中です。王城へはまだ戻ることでできませんわ。お父様だけお戻りになったらいかがですか」

「フィア・・・」

フリーリアの横で、押印の手伝いをしながら言うのは、ゼノカよりは優しい顔立ちの女の子。

第一王女のフィーカ・オールド・オーストリッチである。

ゼノカとフィーカは双子だ。

便宜上フィーカを妹としているが、ゼノカよりも性格がキツイため、フィーカの方がしつかりして見える。

猫可愛がりしている愛娘の辛辣な一言に、さすがのテオも項垂れる。

定期的に訪れるパレディアンナ。

王都から1日もかからない距離でも子供たちにとっては小旅行で、小さなころから必ず付いてくる。

初めの頃は中庭で駆け回っていた子供たちも、5歳の頃からはこうして仕事を手伝うようになった。

左右に腰かけ一生懸命手伝ってくれる子供は可愛いのだが、可愛くないオマケが1人、こちらにも必ず付いてくる・・・。

「テオ、ゼノもフィアも言っているでしょう？ 早く王城に戻って仕事しなさい。国王不在なんて、良いことじゃないわ」

いくら国内が落ち着いているといっても、国王は暇ではないのだ。毎日政務は嫌と言うほどある。

そのほとんどが宰相はじめ臣下たちの手によって処理されているといっても、最終認可は国王であるテオがしなければならぬ。

決して、ここでこうしてウダウダしている時間は無いはずだが・・・。

「ゼノとフィアだけフリーリアと一緒になんてズルイじゃないか・・・」

オマエは子供か！！ と怒鳴りつけたくなるのをグッと堪え・・・

・「父上（お父様）は子供ですか?!」たにもかかわらず、何の躊躇いもなく声を揃えて言ってくれる我が子たち。

思考がフリーリアに似ている、とジニムに笑われるのはこういったところだろう。

「ここはフリーリアとの思い出の地だ。ここでもう一人作るまで帰れるかっ」

この10年で、分かったことがある。

「父上。父上が母上の事をこの上なく愛しておられるのは十分存じておりますが、子供の前で・・・というか、子供に宣言するのはやめてください」

「お兄様、無駄ですわ。お父様の、お母様溺愛病は年々悪化の一途を辿っております」

「うるさーい。お前たちも弟と妹欲しいだろう?」

「やめて、テオっ!!」

そう、テオが物凄く恥ずかしいヤツだというコトだ・・・。

「フリーリア、もう2人ぐらい子供欲しいだろう? ゼノとフィアの弟と妹、産もう」

いくら、この部屋に家族4人しか居ないといっても、我が子の前でする話ではない。

――が、子供たちも慣れたもの。

「あら、お父様はわたくしただけではご不満ですか?」

「母上が身籠られれば、お2人の時間がもっと減ってしまいますよ?」

ツンツと可愛らしく拗ねてみせるフィーカと、ニヤリと笑うゼノカ。

親子の会話としてどうかと思わなくもないが、これもいつものことだ。

こっちに飛び火さえしなければ良いと、手元の書類を裁いていく。

「フリーリアー。子供たちがイジメル」

「ちょっ　テオ！！」

がばあつと後ろから抱き着かれ、サインしていた手元が狂う。

いつの間に移動したんだ……。

「ゼノ、フィア、ほどほどにね。こう邪魔されては、いつまでたつても終わらないわ」

ぎゅうぎゅう抱きしめてくるテオの頭を撫でながら我が子に言え
ば、

「申し訳ありません、母上」

「ごめんなさい、お母様」

と素直な謝罪。

テオがボソリと、鼻唄だ……などと言っていたが、こっちは無
視を決め込む。

“女神”が子供を産むことは、臣下たちの間で賛否が分かれた。

“女神”が子を産めば、ただの“人”になってしまうのではない
か。

“女神”が産んだ子供は、“神”なのか“人”なのか、と。

テオに側室を迎えさせ、その側室に子供を産ませればよいと、女神は女神のままで、との声が上がっていた。

しかし、テオが認めなかった。

側室は1人も迎えぬと宣言し、王家の血に女神の血が入ることに何の問題があるのか、と臣下たちに詰め寄った。

誰1人としてそれに異を唱えることが出来ず、結果、こうしてフリーリアがテオの子供を産んだ。

生まれた子供は双子。それも、男女の双子。

この世界では、男女の双子は双神の生まれ変わりとして喜ばれる。“女神”の子供はやはり“神”だったと、国中をあげて祝福された。

ゼノカとフィーカには、フリーリアのような特別な能力はなかったが、その代わりなのか、2人とも飛び抜けて頭が良かった。王族として求められるモノをこの年にしてほぼ完璧に習得している。

そして、身体機能にも恵まれている。騎士であるテオの遺伝子か、ゼノカもフィーカも剣の腕に優れている。腕力の差から扱う剣の種類は違うが、2人ともとても強い。

同年の子供たちとは比べ物にならない才能で、これだけで“神の子”として周囲にいわしめている。

実際、ほんの少しの努力で最高の結果を叩き出す2人は、まさに神の子だといえる。

そんな可愛い我が子2人と、誓約通りフリーリアのみ愛するテオに囲まれた生活は幸せなのだろう。

一国の王妃として、豊穡の女神として過ごしていく日々。

何不自由の無い生活。

当初求めた、穏やかで平和な日常。

自由は制約されているが、ほぼ希望通りの生活が送れてる。

「ゼノ、フィア。第三鉱山まで、馬で散歩に行きましようか」

一通り書類整理を終え、一息つくために子供たちを誘う。

今日は朝らずっとこの執務室に籠っていたため、子供たちも退屈だっただろう。

「「フリーリア（お母様）（母上）は乗っちゃダメだ（です）」
！！」

綺麗な三重奏。

この過保護ぶりは間違いなくテオの教育の賜物だろう。

母親に対する反応としてはどうかと思うが、これも今更だ。

テオはもちろんゼノカとフィーカも、その運動神経で難なく馬を乗りこなす。

フリーリアも練習しようとしたのだが、テオと子供たちにやめてくれと懇願されたため、未だに1人で馬には乗れない。馬の背にまたがることは出来るのだが、走らせ方がわからないのだ。

私は多分乗れるだろうが、フリーリアに経験がないため、下手に挑戦することは出来ない。

「テオ、乗せてって」

にっこり笑顔でお願いすれば、

「お母様、わたくしとご一緒しませんか？」

「母上、わたしがお乗せいたしますよ」

子供たちから可愛いお誘い。

「ダメだっ フリーリアは俺と同乗!!」

真剣に子供と張り合う父親^{テオ}。

なんだかなあ、と笑ってしまう。

「ありがとう、ゼノ、ファイア。今日はテオにお願いするわ。今度、一緒に遠乗りに入れて行ってね」

「「はい!!」」

ぎゅうぎゅうと両側からくつついてくるゼノカとフィーカの頭を撫でて、

「じゃあ、ジニムに散歩に行くと知らせて、ポトスとギルセキに馬の用意を頼んできてくれる？」

おつかいをお願いする。

フリーリアには素直な子供たちは、すぐに部屋を出て行く。

「ゼノもファイアも、フリーリアが好きだな」

「そう育てたのは、テオでしょう？」

何を今更、とテオに言う。

フリーリアを大切に、フリーリアを悲しませるな、と子供たちを

教育したのはテオだ。

テオ自身、母親を知らないまま育った。

先王は数多くの側室を迎えていたが、それでは飽き足らず下女にも手を出すほどの好色だった。

テオの母親は身分が低く、側室にさえなれない身であったと聞いている。

王城で母親を知らないまま育ったテオ。

だからなのか、テオは頑なに側室を拒む。

そして、子供たちには母親を大切にしろと教えた。

「素直な子たちだもの。テオの教えをちゃんと守っているのよ」

「俺も大切にしろ、と教えるべきだったか・・・」

真剣に言うテオに笑った。

子供たちは、決してテオを大切にしていないわけではないし、敬っていないわけでもない。

国王としてのテオを尊敬しているし、父親としてのテオが大好きだ。

誰に似たのか、愛情表現が捻くれているだけで・・・。

「おかあさまぁー!!」

「ははうええー!!」

外から聞こえる子供たちの声。

窓から見下ろせば、手綱を片手に大きく手を振っている。

「用意ができたみたいね。行きましょう?」

手を振り返すことで子供たちに答え、テオと一緒に外に向かった。

「お母様っ！！！！」

「母上っ！！」

「フリーリア！！！！！！！」

第三鉾山の裏手。野イチゴが群生する懐かしい空間。地形が変わっていたそこに、気付かなかった。

鉾山付近の地形の陥没など、特に珍しい事ではない。

そして、そうした場所に発生する自然の驚異も、珍しい事ではないのだ。

子供たちと野イチゴを摘み、帰ったらパイを焼こうと話していた矢先の出来事。

対処するのが遅れたのは、やはりこれが決められたフリーリアの寿命だからだろう。

「だいじょうぶ、早く、ここから・・・」

「しゃべるな！！ ジニム！！ 早く子供たちを！！！」

テオの指示で、ジニムが子供たちを連れて行く。

子供たちが無事でよかったと、心の底から安心した。

「パディ、失礼しますっ」

ギルセキが、右足の膝をキック縛る。
少しでも毒の回りを遅らせるためだ。

地形が変わった鉦山の裏手。

地熱のあるそこに、異常発生した毒蟲。

サソリのようなそれに、右足首を噛まれた。

「テオ・・・ ごめん、気付かな、くて」

フリーリアなら“視えた”ハズだった。

もう少し周辺を注意していたら、視えたはずだった。
しかし、それを怠って・・・

「パディ、すぐに手当てを」

ギルセキが馬へとテオを促すが、それにゆるく首を振る。

フリーリアは、助からない。これは、断言できる。

さっきから、黒い影が視界の端にチラついている。

「こども、たちに、ごめんね、って。いいこで、いてね、って」

まだ幼い子供たちの事が気にかかるが、テオもいるし、ジニムもいる。

年齢以上にしっかりした自慢の子供たちだ。大丈夫だろう。

だんだんと無くなっていく体の感覚。

しかし、これだけは伝えなくてはならない。

「女神は、神殿に籠り、国の繁栄を祈っている、と。葬儀は出さない、で。この地で、燃やして」

国の要であるこの地で女神が死んだとなれば、今後に影響が出る。せつかく繁栄しているこの国に影を落とすことは出来ない。

「……わかった……」

苦渋の決断であろうテオの返事に、頷く。

ふう、と息をつき、視線を上げれば、ニヤリと笑った真っ黒な影が、手にしていた大きなカマを振り下ろし、一気にフリーリアの肉体から追い出された！！

見上げた先には、見間違うはずもない主の姿。

私がお仕えする、死神様。

「ご苦労だったな、雑用。ちゃんと王妃になったじゃないか」

愛らしい童女の姿で乱雑な口調のヤエ様。

相変わらずの死神様に、もはや突っ込む気も無い。

「王妃になるしか道は無かったように思いますので。まさか、子供まで産むとは思っていませんでしたが……」

そう、子を産まず、生涯女神で在り続けるのが『フリーリア』の一生だと思っていた。

フリーリアのゴールは、豊穡の女神、だと思っていた。

ある宗教的思想では、人間の一生の出来事は魂の段階で決められているという。

悩み、苦しみ、最善を選んだつもりでも、それは決められた道を

歩いているにすぎないというのだ。

何百回と経験した『仮初の人生』。

死神であるヤエ様が“うっかり”“間違っ”て殺してしまった人間の、本来であれば残っていたはずの寿命をまっとうするこの役目。他人の肉体に入り、いつ終わるかわからない生涯を仮初に送る中で、この思想はあながち間違っ”てはいないのではないかと思えてくる。

その人間の一生は、既に決められているのだろう。

その寿命の中で、歩むべき道は1本なのだと思う。

選んでいるつもりでも、足掻いているつもりでも、それは定められた人生なのだ。

——定められていても、その時最善と思う選択をし、時には足掻く事が大切なのだが……。

「好きに生きた結果だろう？　今回はこれで終わりだが、すぐ次に行ってもらおうぞ」

「今からですか?!」

たった今『フリーリア』を終えたばかりで!!

自分の肉体にすら戻ってなくて!!

この前だって自分の体はほんの数時間だったのに!!

などと一気に文句を言ったところで、聞いてくださるヤエ様じゃない。

そんなことは、この十数年でわかりきっている。

そして、私の不満を聞き届けてくれるヤエ様じゃないこともわかりきっている……。

「じゃあな、雑用。がんばれよ」

マイペースに事を進めるヤエ様に、ぐにやりと歪む空間の中、ポイツと捨てられた。

こうして、フリーリアの一生を終えた私は、次の『仮初の人生』に飛ばされた。

15・フリーリア14（後書き）

これにてフリーリア編終了。

お付き合いありがとうございました。

次話新章。

16・華月1（前書き）

新章、華月編開始です。
お付き合ってください。

16・華月1

ドシンツという衝撃で、目的の肉体に着いたのだと知った。
でも、すぐに目を開けたらパニックになるのはこの十数年で学習済み。

——さて、今回はどんな人生になることやら。

この肉体の情報を確認する。

華月^{かげつ}、23歳、女。

お。割と年が近い。5歳の女の子だった時もあったからなあ。これは嬉しい。

この国は、光明の国というらしい。

王族は存在せず、国家元首が政治の頂点に立ち、議員達20人で国を動かしている。

議員になるのは特別な試験に合格した者達で、任期は10年。その間にも次々と次期議員候補が育っていくというシステムらしい。

国全体の貧富の差は大きくなく、国民全てが教育を受けることができ、国民全てに議員試験を受ける資格がある。

日本のように四方を海に囲まれた島国だが、国土は日本の約3倍で人口は約半分。

習慣も日本と大して変わらず、文明も戦後ぐらいの発達具合だ。

国家も安定し、今回は比較的楽そうだ。
生活習慣がまったく違うと、慣れるのに結構苦労するんだよね。

一通りの国の仕組みを確認し、次は私がこれから生きていく“華月”に意識を向ける。

——今回は楽が出来る！！　と思った数瞬前の自分を蹴飛ばしてやりたい……。

華月は、この光明の国で生まれ育った今年23歳になる女。
この国では18歳が成人なので、成人してから5年ということになる。

生家はこの国で大半を占める中層の商家で、主に布地を扱っている。

働き者の両親と、2歳年下の弟と5歳年下の妹の5人家族。
特別裕福ではないが、貧しくも無い、不自由の無い平穏な生活を送っていた。

——が。華月はそんな平穏な生活に満足できていなかった。

人並み外れた優秀なその頭脳で、国を動かしてみたくなったのだ。
目指すのは、国家元首。

世襲制ではなく、完全実力主義なので、実力さえあれば、頭脳さえあれば男女関係無く国家元首の地位に立つ事ができる。

議員試験の受験資格は成人である18歳。

ある一定の頭脳さえあれば老若男女問わずに何回でも受験できるが、この時代、まだ女が受験したことは無かった。

貧富の差が無く、国家が安定していれば、総じて女は家庭に入り子供を育てる。

夫を助け家庭を守り子を育てるのが女の幸せ、という、古い時代の日本のような考えが今の光明国の常識になっている。

家庭に入り子供を育てて夫に養ってもらう生活が女の最高の幸せだ、と両親に見合いを勧められた華月は生家を飛び出した。

幸い、華月の頭脳を評価してくれる恩師が後ろ盾になってくれたおかげで生家との縁を切らずに済んだが、生家に戻ることはしなかった。

試験に合格すれば次期議員候補としての特別な教育を受けるため、官舎に入ることになる。

そのため、自分に絶対的な自信のあった華月は生家に戻る必要を感じなかったのだ。

当然のように試験には合格した華月。

だが、問題が起きた。

官舎には、女性を受け入れる体制が整っていなかったのだ。

初の女性受験者で合格者だったため、受け入れ体制が整わなかった。

しかし、だからといって合格者を官舎以外に住まわすことは出来ない。

一度例外を作ってしまうば規則が成り立たなくなってしまう。

男女関係無く官舎で生活させよう、追々体制を整えよう、としたのだが、ここで問題になったのは華月の容姿。

官舎という隔離された空間で、次期議員候補という禁欲的な生活を強いられている男達の中に入れるには、華月は美しすぎた。

漆黒の豊かな髪にコバルトブルーの大きな瞳。意志の強さを表すその顔はキツめだが整い、均等の取れたグラマラスな肉体は男の劣情をこれでもかと刺激する。

所謂エリート達から性犯罪者を出すわけにはいかないと、苦肉の策として官舎の最上階を女性専用として、そこに華月は迎えられた。

なぜ、苦肉の策か。

そもそも、最上階は最高成績者に分類されるのクラスの者が住む所だったのだ。

官舎内に於いても完全実力主義で住む部屋が決められている。

八階建官舎の最上階から下に降りていくにつれてオチコボレとなっていく。

もちろん、頭脳だけでなく判断力、応用力その他で総合的に判定しクラス分けされる。

その最高クラスの候補者が住む最上階を与えられたのだ。

最上階から下ろされた者や元々下の階に居た者たちからの攻撃が凄かった。

不当な非難や嫌がらせ、面と向かっての罵詈雑言。

「出て行け」は挨拶かというほど言われ続けた。

しかし、華月はそれに傷付き泣くような可愛らしい女ではなかつ

た。

無能な男ほどよく吠える、と真正面から喧嘩を売りに行ったのだ・

結果、実力の差を見せつけ男どもを黙らせた。今では、誰一人として華月に文句を言うものは居なくなった・・・

とりあえず、ここまで確認して突っ込みを一発。

喧嘩売るなよっ 男黙らすなよっ 逆ハーか?! むしろ女王様か?! 何だよ華月!!

ここまでがやっと18歳。

華月が死んだ23歳まであと5年分。一気に確認する気が失せた。

――が、早く確認して華月の肉体と私の魂を同化させないと大変なことになる(らしい)。

泣く泣く続きを確認していく。

しばらくは平穏な日常が続いた。

特別な教育を受け、議員として必要な知識を詰めていく。

華月にはとても充実した日々だったが、また波風が立つ。

最有力候補生は、現職議員の補佐として実習訓練を受ける。

優秀なものから引き抜かれ、平均5年ぐらいの実習で後を譲られる。

候補生の格付けは、ある一定の基礎知識を習得した者に定期的に行われる試験によって決定され、これは補佐として実習に入った者も例外なく受けなければならぬ。

格付けが落ちれば、容赦なく補佐から外される。

華月は、初めての試験で最高位の得点をたたき出した。

この結果に慌てたのは元首を含む議員達。

最長10年の任期は、後継が育ち、譲るに値すると認められれば任期内であっても辞任することは可能だが、自分の補佐よりも優秀な人材を無視することは出来ない。

議員1人につき補佐は2人までしか付けることができない。

そのため、自分より優秀な者に何時取って代わられるかもしれない補佐たちの日々は正に戦争だった。

そんな中に華月は、最年少で女で最高実力者として格付けされた。波風が立たないわけがなかった。

議員達は我先にと華月獲得に走った。

1人しか補佐を付けていない者はすぐに名乗りを上げ、既に2人付いている者は調整してまでも欲しがった。

収拾がつかなくなった時、意外な所から声が上がった。

経験不足を考慮しても現職議員よりも優秀な華月は、元首の下で学ぶのが相当である、と元首自らが宣言したのだ。

こうして、華月は元首補佐として政治に携わることになった。
この時、華月20歳。

それから2年は何事も無く・・・はなかったが、華月は気にしていなかった。

「無能な人間に用はない」を口癖に、あらゆる方面からの悪意をいなししていた。

自分が認めることの出来ない無能者は、たとえ現職の議員が相手であろうと正面から衝突した。

そのかわり、認めた相手には最上位の礼節を持って接した。

そんな最凶な華月が今回死んでしまった原因は・・・

——自殺だった・・・

16・華月1（後書き）

最凶の人生、波乱の予感・・・？
どうなる、鈴ちゃん！！

17・華月2

自分に絶対の自信を持ち、国家元首になるという夢を現実の物にしつつあった華月。

その最凶の華月の死因が自殺だと知って、私は半ばパニックに陥った。

——と、とりあえず落ち着け私!!

華月が死を選ぶきっかけとなった事柄を見つけなければならない。

死ぬ、5日前は普通に最凶だった。

4日前も、そう。

3日前も、そう。

2日前、に国賓が来た。

隣国——といっても、海を挟んだ向こう側だが——の皇子様が外交を兼ねた外遊として来たらしい。

元首自らが出迎え、皇子と年の近かった華月と数人の補佐たちが同行した。

外交とは名ばかりの、頭のあまりよろしくない皇子に華月は欠片の興味を示すことは無かったが、皇子は違っていたらしい。

翌日には出国する予定だったが、外交として正統な理由を付け、また、光明の政治制度及び教育制度にいたく関心があるとのたまひ、光明の滞在を望んだ。

滞在中の説明役に、ちゃっかり華月を指名して。

そして、自殺の前日。

皇子が滞在の理由に使った、政治制度と教育制度の一通りの資料片手に数人の補佐とともに皇子の元を訪れた華月は、皇子の無能さに辟易としていた。

相手は国賓で今は仕事でだと自分に言い聞かせ、その日は何とか無事に終わらせることができた。

翌日、同じメンバーで皇子のところに行けば、何を勘違いしたのか、皇子にドレスを贈られた。

視察の衣装だと贈られたそれは丁重にお断りし、現地の責任者に連絡を取るために出て行こうとすれば、突然皇子に襲われた。

助けに入ろうとした補佐たちを目線で止め——下手に騒いで外交問題に発展させることを危惧したのだ——自身は開いていた窓から身を投げた。

自分から落ちたのだから外交問題にはならないし、事故として処理すればいい、と冷静に判断した結果の行動だった。

実際、高さは2階。

本当ならば大した怪我もすることなく、打ち身程度の予定だった。間違っても死ぬことは無いはずだったのだが、たまたまそこを通りかかったヤエ様と衝突したらしい。

死神様に触れば、その魂は強制的に肉体から切り離される。

——ヤエ様のほか——！ 避けろよ——！

などと大声で叫んでも、現実はかわらない。

こんな、色んな意味で最凶の女の人生なんてやだよ、と言ってもやっぱり現実是不変ならない。

——くそうっ 次に出たらヤエ様に絶対文句言てやる!!
と固く誓って、華月の肉体と私の魂を同化させる。

だんだんと鈍痛が襲ってきて、同化が上手くいったのだと知った。

「ああ、華月……。良かった」

意を決して目を開ければ、かけられた言葉。

この声は元首だな、と当たりをつけて視線をずらせば、寝かせられていたベッドの横に腰掛ける元首の姿が確認できた。

柔和な笑みの初老前の男性。

一見穏やかそうなこの人が、この光明国のトップ、国家元首の遼東様だ。

「遼東様、ご心配をおかけしました・・・」

そっと体を動かしてみる。

鈍痛はあるが、大したことなさそうだ。

「良い。事は他の者達から聞いている。国交問題を危惧したのだらう?」

苦笑とともに返され、本当にありのまま聞いたのであろう事が伺

えた。

「腐っても国賓でしたから……」

溜息とともに言えば、遼東様はまた笑った。

「華月で助かった。他の者なら、こうも機転は利くまい。しかし、華月には無茶をさせたな……」

痛ましそうに見られるが、たかが2階の高さだ。どうと言うことは無い。

——まあ、どこぞの死神様のセイで華月は死んでしまったわけだが。

「大したコトはないのでご心配なく。怪我也打撲程度でしょう？」

鈍痛はするが激痛はないので間違いないだろう。
それよりも、気になってたことがある。

「それより、皇子はどうなりました？ 逃げ帰ってくれていると大変有難いのですが」

これは、華月の本音だ。

まあ、私にしてもその方がありがたいわけだが。

——厄介事はゴメンなんだ！！

が、遼東様の顔は私の希望を打ち消した。
思わず舌打ちしそうになったが、堪えた私は偉い！！

「皇子は今回のこと、全面的に非を認められ正式に謝罪された。いたくご心配下さり、目覚めたら知らせるように、と言われている」
「バカかつ 考えろよっ 認めるなよっ 謝るなよっ だっから無能は嫌いなんだ！！」

思わず口をついた罵詈雑言は、遼東様も同意してくれた。

「謝罪は受け入れていない。華月の不注意で、退出時に誤って転落で押し通す。その場に居た補佐たちにも、それで通すように言っている。それで良いな？」

「当然です。でなければ、何のために落ちたのかわからないではないですか。ああまったく。さっさと逃げろよ無能め」

その無い脳味噌使って考えろよとか色々文句を言っていたら、遼東様に頭を撫でられた。

気を静めて、遼東様に向き直る。

「皇子には私から“御託び”いたします。上手く処理しますから、お任せ下さい」

「ああ、その点は心配していない。任せたよ、華月」

もう一度、頭を撫でて出て行く遼東様。

皇子を呼びに行ったのだろう。

さて、どうしたものかと頭を悩ませる。

華月であれば、言葉通りに上手く処理するのだろうか・・・。

ヤエ様のばかーーーーー！！ と大声で（心の中でねっ）叫んでみても、名案は浮かばない。

やっぱりここは、口八丁で誤魔化すか、と華月の知識を引っ張り出す。

皇子は、華月が興味すら引かなかった無能だ。

それに加え、国力はこの光明国の方が勝っている。

一応、一国の皇子ならば、国交に支障をきたす事はしないだろう。それすら理解できない（わからない）無能を野放しにはしていないだろうから、優秀な侍従か副官が付いているハズだ。

華月の記憶からそれらしい人物を探せば、どうやら皇子以外は優秀らしい。

これならば何とかなるだろう、と思ったところで控えめなノックが響いた。

「どうぞ」

声をかければ、ドアの向こうには皇子の姿。

「ああ、華月。よかった・・・」

——呼び捨てかよっ！！

ベッドの横まできた皇子に続いて側近たちも近づいてくる。チラリと側近をみれば、そこに安堵の色。この側近たちは、華月の行動を正しく理解している。

「皇子、ご心配をおかけして申し訳ございませんでした。誤って転落などお恥ずかしい限りでございます……。どうか、このような失態はお忘れくださいませ」

一応、遠回しに言ってみる。

いくら無能でも皇子と言う地位に居るのなら、裏の意味を正しく理解するハズである。

いわく、皇子が行った“乱暴”は無かったことにしてやるから、そっちも今回の事は忘れろ、である。

こっちは事を荒立てることを望まない、と言っているのだ。
正しく理解した側近たちは無言で華月に頭を下げる。

——が。やはり皇子は無能だった！！！！

「何を言う、華月。悪いのは私だ。私が・・・」
「皇子」

言い出す前に止めろよっ 側近！！ と思いながら皇子の言葉を遮る。

「私が、誤って、転落したのです。 その場に居合わせた者すべてがそう証言しましょう。 勿論、皇子の側近の方々も」

チラリと側近に視線を送れば、涼しげな顔で言う。

「そうです、皇子。 補佐官華月殿は誤って転落。 元首殿も居合わせ
た他の補佐官達もそれを認めております。

皇子がなさるのは、華月殿を見舞うことでございます」

それ以上はするな、と言う側近に、皇子はとんでもない方向に向かった。

「そうだな、では華月に見舞いを。」

我が国に城を用意しよう。海を渡る船も、もちろん使用人も付けよう。衣裳も華月の好む物を。あの衣裳は気に入らぬようだったから、今度は華月の好む物をたくさん。華月、後は何が欲しい？」

——取り敢えず、オマエを殺せるヤエ様のカマが今スグ欲しい！！！！！！

まあ、真剣に思ったのはご愛嬌だ。

さて、この無能バカ皇子をどうするか、が目下の課題であるわけだが。

「皇子、御国に城を賜っても私はそこには参れません。それよりもまず、城は見舞いではございません。私を心配して見舞ってくださいるのなら、一言“養生しろ”とおっしゃってくださいれば良いのです」
「そうなのか？」
「そうです」

本当はそれすら要らないが、こちらが妥協しなければ収まらないだろう、と口にするれば、以外にも皇子は納得を見せた。

これなら上手くいくかもしれない、と喜んだのもつかの間、やっぱり無能バカだった。

「では、華月が治るまで、毎日言いに見舞うことにしよう」

「いりません。皇子は当初のご予定通り、次国へお渡りください」

速攻で拒否を口にする。

何なんだ、このバカはっ!!

本来なら、皇子はすぐにこの光明国を出国し、次の国に外遊するハズだったのだ。

次は隣国、奉武国に行く予定だと聞いていた。

「私はこの光明の制度をまだ学んではいない。だから、奉武へはま
だ行けないよ、華月」

「では、皇子にご説明申し上げるのに適した者をご用意いたしまし
よう。わたくしの為に皇子のご予定を狂わすわけには参りませんの
で」

だから、さっさと出て行け、と思うが、やはり皇子には通じない。

「私は華月から学びたいのだよ。だから、私のためにも早く元氣に
なっしてほしい」

「私よりも適した者が多数おりますのでご安心ください。このあと、
ご希望されていた現地視察も予定通りご案内いたします。どうぞ皇
子、私の事はお気になさらずお出かけください」

有無を言わず退室を促せば、副官であろう者が側近を促し皇子
を退室させた。

18・華月3（前書き）

数々のご意見ありがとうございました！
今後もよろしくお願いいたします！！

18・華月3

「華月殿、数々のご配慮頂きありがとうございます」

退出を見届け2人になれば、そう言われた。

やはり、皇子以外は優秀らしい。

「いえ、副官殿。当然の対応ですのでお気になさいませんように。当方といたしましては、このまま皇子が出国してくださいればありがたいのですが？」

「はい、我々も同じです。しかし、ご存じのとおり、皇子が……。華月殿にいたくご執心でいらっしゃるのです、どうしたものかと……」

よほど困っているらしい。本人にそれを訴えるのだから。

側近だけでは、もうどうしようもないのだろう。

「あくまで皇子は光明の国賓でいらっしゃるしゃいますので、私もそのようにご対応させていただきます。私には何の他意もございませんのでご安心ください。」

今後ですが、私の養生中に皇子には出国していただきたく、そのように段取らせていただきたいのですが、副官殿のお考えをうかがっても？」

いくら華月がそのように動いても、皇子側がそれを拒絶すればどうすることもできない。

皇子側からの協力が必須なのだ。

状況理解ができずにゴネているのは皇子本人だけなので、この副

官が協力してくれれば早々に片付くだろう。

「当方もそうしていただけると助かります。出来れば、本国へ此度のコトを報告したくはありません。うやむやのまままでこのまま終わらせていただきたい・・・」

実は今回の外交、皇子とある国の皇女殿下との見合いのためのものでして。このまま皇子が華月殿を望まれますと、我が国の外交にいささか問題が生じます。皇女殿下はじめ、先方に知られるわけにはまいりません」

なるほど。皇子が知らないだけで、これは全て仕組まれた外交だったというわけか。

副官はじめ、側近たちが必死だった理由が分かった。

そりゃあ、見合いに行くのに“女”は連れて行けないだろう。

「皇女殿下、ということとは、仙磨国の第三皇女殿下ですか？ まあ、あの国に知られるわけにはいけませんね・・・。仙磨には、いつ入国のご予定ですか？」

「どうして、仙磨だと・・・？」

確定事項として発した発言に、副官の顔色が変わる。

どうやら、機密事項だったらしい。

「簡単なことです。副官殿は、皇女、と申されました。現在皇族制を施しているのは貴国を除いて7カ国。そのうち皇帝が政の実権を握っているのが4カ国。この縁談で外交問題に発展するのなら、この4カ国のうちのどこかでしょう。そして、貴国との政的バランスと皇子に合う未婚の皇女がいる、と考えれば、消去法で残るのが仙磨になります。」

ご安心ください。他の者には言いませんので」

皇子がどこの国の皇女と見合いをしようが結婚しようが華月には興味もないし、仙磨がどこの国と姻戚関係を結ぼうがこの光明国には一切の影響はない。

つまり、わざわざ報告する必要は無いのだ。

「その頭脳に脱帽いたします・・・」

華月殿のご推察通り、仙磨国第三皇女殿下との見合い話が進められております。ただ、これは我皇子と皇女殿下はご存じではありません。あくまで外交先でお互いが見初めあっていたくことが重要なのです。

仙磨には、5日後の夜会を指定されておりますので、遅くとも明後日の早朝にはこの国を出国したいのです」

この光明国から仙磨国まで、直接行けば1日半もあれば着くが、外交としている以上、目的の仙磨まで直接向かうわけにはいかないだろう。

いくらこの優秀な副官が采配しても、無理が生じてくるのは目に見えている。

さて、どうするか・・・

「当方といたしましては、本日の視察が終われば皇子のご希望に沿ったという形は整います。もともと皇子にはそれほど興味も無かったように見受けられますので、後は資料だけお渡しすれば双方の体面は保たれ、これ以上は必要ないかと思われます。

問題は、皇子にご納得頂きどのようにして出国していただくか、ですが・・・副官殿に何かお考えが？」

この副官とは完全に利害が一致しているので、下手に隠し立てす

るのは得策ではない。

こちらの内情を告げれば、心得ているとばかりに考えを述べる。

「皇子が滞在を決めたのは、華月殿と一緒に過ごすことを望まれたからです。ですので、このまま華月殿が臥せっていただければ、あとはこちらで」

要するに、このまま病室に立て籠もっていればいいらしい。

「では、今晚から熱でも出しましょう」

クスリと笑って了承すれば、急に表が騒がしくなって会話を止める。

何事かと副官と顔を見合わせた瞬間に、いきなり開かれる扉。

「華月!!」

そこに立つ、皇子の姿。

この無能、人がせっかくお膳立てしてやった視察を、サボって戻ってきやがったらしい。

「まあ、皇子。いかがなさいました？」

腹立たしさを笑顔に隠して迎えてやれば、にへら、と笑って近づいてくる皇子。

「どうしてオマエが華月と居る？」

傍らに腰かけている副官に向かって言う皇子に、手を伸ばして副官とは反対側の隣に呼べば、いそいそと寄ってくる。

副官がチラリと睨むが、視線で抑える。

——私だってやりたくないんだ!!!

「副官殿とは、今後の事を少々。

それよりも皇子、視察官の者が何か無礼でも？ 早いお戻りのようですが・・・」

「いや、大事な。華月が心配だったので戻ったのだ。早く治して、華月が案内してくれ」

やっぱりコイツは馬鹿で無能だ・・・。

どこの世界に視察すつぽかして女の所に来る皇子がいるんだよつ！！

と怒鳴りつけたい衝動をグッと抑えて相手をする。

「まあ、身に余るお言葉ですわ。しかし皇子、私の完治にはまだ暫くかかります。ですので、私の事は捨て置き、どうぞ奉武へとお渡りくださいませ」

視察する気が無いなら早く出国しろ、と直接言えたらどんなにいいか!!!

「皇子は、皇帝になられる尊い御方。このように1カ国に留まっておられてはなりません。多くを見、学び、広い見識を持った皇帝へとなられませ。良い皇帝の治める国は豊かな国になりましょう。そのためにも皇子は、多くの国に渡り、多くのものを見なければなりません」

皇子の手を取り、緩く握りながら、ゆっくりとした口調で言う。

「今回の外交も、既に他国に知れておりましょう。お迎えするために、多くのモノが動いております。皇子がそれを無駄にするようなことをされてはなりません。今回のご予定を全てつつがなく終わられ、それでも我が国の制度を、と望まれるのでしたらもう一度足をお運びくださいませ。その頃には、私も完治しております」

押してダメなら引いてみる。

正論かまして黙らせて、受け入れ意思を見せてやれば、面白いぐらい目論見通りの反応が返ってくる。

「私が賢帝となれば、華月は喜んでくれるのか？」

「もちろんです」

「また、来ても良いのか？」

「お待ちしております。その折には是非、私がお相手を」

緩く握っていた手を、きつく握り返される。

「此度の日程がすべて終わった後、改めて華月に会いに来る」

「きちんと当初のご予定を終了されてからでしたら」

何かを決意したような顔が気にかかるが、それよりもさっさと出国してほしいので、気付かなかったことにする。

5日後の仙磨国で予定されている、夜会と言う名の皇子の見合いが上手くいけば、もう皇子はここへは来なくなる。

要するに、今、この光明国から一刻も早く追い出しさえすれば良いのだ。

口先三寸で丸め込んだところで、何の問題も無いだろう。

後は、皇子付きの優秀な側近たちの任せておけばいい。

——これ以上は面倒見ないからな!!!

と、副官に視線を送れば、さすがに優秀な者の行動は早かった。

「では皇子。すぐにでも出国の用意をいたします」

副官が侍従たちに指示を出して、侍従たちが出ていく。

残ったのは、皇子と副官。

そして、まだ皇子に手を握られている華月。いや、ここは華月の病室だが。

「華月は、ゆくゆくはこの光明国の国家元首になるのだな」

突然かけられる皇子の問い。

「そうなれるよう、日々精進しております」

このままいけば、間違いなく華月は国家元首になるだろう。
しかし、そうです、とは言えない。

「華月が元首となれば・・・」

うん、と何かを勝手に自己解決した皇子に、いやな予感がヒシヒシ。

だが、ここで突っ込んではいけないと思う。

視線をずらして副官を見れば、副官も何かを感じたようで、お互い目だけで頷きあった。

「皇子、これ以上は華月殿のお体にもさわりましょう。出国の用意を終える前に、元首遼東様にもご挨拶に伺いませんと」

「皇子、お気遣いいただき、ありがとうございます。道中の安全を心より御祈念申し上げます」

最後とばかりに笑顔を振り撒き、副官に連れられていく皇子を見送った。

18・華月3（後書き）

ようやく一難（えっ？）去りました。

19・華月4（前書き）

おバカ増量キャンペーン実施中・・・？

19・華月4

何とか皇子を追いつ出して5日。

今頃、仙磨の皇女殿下と見合いだろうなあ、という時刻。

皇子のことなど、思いついていたのがいけなかったのだろう。

体調も戻り——それほど悪いわけではなかったが——補佐官の仕事に復帰し、与えられた自室に戻れば、1通の書状・・・というか、手紙。

仕事柄、外交相手との手紙のやり取りもしていたため、特に気にすることも無くその手紙を開けた。

瞬間、激しく後悔した。ものすごく、後悔した。できれば、見なかったことにしたいぐらい、後悔た!!

——が、見なければもっと後悔する内容だったので、よしとする。

「あんのバカ皇子!!!!!!」

が、文句がでるのは仕方ない・・・

「仮病、か・・・？」

できれば、避けて通りたい。

「外交の予定は・・・」

どうせなら国外逃亡も考えたが、こんな時に限って何も無い。今から、予定を組むことすらできない。

「諦めろってか・・・？」

せっかく追い出したのに！！

「なんでまた戻ってくるんだよ！！！！！！」

手紙の送り主は、あのバカ皇子の副官殿。

神経質そうな整った字で、綴られた内容は、罵詈雑言が一昼夜でも続けられそうな物だった・・・。

要約。

御見合いは無事終わった。

相手の皇女殿下とバカ皇子はまとまった。

皇女はすぐにでも皇子の国に行きたいと言ったので、一緒に連れて帰ることにした。

帰り道、また光明国に寄るからヨロシク。

仙磨の皇女殿下（と書いて見合い相手と読む）とまとまったのは、予定通りだから良いだろう。

むしろ、何の問題も無い。

しかし。しーかーしー！！

「どーして結婚相手連れてここに来るんだー！！！！！！」

と、言っているにも仕方がない。
打てる手は打つべきだろう。

「余計な仕事増やしやがって・・・」

手を打つため、戻ったばかりの部屋を後にした。

「いやあんっ　ほんとに綺麗ですわぁ！！　楽相らくそうの言うとおりですわぁっ」

「だろう?!　華月は美しいんだ!!　湖李こりもそう言ってくれると思っていたよ!!」

そうか、バカ皇子は楽相らくそうって名前なのか、とか、仙磨の第三皇女殿下は湖李こりって名前なのか、とか。

異様なテンションのこの2人を見ながら、そんな事を考えていたのは、単なる現実逃避である。

チラリと皇子の後ろに控える副官殿を見れば、たった数日でかなりやつれていた。

まあ、この2人を見れば、やつれた理由など考えるまでも無いのだが。

副官の手紙から3日。

花嫁となる仙磨の第三皇女殿下を連れてやってきたバカ皇子を出迎えるために港へこれば、そこには仙磨の舟が2隻停泊していた。

遅れて入港してきたバカ皇子の舟よりも立派なそれは、皇女殿下の嫁入り道具を乗せていることが伺えた。

よく短時間でここまでの品を用意できたな、と仙磨の国力を見直したが、この皇女殿下を見て納得した。

——皇帝は一刻も早くこの皇女を国外に出したかったんだろうな・
・

「皇女殿下には・・・」

皇子のエスコートで下船する皇女に形式通りの挨拶を、と口を開けば、それを遮る形で先ほどのセリフである。

「皇女殿下・・・」

「いやですわあ。皇女ではなく、湖李、と呼んで下さらなきゃお返事しませんわあ」

気を取り直して、と声をかけるが、それも叶わず。

うふふうと何かを期待する目で見つめられ、何故か皇子もズイッと迫ってくる。

——何なんだ!! バカ増量キャンペーン中か?!

これは多分、いやきつと、名前を呼ぶまで次に進めない・・・
次の予定もある。

こんな所で下手に注目を集めたくもない。

「湖李様、ようこそ光明国へお越しくださいました。信津国皇太子殿下とのご婚約、誠におめでとうございます」

1歩下がって口上を述べ、軽く頭を下げれば、

「あぁんっ 華月が笑いましたわぁっ 何て美しいのかしら!!
さぁ、華月、もっと笑ってちょおだあい」

などと、わけのわからん反応を返される。

この場合、普通ならば・・・と考えて、視界の端に映る副官が緩く左右に首を振るのを確認して、やめた。

このバカドモに、普通の反応を求めてはいけないらしい。

——コイツラが信津を継いだら、一昼夜で崩壊しそうだ・・・

「華月うつ!!」

などと若干現実逃避気味に考えていれば、皇女にガシッと両手を握られていた。

「・・・湖李様？」

引き攣りつつも何とか笑顔で名前を呼べば、

「はううつ 華月う」

と呟き擦り寄ってくる。

——誰か助けてー・・・

皇子たちの後ろ（華月の正面）に立つ副官や侍従たちは視線を逸らし目を伏せ、こちらを見ようとしめない。

華月の背後に控えている同僚の補佐官たちは、どう手を出していいのかわからないだろう。

本来ならば真っ先に止めるべき立場の皇子は・・・

「ああ華月！！ 湖李ばかりではなく私の名前も呼んで欲しい！！」

さあ！！ と意気込んで迫ってくる。

——勘弁してくれ・・・

呼ばなければこの場から動けないだろう。

しかしっ！！

呼べばもっと大事になる！！

バカの行動ほど予測不能で怖いものは無い。何とかこの場を切り抜ける方法を探すが見つからない。

チラリと胸元を見れば、ガツチリと両手をホールドした皇女がスリスリとなつている。

そろそろと視線を上げれば、皇子が期待に満ちた目でこちらを凝視している。

——覚悟決めろってか?!

できることなら、こんな覚悟は決めたくない!! が。

「楽相様・・・」

「かげつーー!!」

ぎゃあああああつつ やっぱりーー!!

恐る恐る呼んだ皇子の名。

その途端に皇女ごと正面から抱きついてくる皇子。
避けられずホールドされる華月。

———どんな拷問だ!!!

誰か助けてくれないかなー、と不自由な体をそのまま顔だけ動かすが、相変わずこちらを見ない信津のカタガタ。

背後の同僚たちまでは見れないが、期待はできない、というかしていない。

仕方がないので、助けは早々に諦めて自分で切り抜ける。

「皇子、皇女、お放しくださいます」

動揺を悟られないように平常と変わらない口調とトーンで言うが、バカ2人はイヤイヤと首を振る。

まあ、想定内。

「信津国皇太子楽相様、仙磨国第三皇女湖李様。我国へのご来訪賜り心より御礼申し上げます。つきましてはささやかではございますが、宴の用意ができております。御移動くださいますようお願いいたします」

硬質な口調で形式に乗っ取った口上で告げれば、2人揃ってピタリと停止する。

いくらバカでも皇族。

そのへんの教育は条件反射で行えるぐらいしっかりされているだろう、と思った通り、やっと自分たちの身分を思い出したらしい2人にホット息をつく。

さっさととはなせ

「光明の皆様。此度は急な訪問にも関わらずこうしてお迎え下さり、ありがとうございます」

「滞在中にこの光明国のこと、色々お教えいただきたく存じます。よろしくお願いいたします」

停止して数秒、ススツと2、3歩後退し、今までのバカさ加減が嘘のように礼を返される。

皇族としての気品に溢れ、優雅な所作でとられた礼に、やっと他の者達も通常通りに動き出す。

信津国の副官あちも、深々と頭を下げる。

まあ、こっちは華月に対する礼だろう。アレ以上時刻の次期皇帝のバカ姿を晒したくは無かったはずだ。

勿論、既に手遅れなのだが。

「どうぞこちらへ」

案内役の同僚が皇子達を先導していく。

せめて部屋に放り込むまで大人しくしてろよ〜と思ったのもつかの間。

皇子達より2歩下がった所に居たのがいけなかったらしい。

「いやですわあつ　華月はどおしてそんな所にいますのお?!」

言いながら右腕に抱きついてくる皇女。

「そうだぞ、華月。一緒に歩こう」

言うが早いか、左側の肩を抱いてくる皇子。

――――婚約者の前で他の女の肩を抱くな!!!!

と怒ったところで無意味だと悟った。

その婚約者でさえ、華月に抱きついているのだから。

案内役が伺うような視線を寄越すのに、ゆるく頷いてサキを促す。いつまでもここには居たくない。突き刺さるような視線的な意味

で。

「楽相から華月のことを聞いて、会えるのを楽しみにしてましたのよおっ あたくし、美しいものがだあいすき。華月は本当に美しいわぁ」

ほう、と熱っぽい息を吐きながら見上げてくる皇女。

「だろう、湖李！！ 本当に華月は美しいんだ！！ そのうえ、次期国主で頭もいい」

ナゼか自慢げに言う皇子。

「まあっ 才色兼備ですのねえっ 素晴らしいわぁっ さすがあたくしの華月ね！！」

「ああ、私の華月は最高だ！！」

——勝手な所有権を声高に叫ぶなあ！！

両側で繰り広げられるバカな思考回路を放置し、無言で足を進めた。

19・華月4（後書き）

どうしよう、收拾つかない・・・。

20・華月5（前書き）

お待たせいたしました。
新キャラ登場。

20・華月5

「申し訳ありませんでした、華月殿」

何とかバカドモを部屋に放り込んで、宴までの自由を確保した。副官殿に詳細を聞こうと案内ついでに部屋にお邪魔する。

「いえ、副官殿。驚きはしましたが、事前に伺っておいりましたので・
・」

部屋に入るなり頭を下げる副官に、一応そう返す。――が。
解ってたんだから手紙に書いておけよ！！ が本音である。

まあ、書きたくなかった気持ちもわからなくはないが。

「まずは、ご婚約おめでとうございます、と申し上げるべきですか
？」

疲労を色濃く残す副官にそう告げれば、何とも言えない顔で押し
黙る。

まあ、この副官も、まさか仙磨の第三皇女殿下がアレだとは思
いもなかっただろう。

華月にしても、交流の無かった仙磨の情報までは持っていなかつ
た。

「ありがとうございます、とお答えするべきなのでしょうが・
正直、言いたくありませんね」

ふう、と大きく息を吐く副官。

相当参っているその様子に、心の底から同情する。

——ヤエ様を相手にした後の自分と通じるところがあるとか考えちゃいけない!!

「どういった流れで、こうなったか。お伺いしても？」

机を挟んだ向かい側で疲労困憊の副官に声をかける。

申し訳ないと思うが、こっちも話を聞かなきゃ今後の対応に困る。

取り敢えず、3日間の滞在手配はしてあるので、できればその期間内に出て行ってほしい。

——これ以上の厄介ごとはゴメンなんだ!!

「はい。先にお知らせしたとおり、皇子と皇女殿下はあのようとても良く似た……いえ、非常に仲睦まじく、夜会の翌日には婚約されました。それで、お世話になった華月殿にご報告を、と……」

「言葉を選ぶ必要などありませんでしょう。包み隠さず真実を」

相当端折って伝えてくる副官に、異議申し立て。

真正面から今更だ、と言えば、副官は一際沈み込む。

——まあ、伝えたくない気持ちもわかるけど

あー、とか、うー、とか唸る副官に、こっちから質問する。
時間の無駄は避けたい。

今は大人しくしてるバカドモが、いつ暴れだすかわかったもんじやない。

「皇子と皇女は、私のことで意気投合を？」

「・・・はい。夜会の席で、皇子が皇女殿下に向かって、『華月ほどではないが美しい』と。それを聞いた皇女殿下は、お怒りになるどころか『華月』に興味を示され・・・」

「それで、意気投合、と？」

「はい。皇女殿下は、美しいものを中心に生きておられる方で・・・皇子が大絶賛される華月を見たい、と」

ただそれだけのため、あらゆる慣例を破って皇子に同行したという。

——ほんとうに、バカの考えることは解らない・・・

「普通であれば、いくら婚約を交わしたといっても、すぐに同行など出来るものではないのでは？」

第一、すぐその場で婚約、などというのも納得できない。

一般民衆ならともかく、一国の皇族同士だ。

国と国との取り決めや、政的利害関係、はては外交など、考え出したらきりが無いほど色々絡んでくるのが普通だろう。

「いえ、先にもお話したように、全ては仕組まれておりました。何

としても、皇子には第三皇女殿下を娶っていただく必要があったのです。下準備は整ってありました」

——要するに、国交間の取り決めは既に終了してたってことか。

「しかし、まさかすぐに同行するとは思わなかった？」

副官の、微妙なニュアンスを突いてみる。

「こちら側の予定では、一時帰国し、皇女殿下をお迎えする準備を整えたのち、正式に皇太子妃としてお迎えするつもりでした」

隠し立てしても無駄だと悟ったのだろう。

丁寧だが、どこか投げやりに副官は言う。

「では、御国の準備が整うまではこちらで？」

嫌な予感がヒシヒシと。

通常、妃を迎えるには相当の準備が必要になる。

その時間を稼ぐため、ここで時間つぶしを……とでも言われるのか？

——それは本気で嫌だ！！！！

「いえ、そのようなことは……多分、きっと……」

ハッキリ否定しない副官に、これ以上突っ込むのを諦める。
どうあがいても、国賓には変わりがないのだ。

くそうっ

「3日間のご滞在準備は完了しております。もう少し、長く必要です
すか？」

多分、皇子が外交として国を出て、20日ぐらいだろう。

その頃から準備を進めていけば、いくら皇女殿下の同行と言う不測の事態があったとしても、あと10日ほどで信津側の準備は整うだろう。

できれば、そんなに滞在などして欲しくないが。

「そこまで貴国にご迷惑はお掛けしませんよ」

どこかホッとしたような副官と視線を合わせれば、突然かけられた声。

その声に振り返れば、そこには入り口に佇む遼東様と……

「皓孝様！！」

どことなく皇子に似た、年若い男が1人。

その姿に、副官が慌てて立ち上がり、礼を取る。

「安丹、ご苦労だったな」

副官にそう声をかけ。

「補佐官華月殿。この度は、我が信津国のために多大なるお心遣いをいただき、御礼申し上げます」

華月の目の前にまで進み、完璧な所作で礼を取った。

「私は信津国第二皇子、皓孝と申します。あのバカが多大なるご迷惑をお掛け致しましたこと、重ねてお詫び申し上げます」

顔を上げて、ニヤリと笑って。

トンデモナイことを口にした。

——うん、またまた厄介なのが出てきた感じ・・・？

20・華月5（後書き）

お馬鹿だけじゃあ、この先進まないことが判明（今更）

ってなことで、新キャラ登場。

何やらヤヤコヤシイ感じですよ（ふふふ）

こそつと拍手復活。

感想お待ちしております。

21・華月6

華月の真正面に座るのは、信津国第二皇子皓孝様。

その隣、華月の隣に座る遼東様の正面に座るのは、副官安丹殿。

衝撃的発言をした皓孝様の登場から数分。

取り敢えずは詳しい話を、とそのまま副官殿の部屋で腰を落ち着けた。

「改めまして、皓孝様。遼東元首の補佐官を務めております、華月と申します。お出迎えにも参らず、失礼いたしました」

「突然お邪魔したのは私。華月殿がお気になさることではありませんよ」

軽く頭を下げて言えば、皓孝様はそう言って場を流す。

ここで皓孝様が詫びれば、こちら側としても収まりが付かなくなる。

このやり取りだけで、皓孝様の外交手腕が伺いしれた。

——うん、あのバカ皇子の弟とは思えないほど賢いな……

さっきのトンデモナイ発言も、うっかり忘れられそうだ。

「まさか、お一人でお越しになるとは思いませんでした。どうやって光明こうみょうへ？」

遼東様の言葉に、思わず目をむく。

一国の皇子が、共も連れずに1人で？！

いくら近いとはいえ、この世界に飛行機などあるはずも無く。

移動手段は、もっぱら馬と船。

信津からこの光明まで、海路で直接、それも休憩無しで来ても1日はかかるだろう。

この世界の船は人力なのだ。

いくら海を挟んで隣の国、といっても、日本の端から端ぐらいは離れている。

「知り合いの商人の船に同船させてもらったのですよ。仕入れのため、一度こっちへ戻る、と言っていたので」

私の驚きなどまるで無視して、さも当然のように言う皓孝様。

いくら知り合いとはいえ、単身で商船に乗り込み。

あまつ、他国に来るとは・・・。

——行動力があるというのか、単なる無鉄砲なのか・・・

さすがに遼東様も、どう返して良いのか悩んでいるようで。

まあ、さすがにこんな返答が返ってくるとは思わなかったが。

「お一人で商船など・・・危険ではないのですか？」

「慣れていますので、大丈夫ですよ。下手に共をつけて皇家の船を出した方がよっぽど危険なので、問題は無いですね」

私の問いに、そう言う皓孝様。

副官もその事には何ら疑問をもっていないようなので、本当に日常的に行われていることなのだろう。

——しかし、皇家の船のほうが危険・・・？

この世界では、戦争というものが無い。

国家侵略、国土拡大、占領殖民地、などという概念自体がないのだ。

だから、他国から狙われて、という危険はないはずだが・・・。

「海賊でも出ましたっけ？」

考えられるのは、盗賊の類だが。

それも、危険視するほどのものではないと思っていたが？

「いえいえ。海賊などはありませんよ。問題は、ただ1つです」

「1つ？」

「ええ。ウチには、何をしでかすか予測のつかない低脳なモノが居ますので。船など出せば・・・ね？」

ふふふ、と。

それはそれは素晴らしくキレイなエガオで説明くださる皓孝様。みなまで聞かなくても、正しく理解できるその説明に。

——曖昧な笑みを返す以外にどうしろと!!

顔の筋肉が引き付けを起こす絶妙なタイミングで安丹殿が毛を發した。

「皓孝様、どうしてこちらへ？」

突然の訪問を、この副官も知らされてはいなかったらしい。さすがに皓孝様に慣れているのか、今までの会話に何一つ動じることのない副官はスゴイと思う。

困惑顔の安丹殿の問いに、皓孝様は素晴らしい笑顔でおっしゃった。

「決まってるだろう？ バカ2匹を捕獲しに来たのさ。これ以上身内の恥を晒しておけないだろう？」

——その笑顔が眩しい・・・のに、黒く見えるのはなぜだろう・・・

「皓孝様自らが、ですか？」

「ほかに、あのバカを捕獲できる奴がいるか？ 首に縄掛ける前に脱走されて終わるだろう」

安丹、できるか？ などと言う皓孝様に。遼東様はポカン、としている。

安丹殿が普通に対応しているから、これが皓孝様の普通なのだろ

う。

——えらく個性的だな・・・ 個人的には好きな分類の人間だが。

信津の皇子は2人。

皇太子であるあのバカ皇子と、この第二皇子。あと確か、一番下に皇女が1人いたはずだ。

それほど国交も盛んではないため、華月の知識もその程度しかない。

この皓孝様を生前の華月が知っていれば、さぞ馬が合ったことだろう。

「皓孝様、申し訳ありませんが、私はこれで失礼させていただきます。後のことは、華月にお申し付けください」

安丹殿との話が一通り終わった頃を見計らい、遼東様が退席を申し出る。

に、逃げる気だ・・・

「元首殿、失礼いたしました。この度は数々のご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした。また、的確なるご配慮を賜りましたこと、信津を代表し御礼申し上げます」

席を立った遼東様に、皓孝様も立ち上がり礼を取る。
何事か話しながら入口まで行き・・・

「では華月。後は頼んだよ」

いつもの穏やかな笑顔で全て華月に押し付け、退出された。

——いーやー！！ いかないでー！！

やりたくない気持ちもわかるけど！！
関わりたくない気持ちもわかるけど！！

だけれども！！

華月にスベテを丸投げしていなくてもいいと思うのよ！！
あのバカ皇子とは違う意味で関わりたくないのは私も同じだし！！
むしろ私が逃げたいし！！

無理だけどねっ

声を出して言うわけにはいかないので、心の中で絶叫して。
ついでに文句も一通り言ったところで、席に戻った皓孝様と目が
合った。

——うん、素敵な黒い笑顔が良くお似合いです。

顔の造形は良いのに。
むしろ、美形なのに。

その顔に張り付いた笑顔が、スベテを物語っている。

このヒト、素晴らしいぐらいに腹黒だ。
もう、真っ黒だ。

裏表とかのレベルじゃないほど真っ黒だ。

うかうかしてたら、あつという間に飲み込まれそうな黒さだ。

ブラックホールも裸足で逃げ出すんじゃない？ ってぐらいだ。絶対。

「さて、華月殿。これからの事を少々ご相談しても？」

優雅な動作で、副官が淹れたお茶を飲んで。

ニツコリと、悪魔が微笑んだ。

逃げ道は無いので、腹を決めますかね。

22・華月7

「まずは、こちらにお邪魔しているバカ2匹ですが」

身もふたも無い皓孝様の言葉に、色々諦めの境地です。

一応、自分の兄だし。義姉だし。なにより、皇太子だし。と、思
ってはいるが。

それを言葉にするほど、私は愚かではなく。

なにより、言った所で言葉を改めるとは思えない。
――が。

「バカ2匹、ですか・・・？ 楽相様と湖李様、ですよね・・・？」

それでも一応言ってはみる。

まあ、体面は大切だし。

「他にどれが？・・・ああ。今更言葉で取り繕ったところで、何
も変わらないでしょう？ 的確に相手を表せれば、呼称などなんでも
良いのですよ」

うん、やっぱり無駄だった。

私も、バカ皇子、と心の中では呼んでいたが。

まさか、こうもハッキリ言う人がいるとは思わなかった。

それも、弟だし。

どんな家庭環境なんだ、と突っ込みを入れたい。

「で、バカ2匹ですが」

「はい」

入れないけどね!!

「大変申しわけございませんが、明後日の午後まで、こちらで捕縛しておいていただけますか？」

サラツと捕縛と仰いましたね、今。

人権無視ですね、やっぱり。

「それは構いませんが・・・ 詳しい予定をお伺いしても？」

明後日であれば、当初の滞在予定の3日目にあたる。

そこまではこっちも用意ができていますので、何の問題も無い。

「本日、バカ義姉の荷物を信津に向かわせます。その荷の到着が明日の深夜から明後日の早朝。到着後の荷解きと後宮の支度、諸々の準備に1日。私が国を出る特に、対外的措置は終わらせてありますので、バカどもの到着後すぐに婚儀を挙げさせます」

その時間だけここで稼がせて欲しいと言う。

しかし・・・

「この短期間で、そこまでの準備を終えられたのですか？」

「あのバカが出国して、すぐに準備はすすめていましたから」

事も無げにそう言う皓孝様。

「皇太子殿下が外交として国を出て、仙磨に着くまでに20日ぐら

いでしょう？

その頃から準備を進めていたとしても、第三皇女殿下の同行というのは不測の事態だったはず。ソレを考慮して、あと10日ほどの準備期間が必要、と思っておりました」

それが、既に皇女の荷を受け入れる体制まで整っている、というのだから驚きだ。

「・・・なるほど。安丹が言うように、華月殿は優秀な方だ。実を言えば、安丹から逐一報告を受けていましてね。あのバカが華月殿にした愚行も、それを収めた華月殿の手腕も承知しているのです。だから、その報告がきた段階で準備を急がせ、仙磨側に使いを出したんです」

仙磨国に、皇女殿下の受け入れ準備が既に整っている、と使いを出していたらしい。

これをする事によって、信津国は仙磨国の皇女殿下を待っている、ということ公示したことになり、仙磨側は何としても皇女を送り込まなければなくなる。

一方、信津側にしても、万が一バカ皇子が湖李様に惚れなかったとしても公示した事で後には引けず、湖李様を皇太子妃に迎えなければならなくなる。

「それですと、この度のお見合いが失敗した時のリスクが高すぎるように思えるのですが？ あくまで、お互いが見初め合う事が望まれていた、と伺いましたが」

「それが理想系、というだけです。我が皇帝陛下は甘いお方ですね。政治的攻略婚にもお互いの愛が必要なんだそうです。だから、今回の茶番が企画されたんですよ」

所詮は政略結婚なんだから、皇族の義務だとお互い諦めれば済んだのに、と言う皓孝様。

間違っちゃいないが、こうまで言い切れるのも素晴らしい。

「さすがに、あのバカが華月殿を望んだ、と聞いた時は焦りましたが」

「・・・公表は、万が一にも私が了承した時の保険、ですか？」

「ええ。幸い、我国には側室制度はありませんので。安い保険料で済んでホッとしています」

澄まして言う皓孝様に。

ニコリ、と笑って返せば。

ニヤリ、と笑って切り返された。

——あのまま華月が了承していれば、皓孝様は華月を潰しただろうなあ

そんな予想ができるほど、皓孝様は容赦が無い。

自分の思惑を実行できるだけの実力を、自身が持っていることを正しく理解しているからこそそのモノだ。

「最終的には、楽相様の気持ちも湖李様の気持ちも無視して、皇族の務めとして結婚させればいい、ですか」

「本来皇族とはそうであるべきでしょう。国のことを考えなければならぬ身です」

「そこには、勿論ご自身も？」

思わず聞いてしまった問いに、皓孝様は器用に片方の眉だけあげ

た。

「考えるだけの知能があれば、采配は自在でしょうに」
「・・・・・・・・なるほど」

「―――要するに、自分はあくまでも使う側だ、と。」

華月とは違う意味で最凶だなあ・・・

「貴国側の予定を伺っても？」

「安丹殿から先に書状を頂きましたので、取り合えずは本日より3日間の滞在は予定しておりました。先ほどの皓孝様のご予定通りであれば、当方は何の支障もございません。勿論、皓孝様のお部屋もご用意いたしますのでご滞在ください」

こちらの問題は何も無い旨を伝えれば、何故か私案顔の皓孝様。何かマズかったか？

「華月殿」

「はい」

「その、『皓孝様』はやめていただけますか」

「・・・・・・・・はい？」

「ですから、やめていただきたいのです」

「・・・・・・・・第二皇子殿下？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

うん。なんだかイヤな予感。

「できれば、敬称無しで『皓孝』と」

おまえもかー！ー！！

22・華月7（後書き）

・・・いや、ちゃんと、理由があるから。
皓孝様はおバカじゃないから、多分。
うん、きつと・・・。

23・華月8

夕刻、大広間。

信津の皇太子殿下とその婚約者である仙磨の第三皇女殿下を迎え、歓迎の宴が催される会場。

光明側の出席者である主だった議員とその補佐官たちは既に会場入りを果たし、主賓たちの登場を待っている。

そんな中、その主賓を迎えに来たのだが……。

「こ、ここ皓孝！！ どお、どうしてオマエがここに居る？！ それに、どうして華月が隣にいるんだ！！！！」

「やああんっ かげつうくく」

バカ皇子……もとい、楽相様をお迎えに部屋にこれば、そこには既に用意を済ませた湖李様も居た。

手間が省けたな～と思うのもつかの間、弟の姿を認めた楽相様は凄い勢いで後ずさり、湖李様は凄い勢いで華月に抱き着いてきた。

———なんだあ？

予想のはるか斜め上に行く楽相様の反応に、首をかしげる。

え？ 湖李様？？ そんなんは、見ないフリです。

「ご挨拶ですね、兄上。こうしてお迎えに上がりましたのに、そん

な反応を返されるとは・・・」

ふう、とわざとらしく溜息を吐き、にやり、と笑う弟に。
楽相様の顔色は、だんだんと無くなっていく。

——この兄弟の力関係がよくわかる反応だ・・・

「・・・こうこう??」

やっとその存在に気付いたのか、華月に抱き着く力を緩め、湖李様が視線を向けた。

「これは、義姉上。お初にお目にかかります。信津国第二皇子の皓孝ともうします。どうぞお見知りおきくださいませ」

完璧な動作で礼をとられ、さすがの湖李様も華月から離れて礼をとる。

「こちらこそ、お初におめもじ致します。仙磨国第三皇女湖李と申します。この度はわたくしのような不束者をお迎えくださり、感謝の言葉もございません。至らぬ所の多いわたくしですが、どうかよろしくお願いいたします」

皇女としての完璧な所作。

——しかし、それが長く続かないのが、この皇女である。

「皓孝も美しいですわぁ・・・ こうして華月と並んだまま、あたくしのお部屋に飾りたいぐらいですわぁ・・・」

などと、うつとりと見つめられる。

「や、やめておけ湖李！！ そんなモン飾ったら、崇られる！！！」

いまだにかなりの距離をとったまま、楽相様が喚く。

その視界に弟を映さないようにしながら。

それはもう、面白い・・・げふん。カワイソウなぐらいに青褪めて。

———どんなけ嫌われてるんだ・・・ 一体どんな兄弟関係だよ・・・

・

「お言葉ですが兄上。私は崇るような愚かな真似はいたしませんよ。それよりも、いい加減になさってください。光明国の皆さまがお待ちです。会場へ移動しますよ」

言いながら、1歩、楽相様に近づけば、

「く、来るな皓孝！！ 私は華月と共に行くんだ！！」

と言いながら1歩後退する。

2人の距離は変わらない。

「どうして“ユエ”と行くんですか。兄上が共に行くのは義姉上です」

「……ゆえ？」

聞きなれない呼称に、楽相様がピタリと停止する。

「ほら、兄上。こちらへ」

そんな楽相様を無視して、腕をつかんで湖李様の元へ引っ張って。
華月の隣に並んで。

「では“ユエ”、行きましょうか」

「ええ、“ハオ”。では、楽相様、湖李様、ご案内いたします」

ニツコリ笑って、先導する。

視界の端に映った安丹殿の顔色の悪さに、心の中で合掌。

だがしかし！！

——私だって嫌なんだ——！！

時は遡って2刻程前。

皓孝様の突然の発言に思わず思考が停止した。

「・・・そのようなことは出来ません」

「そうですね、そのままだとあのバカドモが煩いか・・・」

「いえ、そうでは・・・」

――人の話を聞け――！！

と怒鳴れたらどれだけいいか。

1人で何やら考え込んでいる皓孝様に、取り敢えず説明をいただく事にする。

「まずは、突然のご要望の理由をお伺いしても？」

落ち着けくと自分に言い聞かせながら、皓孝様を見つめる。

「ああ・・・。失礼をいたしました。バカ2匹は華月殿にいたく執心とか。このままですと、帰国の際は華月殿の同行を望みかねません」

「・・・ご冗談を」

「だと、いいんですがね。バカは常識無視ですから。自分の欲求にのみ忠実でして。ウチのバカ1匹でも手を焼いておりますのに、今回は2匹に増量です。あらゆる可能性を考えた方がいいのです」

さすが身内。言葉に重みがありすぎてぐうの音も出ません。

「ですから、バカ2匹がそんな気を起こさないようにする必要があります
ります」

「それで？」

「ウチのバカは私が躰^{しつげ}済みですので、私の気に入った者に手は出さないんです」

ニツコリ笑って何言いやがりますかね、この悪魔は。

躰^{しつげ}つつーか、調教の間違いでは?! とは口には出しませんよ、ええ!!

「それで・・・?」

「華月殿は、私のお気に入りで、とあのバカに知らしめればいい。それには、バカにも判りやすく呼び捨てていただく、と思ったのですよ。私を呼び捨てるなど、家族以外には許していませんから。それが一番判りやすい」

——ああ、そこに繋がるのか・・・

しかし・・・

「でも、それですと、湖李様には有効ではありませんでしょう?」

バカ皇子が調教済みでも、湖李様は違うだろう、と言えば。

「大丈夫ですよ。私と華月殿が並んでいる姿を気に入れば、あのバカ義姉は満足するでしょう。所有にこだわりの無いそうですから」

要するに、華月単体よりも、皓孝様とセットの方が湖李様のお気に召すだろう、と。

どんなけ自分に自信があるんでしょうね、この男は。

それでも、皓孝様の言わんとすることは納得できる。

漆黒の豊かな髪を腰まで伸ばしたロングにコバルトブルーの大きな瞳。意志の強さを表すその顔はキツめだが整い、均等の取れたグラマラスな肉体を持つ華月と。

ストレートのセミロングを低い位置で1つに結わえ、左肩から前に垂らしている髪は薄茶色。同色の瞳は知性にあふれ、その瞳を隠すように掛けられたメガネがストイックな雰囲気醸し出し、万人が美形と認める顔の造形。高すぎず低すぎずの身長に、ほど良く筋肉のついたバランスのいい肢体の皓孝様。

単体で見れば嫌味だが、並べばどちらも主張しすぎることなく違和感もない。

これなら、湖李様のお気に召すだろう。

「・・・わかりました。私も、貴国へ同行、というわけにも参りませんので皓孝様がお考え頂ければ助かります」

「ご理解に感謝いたします。私も、これ以上手を煩^{わずら}いたくは無いで」

ニッコリお互い微笑み合って。

次の議題に移行した。

さて、今は大広間に続く廊下。

先導する私たちの後ろには、楽相様と湖李様。

その後ろには、安丹殿と侍従たち。

「ねええ、皓孝。どおして華月がユエですのお？」

楽相様と腕を組んで歩く湖李様の問いに、皓孝様・・・いや、ハオが声に笑みを乗せて答える。

「我が皇族に伝わる古い言葉で、華月は『ファユエ』と読むんです。ですので、その1字から、ユエ、と愛称で。これは、我が皇族では親愛な者にのみ許される風習でして」

「きやあつ 素敵ですわあつ では、華月をユエ、と呼べる者は皓孝だけですのねえ！！ では、華月が皓孝をハオ、と呼ぶのもそおなのかしらあ？」

「はい、義姉上。皓孝は『ハオシアオ』と。ですから、ユエはハオと愛称で私を呼んでくれています」

「まああつ いいですわあつ お互いのためだけだなんて、なんて素敵なのかしらあ」

何がそんなにお気に召したのか。

異様に盛り上がる湖李様のテンション。

「いつの間に華月と皓孝が仲良くなったんだ・・・」

そして、ナゼか異様に盛り下がる楽相様のテンション。

「兄上だって、義姉上とすぐに『仲良く』なられましたでしょう？ 私とユエがそうだとして、何の不思議がありませんようか」

声だけ聞けば、物凄く穏やかなのに。

チラリ、と視線を向けた先に見えたその顔は、物凄く黒かった・

・。

「だからって、愛称で・・・」

楽相様が声を発することに、深くなる黒い笑顔。

口元に浮かぶ、嫌な種類の笑み。

「おや、兄上。私がやっと愛称で呼んでほしいと、呼びたいと思う相手に出会えたのです。喜んではいただけないのえすか？」

いい加減、止めに入ろうかな、と思っていた矢先に。

爆弾投下。

「仲良く、ではありませんわよ、楽相！！ 華月と皓孝は愛し合っ
てしまったのですわぁっ！！」

——だれがだ——！！

24・華月9

大広間までの道のりが、あんなに遠いとは知らなかった。

真逆のテンションのバカ2匹をなんとか会場入りさせて、始まった宴。

変な方向に湖李様が気を使ってくれたおかげでバカドモの世話から離れることができ、今は皓孝様と今後の手配のために会場の外に出ていた。

何かあればすぐに知らせるように、と言付けてあるので、問題は無いだろう。

「こんなにあっさりといくとは思いませんでした・・・」

停泊中の湖李様の嫁入り道具を積んだ船の出航手続きを終わらせ、次の処理に取り掛かろうと移動する中。

ポツリと呟いた華月に、皓孝様は笑った。

「だから言いましたでしょう？　ウチのバカは私には逆らいませんし、バカ義姉は美しいものが自分の視界にあればそれでいい、と」

その顔が思いのほか黒くなくて、思わず見入ってしまう。

「ええ・・・。でも、楽相様は納得していないご様子でしたか？」

誤魔化すように口にすれば、気付かなかったのか、皓孝様はそのまま会話を続けた。

「納得、ですか。まあ、してはいないでしょうね。でも、何ら問題はありませんか」

「良いのですか？」

「ええ。納得しようがしまいが、今後の予定には何の支障もありませんから。あのバカドモは、帰国すれば婚儀を上げて夫婦です。我が国には側室制度はないので、ユエの手を煩わせることはありませんよ」

のんびりと歩く廊下に響く皓孝様の声。

違和感なく隣に並ぶ皓孝様に、失笑する。

「ハオがそう言うのなら、大丈夫なのでしょうね」

今だけの愛称を互いに口すれば、お互いの距離感が無くなる。

何処で誰が聞いているかわからないため、いくら2人きりでも愛称で呼ぶように決めたのは、ほんの1刻程前。

にも拘らず違和感がないのは、ひとえに特別な感情が無いためだろう。

「湖李様の侍従は、何人ほど残すのですか？」

今向かっているのは、湖李様の部屋。

今後の予定を伝えるために、侍従たちと会う段取りになっていた。湖李様の侍従責任者は、湖李様の乳母。

今回の輿入れに同行した、侍女10人と下働き20人をまとめ上げている。

「侍女2人で十分でしょう。あとは信津に向かって準備に入っても

らう予定です」

「乳母殿は？」

「勿論、先に信津へ入っていただきますよ。でないと、仙磨の方々を指示するものが居なくなってしまう」

先に荷物を送り、整えるのであれば、現場を指示する者が必要不可欠だ。

それにはやはり、仙磨の者であるべきだし、ある程度の経験者であるべきだ。

それに、今回は婚儀の準備まで同時に行わなければならない。

と、なれば、上手く采配し、かつ迅速に処理できる者が好ましい。

言いたいことはわかるが。

「湖李様のお世話は？」

問題は、湖李様のお世話だろう。

たかが侍女に、あの方がお世話できるのか。

「大丈夫でしょう。今回の同行者の中には、乳母殿の娘も侍女として来ています。その者を残せば、信津に入る5日ぐらいは問題ないでしょう」

なるほど。

乳姉妹が侍女であれば、湖李様を上手く御すことも可能だろう。

そんなことを言いながら、乳母殿に会い。

今後の説明と、信津に先に向かってほしい旨を説明し、仙磨側の説明を託して会場へ戻れば。

「何、この地獄絵図・・・」

目の前には、目を覆いたくなるほどの光景。
阿鼻恐慌の地獄絵図。

——ここは地獄か冥界か？！

「ふふふふふ・・・」

あ、魔界かも。

華月の隣に、悪魔降臨。

「ハオ・・・？」

恐る恐る声をかけるも、反応なし。

この状況に、何か思い当たる節があるようだが・・・

「あ、安丹殿」

くると辺りを見回せば、死屍累々の中に安丹殿の姿を発見。
楽相様の侍従長と折り重なるようにして屍になっている。

その周りには、他の侍従たちが同じく屍と化しており、その横には、仙磨の侍従たちが見るも無惨に放置され、ぐるりと囲むように今度は華月の同僚、光明の補佐官達。――で、次は……。

「お、皇子殿下、おやめくださいいいいいっ」

「皇女殿下、お気をたしかにいつ」

「なにをいう〜 ほおら、のめええっ!!」

「そお〜ですわああ!! おのみなあああいつ!!」

必死の形相で逃げる光明の現職議員たちと。

酒瓶を両手に、迷惑う議員たちを、満面の笑みで追い掛け回すバカ2匹。

この地獄絵図の製作者は、このバカ2匹らしい。

『ひいいいいいいっ!!』

「つ〜か〜ま〜え〜た〜ぞ〜!!」

「ほおおらあ、おのみなさああい!!」

この世の終わりのような悲鳴と。

破壊神の声が響いて。

お互い両手に持つ酒瓶を、獲物の口に1本ずつ押し込み、問答無用で流し込む。

窒息の恐怖から、獲物たちは流し込まれる酒を飲むより他の選択肢は無く。

結果、屍のように動かなくなった。

こうして、哀れな子羊（にしては歳が行き過ぎているが）たちは、

この地獄絵図を彩る屍に加わった。

『うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ』

獲物を獲得して上機嫌の破壊神たちの笑い声が響く中で、ブチン、と何かがキレる音を聞いた。

そして。

「こ……の……バカドモがあつ!!」

悪魔が、魔王に変身した。

——私、退場希望なんだけどなあ……。

25・華月10

魔王降臨で片付いたあの地獄絵図。

地獄絵図製作者の破壊神・・・もといバカ2匹は、魔王の手によって部屋へと強制送還され。

華月は大広間の片付けを請け負った。

出席していなかった補佐官達と、官舎に詰めている者たちを呼び寄せて屍の介抱をさせ、下働きの者たちに会場を片付けさせる。

一通りの手配が済めば、華月は退場・・・というわけにもいかず、魔王・・・ではなく皓孝様の元に向かう。

破壊神と化したバカ2匹を、皓孝様は眠らせ・・・かなり出来上がっていた2人に、追い打ちをかけるようにかなり度数の高いお酒を一気にあおらせた。

コト切れたように意識を落とした2匹を片手でヒトマトメにし、引きずっていった。

そのときの皓孝様の顔は、絶対夢に出てくるだろう。
悪夢に違いない。

地獄絵図よりも皓孝様の魔王っぷりの方が恐怖だったのは私だけが知っている・・・

「ハオ、入ります」

楽相様の部屋の扉をノックすれば、中から皓孝様の声。

さすがに落ち着いたらしいその声音に、ホッと安堵。

——魔王謁見とか勘弁だし!!

「ユエ。後かたづけを押しつけてしまつて申し訳ありませんでした」

中に入れば、ベッドに楽相様を寝かせ、その傍らに腰掛ける皓孝様の姿。

一見穏やかに見えるその光景だが、楽相様が簀卷すまきにされているのは見なかったことにしよう。

「それはお気になさらず。侍従の方々も、お部屋にお送りするよう
に言っておりますのでご心配なく。それより、先ほど湖李様の乳母
殿にお会いしましたが・・・」

今頃は信津に向けて出発しているはずの湖李様の乳母殿。

その乳母殿が、湖李様の介抱をしていた。

これでは、皓孝様の予定が狂ってくるのでは、とさかも心配している風に聞いてみる。

本音？ そんなの、これ以上厄介事を増やすな、に決まってるじゃないですか。

「知っています。どうも、あのバカ義姉もこのバカと同じく酒乱だ
そう。乳母殿でないと介抱できないそうです」

だから、仕方なく残すはずだった乳母殿の娘を行かせたのだと言う。

この皓孝様の機嫌の悪さは、どうやらあの地獄絵図だけでなく、自分の予定が狂わされたのも原因の一つらしい。

しかし・・・

「酒乱、ですか？」

「ユエも見たでしょう？ 酒乱です」

簀巻きになっている楽相様の頭をポカリと殴り、
ついでにグリグリと力を加える。

「ぐふう・・・」

「うるさい」

「ぐえっ」

枕で顔を押さえて、肘置きの完成・・・。
魔王様はご機嫌斜めのご様子デス・・・。

「さて、今後の予定の変更ですが」

結局、そのまま気を失うように眠った楽相様をあのまま放置して。――もちろん、顔全体を覆う枕もそのままですよ？

今後の予定の確認をもう一度行うために皓孝様のお部屋に案内がてらお邪魔した。

「やはり、変更が必要ですか？」

できれば滞在延期はやめてほしいな、とは言いませんが。思うだけなら許される、ハズ。

これ以上の面倒はさすがに勘弁だ・・・。

「多分、信津の準備が間に合わないでしょう。そして、あのバカドモが出国できないと思います」

そりゃ、あの泥酔っぷりなら、明日は確実にベッドとお友達だろう。わかってはいたが、きっぱり言われて、落胆する。やっぱりね、とは思うが。

できれば、聞きたくなかった・・・

「では、どれほど期間を延ばしましょう？」

内心を見せずに事務的に答えれば。

「まだ未定、ですね。もしかしたら、間に合うかもしれないですし。もし間に合えば、箱に詰めてでもバカドモは連れ帰ります」

「・・・鬼ですね」

考える前に口をついた感想は。
目の前の魔王様の笑顔に吸収された・・・。

——その笑顔が痛いです・・・

「そうだ、ユエ」

「はい？」

思考を彼方へ飛ばしていれば、皓孝様のどこか楽しげな声に呼び戻される。

何となく、イヤな予感。

「今日の宴に出席していたのは、光明の主要議員たちですか？」

「ええ。遼東様以外の議員は全員出席しておりましたが・・・」

遼東様は、お酒が飲めない、との理由で、最初の挨拶だけをして早々に退席していた。

事実、お酒は飲めないが、退席の理由はそれだけじゃ無いと知っている。

——面倒事全部華月^{こづち}に押しつけやがって！！

華月と皓孝様のことで盛り上がるバカドモを見て、イイエガオで退場した遼東様。

絶対に面倒事を嗅ぎ取ったに違いない。
後は任せたよ、などと言いながらフェードアウト。
あの地獄絵図を見た後では、それが良かったとは思わなくもない
が。

「では、明日は仕事はお休みですね」

遼東様に殺意を向けかけたところで、皓孝様の声。
何でだ？ と考え・・・

「あー！ー！！」

思い当たって、絶叫。
そうだ。

あそこには、現職議員が全員出席していた。
その補佐官たちも、ほぼ出席していた。
と、いうことは・・・

「議員が居なければ、仕事にならないでしょう？」

にっこり笑う、皓孝様。

政治の中枢を担う者たちがほぼ全員屍と化していた。
明日には到底回復できないだろう。

残っているのは、遼東様と、華月と、数人の補佐官。
仕事になるわけがない。

「・・・・・・・・どうでしょう・・・・・・・・」

問題は山積み。

決済したくても、できる人間が皆無。

思考回路が停止する寸前で、皓孝様がのたまった。

「あのバカドモたちは放置でいいですから、ユエは私とデートでもしましょう」

どうせ仕事にならないのですから、時間は有意義に使いましょう、と・・・

だから・・・

———なん で だ ー ！ ！

26・華月11

早朝という時間にも拘らず活気のある街の中を、皓孝様と二人で歩く。

人が多いため、はぐれないように、と差し出された手を取り歩いていたが、それでも心もとなく。

今は肩を抱かれ、朝市を冷やかしながらこの雰囲気を楽しし……めるわけあるかあっ!!

「どうしました、ユエ。人に酔ってしまいましたか？」
「いいえ、ハオ。だいじょうぶです」

いつの間にか寄っていた眉間の皺を咎められ、心配げに顔を覗かせる皓孝様に、何でもない、と笑顔で返す。

———どんな拷問だ、これ……

断ることのできなかった皓孝様とのデート。

いや、国賓だし、皓孝様だし、断れるとは思ってなかったけど!!

———遼東様のバカー———!!

すんなり承諾しなかった華月に、皓孝様は素晴らしい行動に出た。

あの発言の後・・・

「ああ、すいません。ユエが勝手に判断できることはありませんでしたね」

フリーズした華月に、そう言う皓孝様。

よし、逃げれるか?! と思ったのが甘かった。

「元首殿に許可を頂かなければなりませんでしたね。私としたことが、すっかり失念していました」

ニッコリと笑って立ち上がる皓孝様は、こちらに手を差し出し・

「ハオ・・・?」

何をするんだ? と訝しんだ華月に向かって。

「元首度殿に許可をいただきに行きましょう。ユエも、報告しなければならいでしょう?」

と、おっしやった。

皓孝様に今後の予定の変更を確認してから遼東様に報告に行こう
と思っていたため、皓孝様の言葉に頷くより他は無く。

「私からも、あの惨状のお詫びをしなければなりませんし」

もったもなその言い分に、逃げ道もなく。

「どうせですから、一度に済ませてしまいましょう」

時間の無駄はよくないですよ、と微笑まれ。

差し出された手を振り払う事が出来なかった。

——だって!! だんだんと笑顔が黒くなってくんだよ?!

連れだって遼東様のお部屋に行けば、イイエガオで出迎えてくださる遼東様。

中に、と勧められたが、時間が時間なので、と皓孝様はお断りし。あの地獄絵図の報告と、お詫びと、今後の予定と。

そして・・・

「私もこの機会に貴国を拝見したく、つきましては明日1日、政治的観点から生活水準や治安、物流や商法までご説明頂ける方を1人お借りしたいのですが」

だれ、とは特定せずに言う皓孝様に、悪魔の尻尾が見えたのは気のせいじゃないと思う!!

「ならば、華月が適任でしょう。華月以上に広い知識と深い考察を持つ者はおりませんので」

などとおっしゃる遼東様。

こっちの笑顔もだんだんとイイモノなっていき・・・

「しかし、遼東様。片付けなければならぬ物もございます・・・」

——人身御供はたまるかあっ！！

やんわりとご辞退申し上げるが。

「華月、たまには休みなさい。それに、明日の政務は摂れないだろう」

議員たちも休ませてあげなさいと言われては、それ以上続けることは出来ない。

ならば、遼東様がご説明・・・と言おうと思ったのに！！

「私のご案内申し上げても良いのですが、それですと大事になってしましましょう」

「そうですね、さすがに元首殿自ら、などとは恐れ多いですし、私もできればありのままの貴国が拝見したい」

先手を打たれた形で、敢えなく断念。

どんどん逃げ道が塞がれ、一方通行。

あれよあれよという間に話がまとまり、現在に至る、と。

「そういえばハオ。こちらへは商船でと言っていましたでしたが、どの商家だったのですか？　この国の商家ですか？」

朝市を抜け、商店が建ち並ぶ区域に入ったところで思い出した、皓孝様の入国手段。

もしこの国の商家ならば、知っておきたかった。

「ええ、光明の商家です。信津には光明の布地を卸していましたね。ユエが知らないとは思わなかったのですが、国が商家の管理をしているのではないのですか？」

あの日に港を使用した商家を把握していないのか、と問う皓孝様に説明する。

「我が国は、商業の自由があるのです。一定の納税さえしていれば、商家に対して管理することも、規制することありません。信津国では商業管理も国がしているのですか？」

光明国は、国内販売も国外販売も、商家が自由に行っている。

どこの国に何を売ろうが自由なのだ。

もちろん、一定の納税は定められているが、国がとやかく口出しすることはしない。

「信津では、国外販売は国の規定に従って、特定の許可のある商家のみ行っています。国交問題を危惧した結果ですが、光明はそのような問題はないのですか？」

「国交問題にまで発展はいたしません。他国相手に商いをする場合、その全責任において光明国は関与しない旨を契約の中に織り込ませるのです。あくまで、商いとは売る側と買う側の利害関係にのみ成立するのであって、第三者となる国は関係がないのです」

門外不出のご禁制の商品でもあれば別だが、光明国にそのような

商品は無い。

特化した製法や技術も無いので、いちいち国が関わるほどではないのだ。

「それに、特定の商家にのみ許可を与えてしまえば、その許可を巡って問題が起きますでしょう？　その方が、よっぽど国にとっては痛手でしょう」

暗に、内側からの腐敗を指摘すれば、苦いお顔の皓孝様。やはり、そういった問題はあられるらしい。

「ありますねえ。国の定めた輸出税以上のものを取り立てるバカとか、許可を金銭で買おうとするバカとか、港の使用に料金をかけるバカとか」

ふふふ、と笑う皓孝様。

どうやら、地雷だったらしい・・・

「輸出税は一定にして、納税は第三者機関に納めさせれば個人の利益による問題はなくなりましょう。許可は、一定の条件さえ満たせば誰でも取得できるようにすれば良いでしょうし、港は国の直轄にし、使用を予約申請制にすれば、不当な使用料を個人がかすことはできなくなりましょう」

あくまで表面上だけの案だが、と皓孝様に言えば、完全停止された。

おーい。

「・・・なるほど。納税の第三者機関と、港の管理機関を同じにす

れば、未納税者もわかりますね」

「そうですね。でしたら、許可を出すのもその機関に任せたらいかがですか？　もちろん、条件を決めるのも実際に許可を出すのも国の仕事になります、窓口を作った方が円滑に進みましょう」

お手本は日本の資格試験だ。

「そうすると、その機関の横領や癒着といった問題ができませんか？」

国民相手に行うのだから、国民が不利益を被る可能性があるのならばできない、とはっきりおっしゃる皓孝様は、真に皇族なのだろう。

「機関内を担当部署に分け、統括部署を置き、責任者を一定期間で入れ替えればいいのです」

風を通さないから腐敗するのです。たとえば、思い当たる節があるのか真剣に考え込む皓孝様。

「責任者が同じだから、悪事がしやすくなる、と」

「ええ。信津国の政治制度を存じませんので該当するかはわかりませんが、税務大臣が世襲制で何代にも渡り横領していたとして、誰がそれを知ることができましょうか。また、露見することがない、という状況下でしたらその横領はより狡猾に、より悪質になっていくでしょう」

どこの世界でも抱える問題だ。

「監査を入れても、わからないものですか？」

「その監査人が賄賂で動く人間でないことを祈りましょう」

完全に自分の思考に入ってしまった皓孝様。

お腹すいたな〜と思いつつも眺める。

朝市を見たい、という皓孝様の要望で、朝食前から出てきている。そろそろ、この辺の店屋に入りたい。

「華月姉？ と、皓孝様？？」

まだかなーと大人しく皓孝様を待っていれば、華月には懐かしい声。

「あら、葛西^{かさい}。久しぶりね」

「葛西殿。先日はありがとうございました」

くるりと背後を振り返り、弟に声をかければ、同じタイミングで皓孝様も声をかける。

あらら〜？

「・・・ユエのお知り合いですか？」

「弟ですわ。ハオこそ、愚弟とはどういった？」

お互い、顔を見合わせてニツコリ。

「光明までの同船をお願いしたのが、葛西殿の商船でした」

「そうでしたか。ハオのお役に立てたのならばよろしゅうございました」

「え？　華月姉と皓孝様、知り合い？？」

どこか緊張感のない葛西の声に、脱力。

——いやあ、世の中狭いわ

27・華月12

今から朝食だと言う葛西に誘われてやってきたのは、華月にとって懐かしい食堂。

まだ実家に居た頃、家族でよく利用していた所だった。

「葛西殿がユエの弟だったとは驚きました」

目の前の食事を上品に食べながら、皓孝様は言う。

（私も皓孝様と葛西が知り合いだったとは驚きました）

「僕も、まさか皓孝様が華月姉の恋人だったとは・・・」

じい、と華月を見ながら頬を染める葛西。

（いやいや、恋人だなんて、そんな恐ろしいこと言わないでくれたまえ弟よ）

「まだ、恋人ではありませんよ。誠心誠意口説いているところです」

にっこりと笑う皓孝様。

（謹んでご辞退申し上げます、皓孝様。口説かないでください）

「華月姉、まだお返事してないの?! もったない・・・」

皓孝様のどこが不満なの、と言う葛西。

（君は皓孝様のどこを見てそんな発言をしてるんだい？ お姉さんに小一時間ぐらい説明してみなさい）

「おや、葛西殿は賛成してくださるのですか？」

嬉しいですね、と言う皓孝様。

（悪魔の尻尾見えてますよ、皓孝様）

——って、どんな新喜劇よ、コレ！！

心の中の突っ込みにも疲れて現実を直視しても、いっこうに変わらない。

にこやかに進む朝食の席で、色々なモノがゴッソリと削られた。
美味しいはずの食事の味もわからないのは問題だと思う。

実家の商店を手伝っている葛西は、昨年から単身で信津国に商売に行っていたという。

実家は主に布地を扱っており、たまたま市場調査に出ていた皓孝様の目に止まり、以来懇意にさせていただいている、ということだった。

——うそくせえ・・・

第二皇子が自ら市場調査とか。たまたま目にとまった、とか。

あり得ないでしょう、普通。

先ほどの皓孝様の話だと、商人も国が管理している、ということだった。対外的商売を管理しているのなら、対内的商売も管理しているはずだ。

ならば、信津で商売をしようとすれば、信津国に対して許可申請

をする必要がある。

その許可をどういった手順で誰が出すのかはわからないが、皓孝様の目に触れない、というのは考えられない。よって、たまたま目に止まった、ではなくわざわざ目に止めた、もしくは確認にきた、と考えるのが正解だろう。

聞けば、葛西の信津での評判は上々。わざわざ指名で商品を注文する貴族までいるそうだ。

——そんな商人を皓孝様が放っておくはずないわよねえ・・・。

皓孝様の公的地位は信津国第二皇子。

しかし、皇太子がアレでは、実質公務を行っているのは皓孝様だろう。

皇族が最高責任者である信津国では、政治も皇族が摂っている。よりよい統治をするには、自身の目で市井を確認するのが一番良い。

皓孝様はそれを行ってきている事が、先ほどの会話で伺えた。

「華月姉、どうして皓孝様にお返事しないの？」

「身分が違いすぎるでしょう？ 皓孝様は第二皇子殿下。私は商家の出。滅多なことを言うものではないわ」

責めるような視線で問うてくる葛西にやんわりと言えば。

「ユエはそんな事を気にしていたのですか？」

さも驚いた、と言わんばかりの皓孝様。

「そんな事、ではありませんでしょう？ 政略結婚も皇族の義務だ、とおっしゃったのはハオです」

言質を盾に回避を試みる。

「考えるだけの知能があれば、采配は自在、とも言いましたでしょう？」

回避失敗の予感。

「いくらそうでも、ハオが皇子殿下であることは変わりませんわ」

だがしかし！！ 諦めずに再試行。

「ああ・・・。ユエにはまだ言っていないませんでしたか。私は宰相になることが決まっていますですよ。それに、あのバカが結婚すれば継承権を放棄しますしね」

にっこりと笑う皓孝様。

隣で、瞳を輝かせる葛西。

「宰相、ですか？ 皇弟ではいけないのですか？」

宰相となり継承権まで放棄すれば、皓孝様はあのバカ・・・楽相様の臣下に下ることになる。

どうも、皓孝様のイメージではないのだが・・・。

「皇族などになって矢面に立つなど、愚者のすることでしょう。国を動かすには、宰相の地位が一番いいですよ。矢面に立つ事無く好きに采配できるのですから」

納得。

皓孝様らしい理由ですこと。

「ですから、ユエ。心おきなく私の妻になってください」

「ほら、華月姉！！ お返事して！！」

どこまで本気かわからない皓孝様（きっと全部本気なのは気づかないフリでお願いします）と、異様に盛り上がる葛西。

「色々な過程を飛ばしすぎですわ、ハオ」

冗談として受け止めたことにして、この場は流そう計画です。もちろん、笑顔も忘れません。

「私としたことが。まずは、恋人になっていたただかなくてはいいけませんでしたね」

対する皓孝様は、真剣な顔で迫ってきます。
手を握るというオプション付きです。

——観劇としてなら面白いんだろうなあ……

などと現実を直視したくないので思考を明後日の方向に飛ばしつつ、皓孝様を観察。

どうやら、本気らしいのはその雰囲気よりも瞳で知ることができた。

この短い期間に一体何があったのか……。皓孝様との会話を思

い起こしても、該当項目がないような気がする。

まあ、これも皓孝様のお遊びのうち、という可能性もあるわけだが。

「あゝ、お邪魔のようですから、退散します。華月姉、ちゃんと皓孝様にお返事してね。皓孝様、また5日後から信津国で商いさせていただきます」

食後のお茶までしつかり済ませて葛西が声をかける。

お邪魔のようだから、などと言っているが、店にでる時間なのは明白で。ちゃっかり挨拶のついでに次回の商売予定も知らせるしたかさに呆れる。

「ええ、葛西殿。婚儀のために他国のお客様もみえますので、商品は多めの方が良いかもしれませんよ」

「へえ、婚儀ですか。では、華美な物を揃えて商いさせていただきます」

ニヤリと笑う皓孝様に、同じくニヤリと笑う葛西。皓孝様は自国の経済の潤いに、葛西は自分の商売繁盛に、お互いの利害が一致した瞬間だ。

——葛西^{おとうと}よ、キミはいつからそんなにしたたかな商人になったんだい？

華月の記憶では、華月の後を追いかける可愛らしい弟の姿しかない。

こんな商魂逞しく育ったとすれば、華月もビックリだろう。

「では、失礼します」

礼儀正しく頭を下げて席を立つ葛西を見送って、まだ握られたままの手にため息を一つ。

「ハオ、私たちも行きましょうか」

「そうですね。次は、店舗を見て回りましょう」

握られた手は離してもらえたが、今度は腰を抱かれて。
デート再開と相成りましたとさ。

——諦めろってか？

27・華月12（後書き）

いつからだって？

それは、小話集『ま、華月は初めから狙われていたということだね。
』をご覧くださいませ。（宣伝）

28・華月13（前書き）

アルファポリス様『ファンタジー小説大賞』エントリー中。
応援よろしく願いいたします！

期間…H23.9.1～H23.9.30

「これなんかどうですか？ ユエによく似合いますよ」

「せっかくですけど、付けていく所がありませんわ」

「では、こちらなんてどうです？ これぐらいなら普段使いで十分でしょう」

「私には派手すぎませんか？」

「何を言います。これぐらいでないとユエにはふさわしくありませんよ」

いちゃいちゃべたべた。

そんな効果音が聞こえてきそうなやり取りを装飾品屋でする。

腰を抱かれたままの体勢で、目の前に並ぶ髪飾りを華月の髪にあてる皓孝様。

端から見れば十分バカップルの行動だろう。

食堂を出れば、朝市が終わり店屋が開店しだす時間に差し掛かっていた。

商店が建ち並ぶ商業区域に入ればちらほらと開いている店舗も目立ち始め、その中の一つであるこの装飾店へと足を運んだ。

装飾店を選んだのは、この光明の物流の説明に一番適していたためであって髪飾りを買うためではない！！ と声高に・・・

「やはり、これにしましょう」

宣言できるはずもなく。

辞退した髪飾りを手にさっさと会計を済ませてしまう皓孝様。

「失礼。この席を少々お借りしても？」

ネックレスやら指輪やらが飾られるケースの前に用意されていたイスを示して、皓孝様は店員に声をかける。

話しかけられた店員の女性は、頬を染めてコクコクと頷いた。

「ユエ、ここに腰掛けてください。ああ、私に背を向けて、この鏡を見ていてくださいね」

促されるまま座って言われたとおり鏡を見ていれば、髪に伸びる皓孝様の手。

警戒しながらもおとなしくしていれば、小器用に髪を結われた。梳き流している腰までの髪を高い位置で二度ほど丸めてお団子を作り、それを買ったばかりの髪飾りで飾ったのだ。

「ほら、やっぱりユエに良く似合う」

皓孝様が買った髪飾りは、二股の簪2本が銀の鎖で連なっていて、纏めた髪を両側から挟んで留めるタイプ。簪には華月の瞳と同じ色に輝く玉が揺れ、漆黒の華月の髪には良く映える配色だった。

「その髪を解くのも私の役目ですよ？」

鏡越しに目が合えば、視線を逸らすことなく耳元で囁かれた。

髪飾りを選ぶセンスといい、今の発言といい、皓孝様はよほど女性性の扱いに慣れているらしい。

——ウブな女の子なら腰砕けですわ

ちらりと後ろを見れば、顔を赤くしてこっちを凝視する女性たち。いつの間にやら増えていたギャラリーにビックリだ。

「ふふ。ありがとう、ハオ。大切にしますね」

悠然と微笑んでお礼を言えば、ちゅっと頬にキスを贈られた。きやあつと黄色い歓声とともに送られる嫉妬の眼差し。

そんなに羨ましいなら代わってやるよーと思いながら、装飾店を出る。

——ええ、もちろん腰を抱かれながらね！！

いい加減慣れてきたのでそれほど気にはならないが、視線が痛い。老若男女問わずに振り返られ、数秒の沈黙の後にざわつく。

気分はパンダだ。珍獣だ。

「光明国は、商人が多いのですね」

「そうですね。国の半分を占める中層の殆どが商人ですから、他国と比べれば多いのかもしれないですね」

そんな周囲を気にしないのが皓孝様。

興味をひかれれば立ち止まり、わからなければ質問し、とせわしない。

「こんなに商家が多いと、価格競争や販売争いが起こりませんか？」
「それは問題ないですね。販売協定というものがあって、取扱商品は自由に触れなくなっているのです。価格も、ある一定の幅でしか

設定ができなくなっていますので、価格暴落等の心配もありません」

商店街のようになっているここは、同じ商品を取り扱っている店も多い。

それを見ての疑問は尤もだが、この光明国には独特の制度がある、と説明する。

「それでは、独占販売に繋がりませんか？」

「その心配も無用です。ある特定の商家にしか扱えない商品、という物は存在しないのです。そうですね・・・」

たとえば、と説明を続ける。

「私の実家は布地を扱っていますが、布地しか扱っていないのです」「普通ではないのですか？」

布地屋が布地を扱うのは普通だ。

しかし、商家となればそれは普通ではない。

「たとえば、実家で布地を買っていただいて、服を作るとしましょう。それには、糸やボタンが必要ですね？ それらを全て実家の商家で取り扱っていればどうですか？」

「便利ですね」

「ええ、とても便利です。そして、それだけではなく、裁縫士も抱えていたらどうですか？」

「・・・ああ、そういう事ですか。一カ所でのみ全てを賄えないようにすることによって、価格の安定と消費者の分散、商家同士の繋がりと偏りを防ぎ、集中販売を抑制しているのですね」

さすがに頭の回転の早いことだと感心する。

皓孝様が次期を継承すれば信津国は繁栄するだろうに。

「そうです。生産、販売、製作が一カ所で出来てしまえば、消費者はそこに集中してしまう。そうすれば、価格氾濫が起きて、経済は不安定になる。それを抑制するために、分散販売を行う。そのかわり、販売商品の制限を行い、生産、製作、販売者の利益確保、そして消費者の価格の安定と流通を確保しているのです」

需要が安定すれば供給も安定する。逆もまた然り。

とはいっても、消費者がどの商家で買い物をするかは自由であるから、経営状態は各商家によって違っているのだが。

「我が国にも取り入れたい制度ですね・・・」

真剣に考え込むその姿は統治者そのもので。

自国に取り入れるに当たっての問題点を確認しているようだった。見目麗しい皓孝様。真剣なお顔は見る者を魅了するくなどと場違いなことを考えていたのが原因か。

はたと目があつたとたん、甘く囁かれた。

「そんなに見つめられては理性がもちませんよ、ユエ」

腰を抱く腕に力をこめ、もともと無かった距離をさらに詰められ、耳元で囁くついでに、ペロリと耳朵を舐められた。

——うひゃあああああつ

さっき、皓孝様自ら結った華月の髪。

そのせいで、耳は完全露出。

そこを舐められたわけで……。

それも、歩きながら。

どんなけ器用なんですか、皓孝様！！

「ハオ、公衆の面前です」

ただでさえ注目を集めていたのに、ここで悲鳴を上げれば余計な注目を浴びる。

ドッキドキな心臓を押さえつつ皓孝様に抗議。

「そうですね」

そんな抗議をモノともせず唇を寄せてくる皓孝様。

——やゝめゝてゝ！！

「騒ぎになってしまいますわ」

だから離せ、と訴えてみるが。

「大丈夫ですよ。ここには私の身分を知るものは居ませんから」

などと言いながらも離す気はない。

いや、皓孝様の知り合いは居なくても、華月を知っている人はごまんと居るんですけどね！！

誰に見られているかわからない状況で、強引に離れることも出来ず。

——傍目には合意に見えるんだろうなあ・・・

なんだかとっても嫌な予感を抱えつつ。おとなしく皓孝様の腕の中。

意外と筋肉ついてんなうと思いつつ周囲を見回して状況確認。

——うん、むっちゃ注目の的だね!!

「ハオ、歩きづらいです。離してください」

「なぜ離す必要が？　歩きづらいのなら抱いていきますか？」

一応言ってみるが、やはり聞き入れてはもらえず。

それどころか、トンデモナイことを言っただけの皓孝様。

そこに本気を感じたのはきつと気のせいではない!!

「・・・このままで良いです・・・」

「そうですか？　遠慮しなくても良いのですよ、ユエ」

ご機嫌な皓孝様にまたもや耳朶にイタズラされて。

周囲の注目をこれでもか!!　というほど集めながら進む。

その中に、見知った顔をいくつか見つけて溜息を一つ。

外堀から埋めて、華月を手中に収めるつもりなのは明らかで。

——これ、回避ルートは用意されていますか・・・？

国が管理する資料館。

国家元首はじめ、上位議員しか入館ならびに閲覧を許されていないそこに顔パスで入る。

もちろん、皓孝様も一緒に、だ。

——あれ以上注目を集めるのは嫌だったんだあ！！

どうやら、回避ルートは用意されていない模様。

だったら自分で作ってみよう作戦その1。

とりあえず、あれ以上目立つのはやめよう。を実行中。

外堀埋められてたまるかあ！！

・・・もう手遅れなんじゃね？ というツツコミはスルーです。

「ハオ、どうぞこちらにおかけください。我が国の商法の資料をお持ちしますわ」

一応、応接室の役割を果たす所に案内してみる。

隣には職員詰め所。パーテーションで区切られているだけなので、二人きりになる、という危険性は限りなくゼロ。

「ありがとうございます、ユエ。できれば、雇用制度の資料もお見せいただきたいのですが」

「議員雇用でよろしいですか？ それとも、一般の商家雇用の法規制ですか？」

それぐらいだったら閲覧に問題はない。

「・・・一般の雇用に対し、国が規制を行っているのですか？」

「ええ。賃金や雇用形態などの最低限のものは規制しています。そうでないと、奴隷と変わらないでしょう？」

それも一緒にお持ちしますね、と言って詰め所に行けば、目を爛々と輝かせてこちらを伺う女性職員たち。

見た目は拔群だからなあ、皓孝様。

「ちょっと華月さんっ！！　だれだれ、あの超美形！！」

「華月ちゃんの彼氏ってホント？！」

「華月さまの隣に並べる男の人って初めてみましたあゝゝ！」

大興奮の女性職員たち。

一応声は落としているが、たぶん意味はないだろう。

「国賓です。信津国第二皇子殿下皓孝様。失礼の無いようにお茶だしをお願いします」

「「私が行く！！」」

誰でも良いよ・・・。

資料館職員と議員補佐官では、補佐官の方が上位に当たる。よって、この職員たちよりも華月の方が偉いハズなのだが・・・。

女は遅しい・・・。

「第二資料室に行きます。どなたかお手伝いください」

ぎゃあぎゃあとお茶だし争奪戦を繰り広げる女たちを放置し、男性職員を振り返れば。

「「喜んで!!」」

喜色満面に起立する男たち。

美女は特だねえ、と他人事のような感想を抱きつつ。

「商法と雇用法の資料が欲しいのです。詳しい方、お一人お願いします」

誰でもいいからさっさと来い、と思いつつ詰め所を出る。

慇懃な態度だが、立場の差ははっきりとさせなければならぬ。

ここで一人を指定してお願いしては、あらぬ波風が立つ。次期議員のお気に入り、などという名誉を与えかねないのだ。

ま、どこの世界も権力者は大変なことだ。

民主政治をうたってはいるが、どうしても権力は集中する。取り入ろうという者は後を絶たず、また抱え込もうという者も多い。いかにして政治の中枢に近づくかをハイエナたちは虎視眈々と狙っている。

そんなハイエナたちに隙を見せないためにも、ハッキリとした態度をとる必要があるわけだ。

華月の場合は、それだけが理由ではないが……。

「華月様、商法の資料はこのあたりです。雇用法は裏側の棚になります。ご指定いただきましたら取って参りますが」

「ありがとうございます、資料は自分で探します。悪いのだけれど、運ぶのを手伝ってください」

どうやら勝ち抜いたらしい男性職員が丁寧に案内する中、説明に適した資料を適当に抜いていく。

あと五時間ぐらいここで時間を潰さなくてはならないが、皓孝様相手なら大丈夫だろう。

「華月様、あの方はどなたですか？ 一応、閲覧規制の資料なのですが……」

「わかっています。あの方は、信津国第二皇子殿下の皓孝様。私の責任下において処理しますから、貴方が気にかかる必要はありません」

閲覧規制、などと大それた事を言っているが、たかが法規制だ。調べようと思えば他国だろうが関係なく調べることのできる類のものだから、心配はいらない。

この男も真剣に心配しているわけではなく、華月との会話のきっかけが欲しかっただけだろう。

「第二皇子殿下ですか……。どうして華月様がお相手を？」

まさか祝宴の席で主賓どもに酔い潰された、とは言えず、昨日のことは箝口令が布いてあった。

だから、この男が知らないのも無理はないのだが……。

「皓孝様のお求めになる物のご説明を、私しかできなかっただけです。まさか、遼東様自らお相手するわけにもいきませんから」

「そうでしたか。今朝、別の職員が華月様がデートをされているのを見た、などと言っていましたので……」

淡々と言う華月に、男は明らかにホッとしたように言う。

無表情を崩すことはないが、内心舌打ちする。

やっぱり見られてたじゃないか!!

あの甘ったるい雰囲気を見られていた、というのは痛い。少なくとも、堂々として姿を見せたのは正解だった。これで、あらぬ噂はたたないだろう。

あくまで、華月はプライベートではなく仕事での接待だった、と広まるはずだ。

「これだけでいいです。応接室に運んでください」

少し多めの資料を出し終わり、資料室を出る。

男の手には持ちきれないほどの資料。華月の手には一冊の本。

まあ、この差は男女の差、ということにして。

途中にある給湯室に差し掛かろうとしたところで、がちゃんごちよんと響く不協和音。

まだ揉めているのか、と中を覗けば、案の定先ほどの女性職員たちがあーでもないこーでもないと言っていた。

「私は、お茶出しをお願いしたと思ったのですが？」

資料室に向かう前に頼んだはずだ。

お茶を入れて持っていくだけに、どれだけかかってるんだ。

「私がいたします。持ち場に戻ってください」

埒があかん、と女たちを追いつき、さっさとお茶を入れて。

「これも一緒をお願いしますね」

持っていた本を男に渡す・・・いや、両手に抱えた資料の上に置く。

私はお盆を手に、応接室へと進んだ。

――さて、これはなんだろうね？

お茶を持って入った応接室。

持ってきた資料をテーブルに置いて、男を下がらせた。

説明しやすいように、と資料を皓孝様に向ければ、ナゼか戻され。

「これでよいでしょうか？」と笑顔を振りまきながら、隣に座られた。

まあ、資料は見やすいし。説明もしやすいし。

何ら問題はないのだが。

——どおして腰を抱くんだ!!!!

華月の右側に座った皓孝様は左腕で華月の腰を抱き、これ以上の密着はできない、というほど距離を詰め。真剣に資料を見つめながらも時折華月に視線を流し、わざとらしく耳元でささやく。

ぞわぞわと這い上がる悪寒に、右半身はトリハダだ。

ここまであからさまな人だとは思わなかったんだけどなあ。

「ですから、光明では一定の生活水準を保つ事ができるのです」

「なるほど……。貧富の差、というのはやはり深刻な問題ですから、今後の課題となっていたのですが……。ありがとうございます」

「そう言っていただけののなら、私もご説明したかいました。ただやはり、国によって問題となるところは違ってまいりますので、一概にどう、とは申せませんが」

商家に対する雇用条件の法規制の説明を終えたところでの会話である。

要点だけを絞った説明に、的を得た質問。問題定義と結論と、さすがに一国の政治を統括する立場の人だ。

知識も豊富で頭の回転も早い皓孝様とのこの時間は楽しいものだ。

――が！！

やっぱりこの体勢はいただけない。

直接的に落としにかかっているな」と他人事のように確認して。何とか回避ルートを模索。

とりあえずは・・・

「ハオ、昼食にしましょう？　ここに何か用意させますわ」

そろそろ昼食の時間。

出てくるのを待ちかまえているであろう職員たちの気配を感じつつ、人目を避けることにする。

この調子だと、食事中もベタベタされかねない。それは本当に勘弁だ・・・。

「そうですね、お願いします。せっかくのユエとの時間を、邪魔されたくもないですし」

ニツコリと。

それはそれは美しい笑顔でのたまう皓孝様。

口説かれてるんだろな、とは思うわけですよ。

でもね、ほら。天然タラシって、こんな感じじゃないですか。こ

の際、皓孝様は天然タラシってことで、スルーの方向ですよ。

「用意してまいりますね」

こちらにもニツコリと笑顔を振り撒き、一時撤退。

まだまだ半日が終わったトコロ。

栄養補給して、頑張りますかね。

「今日はありがとうございました。とても楽しい一日でした」
「こちらこそ、ありがとうございました。有意義な時間でした」

夕暮れの町をゆっくりと歩く。

資料館の閉館時間手前まで論議し、帰路についた。

何とか無事に一日を終えることができて、ホッと一息。後は宿泊棟に戻って、遼東様に報告すれば終わりだ。

「今日一日ユエと一緒に街を回って、本当にこの光明国は貧富の差も身分の差も無い素晴らしい国だと知りました」

言いながら視線を向けるのは、下流家庭と分類される人々の住む家。その多くは商家に雇われ、給金で生活する人たち。

皓孝様の言うように、雇われているだけの人もそれなりの生活水準を保っている。住む家もなく路上での生活を余儀なくされたり、飢えに苦しむことはない。

「我が国は君主政治ではなく民主政治ですから、法規制が行いやすいのです。市民のための政治、が絶対条件ですから市民が困窮するような政は行えません」

貧富の差が無いのは、雇用条件を国が規制しているから。身分の差がないのは、貴族階級がそもそも存在しないから。権力者である議員も任期が決められており、世襲ではないために権力が集中する心配もない。

「それにしても、です。国のあり方が違うのですから政治の在り方が違うのも当然ですが、それでも光明国は素晴らしい」

「隣の芝生は青く見えるものですわ」

手放しで褒める皓孝様に苦笑を返す。

純粹に統治者として考えることも多かったのだろうが、皓孝様の言うように信津国と光明国では国のあり方が違う。

どちらの政が良いかなんて比べられる物ではない。

「私が宰相に就くまでに、商法だけでも整えたいですね。その時は、また相談にのってくれますか？」

「私でハオのお役に立てるのなら喜んで」

第三機関云々の話だろうな、と軽く返事をしたが。

「ありがとうございます、ユエ。貴女がついてくだされば心強い」

にっこりと。

なにやら含みのある台詞と笑顔の皓孝様に、とてつもなくイヤな予感。

——でも突っ込まないよ!!

何も言わずに取りあえずは笑顔で誤魔化して。

「楽相様も湖李様も、お加減良くなっていればいいのですけれど・・・」

違う話題をふってみる。

「ああ……。あのバカどもは寝込んでるぐらいが静かでもいいですよ。明日の午後の出発まで、このまま寝込んでいてもらいたい」

そういえば、そんなようなことも言ってたなあ……。

信津に着けばそのまま婚儀だから、それまでに復活してればいいとか。ダウンしてた方が道中も静かでもいいとか。とかとか。

無駄に広い船を使っているから、布団に転がしていけばいい、と真剣に言っていた皓孝様を思いだした。

「でも、安丹には復活してもらわないと困りますね」

楽相様の副官として同行していた安丹殿は本来、皓孝様の腹心だそうだ。お目付け役のために副官として同行させたとか。

ま、あのバカ皇子を野放しには出来ないだろうが、安丹殿もいい迷惑だっただろうなあ。

「せめて、ご本人以外の皆さまには動いていただきますと、今後のご予定もございますでしょう？」

「そうですね……。今日中に動けるようになってもらわないと、出発延期になりかねない」

私のもっとユエと一緒に居たいので、それでもいいのですが？
と言う皓孝様。

冗談じゃない、とは思っても、ニツコリ笑顔を忘れませんよ。

「婚儀のご予定もございますでしょう？ 仙磨の皆さまもお越しでしょうから、予定通りに運びませんと」

国交問題に発展してしまいますわ、と切り返して。
はた、と気づいてしまった……。

——光明国からの出席者はどうするんだ……？

本来であれば、国力を考えても国交を考えても、いくら皇太子殿下の婚儀とはいえ光明からわざわざ信津国に祝賀に駆けつける必要はない。

しかし、こっちが望まぬともこうして繋がりが出来てしまった。いくらなんでも、祝賀に行かない、というわけにはいかないだろう。

——明日の出発の際に、祝いの品だけ贈っておけばOKか……？

それぐらいで済むとは思えないが、非礼をするわけにはいかない。ええ、いくら先の非礼があつたとしても、こちらも非礼で返すなんて常識知らずはできませんよ！！

遼東様が何か手配してるとは思えないし。これも華月の仕事かぁ……？

どおしてこんなに仕事ばかり増えるんかねっ

取り敢えず、報告ついでに確認しよう、と決めて。

皓孝様と取り留めのない会話をしつつ帰路を急いだ。

「・・・はいいいっ?！」

遼東様の部屋。

今日の報告と祝賀の件の相談に訪れた華月を待っていたのは、ト
ンデモナイ遼東様のお言葉だった。

「何の冗談ですか・・・?」

「生憎と、冗談ではないのだよ、華月。そして、断る術もない」

一国の主からの正式な招待だからねえ、とのほほんと笑う遼東様。
はい、と渡されるのは透かしの紋章の入った上等な白い封筒。

恐る恐る受け取って中を確認すれば、出てきたのはこれまた上等
な淡い黄色の紙が一枚。

書かれている文字を目で追えば・・・

「あ、ありえないでしょう・・・」

脱力すらできないほどの虚無感。

なんだろう。もう、なにかっていうより、全てに負けたって感じ・
。。。

「皓孝様は何もおっしゃってなかったのか?」

「・・・もし事前に何か聞いていれば、そもそも私はここにおりま

せん。今頃外交にでも行っています」

「だろうな。たいそう気に入られたようだな、華月」

一応、国家元首——遼東様——宛になっていたこれは、既に遼東様は確認している。

わざわざこのタイミングで届いたということは、今日のデートも皓孝様の計画の内。要するに、上手く皓孝様の手の上で踊らされていたわけで。

「昨日今日での対応にしては早すぎますね……。事前にここまで用意されていたのなら、既に出席は決定事項ですか？」

気に入られて云々のくだりは軽く無視して。

もう一度、手紙に目を落とす。

何度読んでも内容は変わらないが。

「わざわざ華月を名指しで指定してきているからな。本来ならば、外務官を行かせるべきなのだが」

どうする？ と聞いてくる遼東様。

そのお顔は、とてもイイエガオだ。

行くのならば問題ないが、行かないのであれば自分で対処しておけ、といったところか。

「私の肩書では先方様に対してあまりに失礼でしょう。正式な外務官殿に行っていただくように調整します。必要であれば外務補佐を3人ほど付けます」

「いいのか？」

「・・・どちらの意味かによりますが。私の感情だけでしたら行きたくないので問題はありません。外交としてならば、多少の詭弁は

必要になるでしょうが、まあ回避可能な範囲ですね」

ふう、と溜息を吐きつつ答える。

厄介この上ない正式な信津国からの招待状。信津国の国皇陛下から光明国の国家元首宛のそれには、今回のバカ2匹の滞在のお礼と共に功^{こう}勞^{らう}者華月の婚儀への招待が綴られていた。

丁寧な文面は一見ただの『ご招待』に見えるが、その実拒否権など最初から用意されていない。

タイミングといい、内容といい、これを指示したのは間違いなく皓孝様だろう。

こんな逃げ道のない『招待状』が信津国の『普通』とは思いたくないし。

「では、華月に任せよう。どのみち、アチ^あラが望んでいるのは華月だしな」

好きなようにしなさい、と言いながら笑う遼東様は、それはそれは素晴らしいぐらいのイイエガオ。面倒事はゴメンとばかりに、華月を指定されているのを幸いにフェードアウト。
チツと舌打ちしつつ遼東様のお部屋を辞して。

「・・・皓孝様に直談判、かあ・・・？」

手にした招待状に大きな溜息。

そもそも、信津国に連れて行かれないように、皓孝様を愛称なんぞで呼び始めたハズ。

それが、何でこんなことになってるんだ・・・？

「なんにせよ、皓孝様にお会いしてから、か」

せっかく解放されたのに！！

やっと別れてきたのに！！

なんでまた会いに行く羽目に・・・！！

文句言っても仕方がないとはわかってるけど！！

覚悟を決めて、皓孝様のお部屋に向かう。

――さて。魔王様に一戦挑んできますかね。

30・華月15（後書き）

魔王様に勝てるのか？！

・・・無理じゃね？

31・華月16

向かい合う皓孝様と華月。

ニコニコと笑みを浮かべる皓孝様に迎えられ、ソファに促されるまま腰を掛けて数分。

さてさて、意気込んで来たものの、いざ皓孝様を目の前になると尻込みしてしまうのはなぜか。

——この笑顔が黒いからに決まってるうつっ!!

「ユエ、どうしました？ 何かご用だったのでしょうか？」

にこにこにこにこ・・・

うつつくしいお顔に、うつつくしい笑み。

だが、騙されてはいけない!!

皓孝様の目は笑ってなどいない。

「ええ・・・。お部屋にまでお邪魔してしまつてごめんなさい、ハオ。お伺いしたいことがありますの」

よろしいかしら？ と小首を傾げて。

「私で答えられるのでしたら何なりと」

何が貴女を困らせているのですか？ と柔らかく言う皓孝様。

——ああ、何て嘘くさいヤリトリなんだ!!

だが、ここで引いてはいけない。

負けるつもりで勝負を挑んではいけない。勝負は時の運なんだ!

!!

「貴国から招待状をいただきましたの。そのことで少々・・・」

スツと、手にしていた招待状をテーブルに乗せる。

それにチラリと目をやって、皓孝様の視線は華月に戻ってきた。

「ああ、届きましたか。あのバカがユエにご迷惑をかけたと聞いた時から、用意させていたのですよ」

私はお詫び状をと指示したのですが、上手く伝わってなかったようです。すいません、と先手を打たれた。

ここで、まさしく招待状と言われれば、詭弁をふるって辞退を、と考えていたのだが・・・。

——どこまでも御見通しってわけか。

これが安丹殿相手ならば口先三寸で丸め込むのだが・・・。
やっぱり、皓孝様相手だと上手くないかない。

「では、ハオも中はご存じではありませんの?」

「ええ。これは国に残してきた副官が仕切っておりますので」

びっくりだわ、と笑えば、すいません、と返される。

「中を拝見しても？」

我が国からの招待状が原因でユエの顔が曇っているのならば申し訳ない、などとうっすら寒いセリフを吐く皓孝様に、頷くことで了承を伝えて。

「……………申し訳ありません、ユエ。これでは、さぞ困ったでしょう」

溜息を吐きつつ言う皓孝様に、一縷の望みが……………

「どうして元首様宛なんでしょうね。ちゃんとユエ宛でないという意味がないというのに……………」

……………あるはずなかった。

うん、そんなに世の中甘くないとは思ったけどさ。ちょっとぐらい夢見たっていいじゃないか。

「私宛、ですか？」

「もちろんですよ。ちゃんと、ユエに宛てた内容でしょう？」

「……………招待状、ですよね？」

「ええ。あのバカドモの婚儀に是非ご出席ください、を大義名分に信津にお越しください、と書いてありますね」

「先ほど、詫び状を、とおっしゃってませんでした？」

「言いましたね。ですが、それでも内容は変わりませよ」
「変わらないですか？」

「ええ、内容は、私の指示通りです」

「・・・それ、どう読んでも、脅迫状なのですが？」

「何を言いますか。誠心誠意のお詫びと、招待が綴ってあでしょう？」

「・・・拒否権なしの招待に、招待状の意味はあるのですか？」

「私がここに居るのですよ？ 十分に招待状の役目を果たしているではないですか」

「・・・はい・・・？」

「ほら、ユエはここに来たでしょう？」

・・・

———やられたあっ！！！！

そういうことかっ

招待って、そういう意味かっ

なんて回りくどいことすんだよっ！！

ニツコリと眩しい笑顔の皓孝様と。きつと顔色の悪い華月。

ようするに、あの招待状を持って皓孝様に会いに来た時点で華月の負けは決定していたわけだ。

皓孝様にしてみれば、華月からこの話題を振るように用意しただけの招待状ということだ。

通常、他国からの招待状などは国家元首または国そのものに宛てて送る。特定の人物に宛てるのではなく、あくまでも国交なのだからそれが常識である。

勿論、内容も個人レベルのモノではなく外交に則ったものであるべきであり、出欠の有無、出席者の選別は招待された側の国が行う。

欠席であれば速やかにお断りの旨と必要に応じて品を贈り、出席の場合は代表主席者の名と共に同行人数の回答を行い事前手続きに入る。

――が。

今回、信津国から送られてきた『招待状』は宛先こそ国家元首になつていたが、内容は華月個人に宛てたもの。あまつ、出席者は華月、と招待国側が指名してきている。

外交に則ったところではなく、個人に向けた招待状……いや、脅迫状、だ。

どのへんが脅迫状かって？

国の刻印の入った正式な皇家の便箋と封筒で、正式な国交手段を用いて届けられたにもかかわらず、内容は対個人に終始し、その内容も招待を受けること前提に進められ、断ることのできない内容で綴られたそれはもはや脅迫以外の何物でもないじゃないか！！！！

「私の出席は確定ですか？」

「おや、あくまでも招待状、ですよ」

「……では、正式な外交官を伺わせますわ」

「しかし、あのバカドモがユエ以外で納得するとは思えません」

「あくまでも、光明国の出席者、です」

「では、それにユエも同行を？」

「……私の肩書では正式な場での出席は出来ませんもの」

「光明国では、国家元首代理よりも、外交官の肩書の方が立場が上なのですか？」

「……いいえ。代理であれば、その期間中の公的地位及び決定権

その他に於いて元首と同等位にありますが」

「ならば、問題ないではないですか」

「……まさか……」

「必要であれば、遼東国家元首はその一切をユエに委ねる、と」

——聞いている——！！！！！！

さっきは何も言ってなかったじゃないか！！

一瞬、皓孝様の戯言かとも思ったが皓孝様の目は真剣だった。

本気で、遼東様は華月に代理権を委ねる意思があるのだろう。そして、それを皓孝様は確認した——いや、もしかしたら、もしかしなくても、皓孝様から遼東様にその話を持って行ったのだろう。

「明確な理由なくして、元首が代理を立てることは叶いませんわ」

一応、反撃を試みる。

「今まで国交の薄かった2国との国交樹立を目的に婚儀に出席、では明確な理由にはなりませんか？」

ほんのりと、国益というエサをチラつかせる皓孝様。

「理由としては十分ですが、それだけのものを成そうとするのに、代理では相手側に失礼にあたります」

それが解らぬ皓孝様じゃないだろう。

「対等な国力の国相手ならばそうでしょう。しかし、相手国の国力が明らかに劣っていれば問題は無い」

相手国——つまり、信津国と仙磨国——は、光明国よりも国力は低い、とハッキリと言う皓孝様。

「・・・国力の劣る国との国交に、何の魅力が？」

国益をチラつかせるのならば、それなりの用意があるのだろう。

「輸入権の優先、は魅力にはなりませんか？」

ニヤリ、と笑う皓孝様に、本性を見た気がした・・・。

光明国は、その国力の大部分を商人による税金で賄っていて諸外国からは商人国家などと呼ばれている。国民の大部分が商家に従事しており、自給率が低い。国内での生産ではなく、そのほとんどを輸入に頼っているのだ。

そんな光明国の弱点を突いてくる皓孝様。

ハッキリ言って、輸入権の優先は欲しい。

「とても、魅力的なお申し出ですわ」

隠したところで得は無い。

こちらの手札は無いに等しいのだから、無意味なのだ。

「でしたら、代理の理由には十分でしょう」

たしかに、輸入権が絡んでくるのであれば一外交官では心もとな

い。

しかし・・・

「でしたら、余計に私では役不足でしょう。遼東様に行っていただかなくては」

ことは国益。それも、国にとっての大事。

一補佐官ごときが口を出す問題ではない。

「おや。光明国は、自国の弱点を諸外国にさらすのですか？」

国力の劣る国にわざわざ国家元首が赴くほど輸入権が欲しい、と宣伝するのですか？　と言われて、ぐうの音も出ない。

対等な立場ではないからこそ、易々と国家元首が赴いてはいけない。

外交官では決定権に欠けることから政治的交渉は出来ない。それこそ、相手国に失礼にあたる。かといって、外交官に決定権を持たせればこちらの不利を招く結果になることは明らか。

あくまでも外交官は諸外国に対するパイプ役にすぎないのだ。

さて、ここで状況を整理してみよう。

光明国は信津国から皇太子殿下の婚儀の招待状をもらった。

その招待状は、正式な手順を踏んだ物であり無視することは出来ない。

しかし、その内容は華月個人に宛てた物であり、拒否権は無い。

だが、華月は出席したくない。

皓孝様に直談判に来たが、それすらも皓孝様の手の内だった。

詭弁をふるって回避を試みたが、上手くいかない。

挙句に、事は国交問題に発展。

国益をエサに一本釣りされそうな勢い。↑今ココ。

——どうしてこうなった・・・？

そろりと視線を上げれば、悠然と微笑む皓孝様。

反論できるならしてみろ、と言わんばかりのその顔にメラッと殺意。

用意周到にエサをまき罠を仕掛け、獲物がかかるのを待っていた漁師のように。

網持って待ちかまえられている気がしてならないのですが！！

「ユエ？ どうしました？」

ゆっくりとした動作で席を立ち、こちらに回ってくる皓孝様。

正面に立って目を合わせ、蕩けるような笑みをたたえて両手を握られ。

するりと耳元に移動した口から洩れるのは腰にクルのような低音。

「そのように呆けていては、付け込んでしまいますよ・・・」

——あ、あれ？ もしかして、すでにまな板の上の鯉デスカ・・・？

31・華月16（後書き）

美味しく料理されるんですよ。

望んでませんって。

諦めたらどうですか？

食中毒起こしても知りませんよ。

貴女の毒ならば歓迎です。

・・・・・・。

32・華月17

絢爛豪華な装飾の建物の中。

それに劣らぬ豪華な衣装を纏った本日の主役。

大勢の人が見守る中、厳かに進められる婚儀。

ここは、信津国の大神殿。

本日、信津国皇太子楽相殿下と、仙磨国第三皇女湖李殿下の婚儀が行われていた。

——そして、結局はこうなる、と。

礼装に身を包んで、招待者席ではなく関係者席に座る華月。

隣には当然のように皓孝様が腰掛け、後ろには安丹殿と鷹栄殿――

皓孝様のもう一人の腹心だと紹介された――が立っている。

本来であれば、この席は皓孝様の妻の席。

そこに座る華月。

皓孝様の腹心ですら受け入れている様子のこの状況に、誰も口を挟めない。

——なんで皇帝陛下夫妻ですら何も言わないんだ？！

皓孝様は信津国の第二皇子殿下。今は宰相補佐の地位にあり、ゆくゆくは宰相となることが決まっている。

血筋も地位も申し分なし。加えて、この容姿……。引く手数多なのは明らかだが、どうしてかご令嬢たちからの嫉妬の視線もなく。

———それどころか、その哀れんだ目は何？！

バシバシと寄越される、なんとも形容しがたい視線。

初めは、好物件を横取りした余所者の女に向けられた敵意、だと思っていたが、どうも様子がおかしい。

注意してみれば、そこには、哀れというか、何というか……。ああ、可哀想、みたい。生け贄の子羊に向けるような視線？

そんな視線を、貴族令嬢どころか、信津国の臣下たちからも向けられているのだから居心地は最高に悪い。

例外は、ニコニコとご機嫌な皇帝陛下夫妻と、現宰相閣下（陛下の弟らしい）、腹心の安丹殿と鷹栄殿ぐらいだ。

「ユエ、このあと祝宴がありますが、どうされますか？」

滞りなく婚儀が済み、国民たちへのお披露目のために主役以下皇族が表へと移動する中かけられた言葉。

「どう、とは？」

「出席は自由なのですよ。あのバカの酒乱は有名ですから」

ちなみに、私は欠席ですと、こともなげに返された台詞に絶句。酒乱が周知の皇太子に対して突っ込めばいいのか、祝宴の自由参加というあり得なさに突っ込めばいいのか、わざわざそれを確認する皓孝様に突っ込めばいいのか……。

「第二皇子殿下が欠席では、お立場良くないのでは？」

取りあえず、当たり障りのないところから攻めてみる。

「良いですよ。あのバカとは違う会場で要職たちとの会談が予定されていますから」

わたしは宰相補佐としてそっちに顔を出しますが、ユエはどうしますか？ と問われる。

どうしますか、と言われても、信津国の要職と仙磨国の要職との会談に、無関係の華月が出席できるわけもなく。

—— 一緒に出席、と言われても全力で遠慮しますけどね！！

「街に出てもよろしいですか？」

「ダメです。わたしと一緒にでないなら、外出は許可できません」

市を見て回りたいのです、と続ける前に、一刀両断。

ニツコリ笑顔の皓孝様に逆らえません。

今の言い方じゃあ、華月は皓孝様と一緒に居るしか選択肢がないような気がするが、そこは気づかなかったフリだ。

「・・・でしたら、資料をくださいませ。部屋に・・・」

「生憎と、婚儀に手一杯で資料はまだ揃っておりません」

だったら部屋でおとなしくしてるから先に資料を、と言えば、それも却下される。

「どうしていれば、ハオのお邪魔にならないですか？」

「邪魔などとてもない。わたしは、ユエが隣に居てくだされば嬉しいのですよ」

うん、何となく予想は出来てたけどね！！

しかし、これから出席する会談に、何と言う名目で華月を侍らす気なのか・・・。

——確認するなんて恐ろしいことはもちもんしないけどね！！

「ハオの御仕事の邪魔はできませんわ。私はお部屋におります」

「では、私の私室に案内させましょう」

「・・・・・・は？」

そこで大人しくしててくださいね、と言われて、思わず素の声が出た。

この魔王様は、今、何ておっしゃいましたかね・・・？

「私の私室に、と。そこでしたら、ユエも退屈しないでしょうし」

鷹栄、ご案内を、と言う皓孝様に何も返すことが出来ず。

あれよあれよと、丁寧に頭を下げる鷹栄殿に先導されて、大神殿を後にした。

「ここは、どこでしょう？」

「皓孝様の宮でございます」

「……私室、とお聞きしたような気がいたしますが……？」

「ですから、こちらが皓孝様の“私室”でございます」

「本宮の中の一室、と思っておりますのに……」

「皓孝様は、本宮には執務室以外お持ちではございません」

さあ、お入り下さい、と開けられた扉は、曰く皓孝様の宮の入り口。

要するに、王宮の敷地内に建てられた、皓孝様のプライベートハウスの玄関、だ。

二階建ての建物はアイボリーで、大きめに取られた窓と庭に面したテラス。

周りは背の高い木々に囲まれ、自然の中の別荘のような静かな環境。

他の建物との位置関係を考えれば、容易に部外者が入り込めない位置。

——なんとも皓孝様らしい計算されつくした場所ですこと。

関係の無い人間が入り込めない、ということは、華月も出られない、ということだ。

「華月様、この宮には使用人がおりません。ご不便かとは思いますが、ご了承くださいませ」

そのかわり、一通り物のは揃っているから勝手に使ってくれて構わない、と言う。

「一階の突き当りが図書室になっていますので、よろしければご使用ください」

玄関の右手がキッチン、その正面がリビング、二階に寝室とゲストルーム、ご自由にお過ごし下さい、と頭を下げてクルリと向きを変える鷹栄殿。

「あ、あの・・・勝手に入っても？」

玄関の扉だけ開けて入ってこないどころか、そのまま向きを変える鷹栄殿に待ったをかける。

できれば、一人でここは入りたくないんですがっ

皓孝様の城に置き去りとか嫌なんですがっ

むしろ、本宮のゲストルーム希望です！！

「申し訳ございません、華月様。私は、この宮に入る許可は頂いておりません。それに、華月様と二人、などと皓孝様に知れれば・・・ね？」

にっこりと。

皓孝様とは違う意味で危ない笑顔で言う鷹栄殿に。

色々と諦めた。

——人間、諦めが肝心だよねっ

「・・・わかりました。図書室をおかりしております、とお伝えく
ださいませ」

礼儀として伝言を頼み。

今度こそ歩き始める鷹栄殿を見送って、皓孝様の私宮に入った。

一歩中へ入れば、感じた違和感に首を傾げる。

柔らかいベージュの内装は心地よく、皓孝様の趣味なのか、余計な装飾の一切無い空間。

決して居心地が悪いわけではないが、別荘というか、モデルルームというか、何と言うか・・・そう、生活感が無いのだ。

人の気配がしないのは、鷹栄殿も言っていたように使用人すらココに入れないからだろう。

しん、と静まり返った空間。それでも寒々しくないのは、外から
さんさんと光が入るからか。

意を決して続く廊下を進めば、だんだんと濃くなる違和感。

ここは、皓孝様の私宮のはず。

本宮に私室がないのならば、皓孝様はここで生活しているはずだ。
それなのに、ココには生活感が無さ過ぎる。

キッチンだと教えられた部屋を覗けば、そこに用意されている茶
器。

二人分の茶器と、数種類の茶葉。綺麗に整えられた食器棚の中に
は、ペアで揃えられた食器。

嫌な予感に、背筋に冷や汗が流れる。

恐る恐るキッチンを出て、正面のリビングに踏み入れれば、真っ白なソファと同じく真っ白なローテーブル。

壁際に置かれた棚には置時計と花瓶に活けられた生花。趣味のいいクリスタルの置物は、日の光を受けて輝いている。

ドクドクと心臓が鳴る。

ゴクリと唾を飲み込み、脱兎のごとく二階へと上がる。礼装の長い裾をたくし上げ、階段を駆け上がり、一番大きな扉をバアンっと開け放った。

「ふふ・・・ふふふふふ・・・」

中央に置かれたキングサイズのベッド。上部に置かれた数個の真っ白なクッション。掛けられた薄いココア色のカバー。

奥隣には照明の置かれたキャビネット。少し離れて大きな窓の程近くにはココア色のチェアセット。窓の外にはベランダ。そして・・・

——どーして皓孝様の寝室にドレッサーがあるんだあっ!!

キャビネットの反対側に置かれたドレッサー。化粧台。

男の皓孝様には必要の無い物。

まあ、皓孝様に化粧の趣味があるなら別だが。

しかし、これは、どう見ても女性用。鏡台や椅子の高さが皓孝様用とは思えない。

「生活感の無さ過ぎる私宮に、新品のペアの食器。真新しく揃えられた家具と、窮めつけはドレスサーまで置かれた寝室ってか？」

どうやらここは、華月のための鳥籠のようです……。

32・華月17（後書き）

「華月様、無事お入りになりました」

「ご苦労様ですね、鷹栄」

「本当に用意したんですね、皓孝様・・・」

「急ごしらえの割には、なかなかイイ出来だったな」

「そうでしょう？ ああ、半径1キロ以内で立ち入りは禁止です」

「・・・・・・」

33・華月18

さてさて。

望んじやいないが、籠の鳥です。

どうすっかな〜と考えた結果、図書室に移動してみました。

すんばらしい蔵書の量に圧巻です。知的好奇心をくすぐるチョイスが憎いです。

取りあえず、信津国の法規約っぽいものを見つけたのでそれなりに、窓際に用意されていた長椅子に腰を下ろしてみました。

布張りの長椅子は程良い堅さで、置かれている揃いのクッションが何とも眠気を誘います・・・。

——って、ちがー——うっ

別に、監禁させられているわけじゃないから、勝手にここから出ることはできる。

でも、部屋で大人しくしていることを望んだのは華月だ。予想と違う場所に連れてこられたからといって、勝手に出ていくことは出来ない。一応、華月は国賓として迎えられているのだ。

——それに、まだココが鳥籠と決まったわけじゃないし！！

皓孝様の口から、何かを言われているわけじゃないのだ。本宮のゲストルームが一杯だったから、皓孝様の私宮に招いてくださるだ

けかもしれないし!!

あのドレッサーも、皓孝様の奥方のかもしれないしっ

——皓孝様が独身だとか、どう見ても新品だとか、そんなんは考
えちゃいけないだ!!

何とか自分を奮い立たせて、図書室に居るわけです。

手にした本を眺めながら、この信津国に来るまでの経緯を思い起
こす。

皓孝様のお部屋で、あの後がつつり喰われた。そりゃあもう、が
つつりと。ふわふわのピンクの世界どころか、強烈な赤の世界だっ
たわけですよ。

どうやら、この世界では貞操観念が低いらしい。実際華月も初め
てではなかったし、皓孝様は言わずもがな。肌を合わせたからとい
って責任問題に発展するわけでもなく、後宮に入れられるわけでも
ない。

気に入ったからうなノリでスルのが普通らしく、華月に嫌悪感も
無く。そんな世界だから、下手に嫌がるのもおかしくて、流される
ままに喰われた。

相性が良すぎて止まらず、そのまま皓孝様の隣で眠り朝を迎えた。

国交問題にまで発展し国益をチラつかされて回避一切を塞がれた
状態だったので、抵抗するのもバカらしかったのも事実。

華月が信津に渡ること、輸入権の優先が手にはいるのならば安
いものだと結論付けたのも事実。

国益を一番に考えた華月は、どこまでいっても国家元首の器だっ
た、ということだろう。

遼東様に報告を上げ正式に元首代理を任され、信津に渡る用意を調べて国に帰る皓孝様たちに同行した。光明からの出席者が元首代理の華月だけなのは今更だろう。

バカドモは案の定二日酔いが抜けきれず、皓孝様の宣言通りに転がされていた。

湖李様の船に楽相様も同船させ、信津の船に皓孝様と華月が乗った。

出国するときの遼東様の含みを持たせたイイエガオも、安丹殿の物言いたげな眼差しも、道中の爛れた皓孝様との関係も、すべて記憶に嚴重に蓋をするのを忘れてはいけない。

あくまで華月は国賓であり、仕事としてきているのだ。皓孝様も第二皇子で宰相補佐という地位にいらっしゃる。公私混同はされないだろう。

華月の今回の目的は、信津国と仙磨国との間の輸入権の優先を獲得すること。そのためには、皓孝様との関係もさることながら仙磨の要職たちとの関係にも気を使わなければならない。

「なのに、何でここで籠の鳥なんでしょうねえ」

「おや、ユエはここがお気に召しませんでしたか？」

ポツリと漏れた独り言に返事が返ってきて心臓が止まるかと思った。

そろりと顔を上げれば、ここ数日で聞き慣れた声の持ち主が悠然と立っている。少し崩した礼装姿がなんとも色っぽい。

「ハオ。いやですわ、いつからそこに？」

「たった今ですよ。ユエがなにやら物思いに耽っていたので声がかけられなかったのです」

その表情もまた誘われますね、などと言いながら近づいてきて、長椅子に腰掛ける皓孝様。姿勢を正そうと身じろげば、なぜだかそのまま膝へと抱き上げられた。

——何だろうね、この甘ったるいのは……。

「物思いなどではありませんわ。仕事のことを少々。早いお戻りですが、会談は済みましたの？」

これ以上の甘ったるいのはゴメンだと仕事の話題をふってみる。気になっているのは確かだ。

「ええ。会談と言っても、事前に纏めた物の確認と担当者との顔合わせだけです。それほど時間はかからないのですよ。正式な調印は明日ですし、今日は終わりです」

「そうでしたか。お疲れさまです、ハオ。では、このまま私も仕事のお話を？」

華月が信津国に来たもう一つの目的は、商法並びに雇用法の改正指導だ。

国の生活水準をあげるために、租税効果を安定させよう、という試みだ。一部の貴族階級が肥えていく今のままでは、いつまでたっても国民の生活水準は上がらない。腐敗した毒を出すために、皓孝様は大がかりな改革を行うつもりらしい。

「仕事の話も大切ですが、私としてはもっと大切なことがあるのですよ」

言いながら、ぎゅうっと抱き込まれる。

「お仕事よりも、大切なこと、ですか？」

なにかしら、とすつとぼけてみる。

流されてなるものか！ と頑張ってますよ。

「私にとっては、何よりも大切なことです」

わかりませんか？ と瞳をのぞき込まれて。
するりと頬を撫でられる。

「“鳥籠”のことかしら？」

斜め上の返答で、回避を試みる。

「ユエを人目に晒したくなくてココを用意しましたが、嫌でしたか？」

横抱きにされた膝の上。耳元に寄せられた唇から漏れる重低音。
慣らされた体はピクリと反応してしまう。

回避失敗。

——だから、どうしてココにもってくるんだ！！

「イヤではありませんわ。でも、ハオ。“鳥籠”は否定するところですよ」

耳元に寄せられていた皓孝様の髪をサラリと撫でて、不自然にならない程度に距離を取る。

目を合わせて微笑めば完璧だ。

「ユエが捕らわれてくれるのなら、ここは鳥籠。ユエは籠の鳥です」
「ふふ……。私を捕らえておく籠は、この宮ではなく、この腕でしよう？」

きつく囲われた腕の中。露わになっている鎖骨付近に頬を寄せれば、息を飲むのがダイレクトに伝わる。

「この腕に、捕らわれてくださる、と？」

「あら、今まさに、捕らわれておりますわ」

本気の懇願に、クスリと笑って軽く返す。

正式な国賓に無体はできないだろう、と思ったのだが……。

「では、逃がす必要はありませんね。今日は無礼講。どこにも遠慮はいらないですよ？」

そのまま立ち上がられて、思わず皓孝様の首に縋りつく。

見た目以上に力のある皓孝様は、いともたやすく華月を抱き上げたまま歩を進める。

「ハオ、どちらに？」

聞くだけ野暮だとは思っていますが。確認は大切なんです。

「ユエのために逃えた部屋があるのです。気に入っていただければ良いのですが」

ユエの荷物もそこに運んであります、と言われて、やっぱりあの寝室は違おうのだろうと一安心。

あそこに、華月の荷物はなかったはずだ。

「歩けますわ、ハオ。離してくださいな」

往生際が悪かろうが、このままはいただけない。このままベッドに放り込まれたらどうするんだ。

「一仕事終えた私に、ご褒美をください」

「ご褒美、ですか？」

どうしてそんなもんやらなきやいけないんだ、と思いながら、ふんわりと笑ってみせる。

皓孝様は、華月のこの顔が好きらしい。

「このまま、ユエをこの腕に。片時も離れないでください」

にっこりと。

何の裏もありません、というような顔でおっしゃる皓孝様。

だが、騙されてはいけない。こんな顔の皓孝様にうっかり了承しようものなら、頭からガブリと食べられる。

ええ、経験者は語る、というやつですよ。

「お断りです。お部屋までなら、大人しくしておりますわ」

それが不満ならばすぐに降りる、と伝えれば。
しかたがない、とばかりに肩をすくめて了承を伝えられた。

「ユエはなかなか落ちてきてはくさいですね」

私の愛が足りないのでしょうか？ と顔を覗き込まれる。

「何度も申し上げておりますでしょう？ 私では役不足ですわ」

抱かれてからことあるごとにされる求婚に、最近ではキツパリと否を返す。

今は、セフレのような関係に落ち着きつつある。
できれば、このままの関係でズラかりたい。
帰国してしまえばこれ以上発展はしないだろう。

「ユエ以上に相応しい方など居ないのですが。何より、ユエ以外欲しくない」

しゃべりながらも歩を進め、ぽすん、と降ろされたのはやはりあの部屋で。

「どうです？ ユエのために誂えたんですよ」

華々しい内装より、落ち着いた雰囲気の方が好みでしょうか？
と微笑まれ。

まったくもってその通りで、ぐうの音も出ない。

「素敵なお部屋ではありますが・・・。主寝室でしょうか？」

皓孝様はどこで寝るんだ、と直接聞きたいのをグツと堪えて、遠

回しに聞いてみる。

「ええ。片時もユエを離さなくてもいいように詔えた部屋です。衣裳も小物もすべて揃っていますよ」

——やっぱりか——！！

わかってたけどね！！
そうじゃないかとは思ってたけどね！！

「ありがとうございます、ハオ。嬉しいですわ」

覆いかぶさる皓孝様に、ニッコリ笑顔でお礼を言って。
これ以上の抵抗は諦める。

どうやったって皓孝様は逃がしてくれないし。
だったら、余計な体力は使いたくない。
この鳥籠の居心地はよさそうだし、と言いつつながら。

—— 一番の問題は、皓孝様が嫌でなくなっている華月の心だな・
・・。

何となく見えてきた華月の終焉。

今回は惨敗の予感です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0269n/>

死神様の雑用係！

2011年10月23日21時26分発行